

2024 年度 文部科学省委託事業

「障害者の多様な学習活動を総合的に支援するための実践研究」

神戸大学・学ぶ楽しみ発見プログラム

～知的障害青年のための大学教育の創造～

Kobe University Program for Inclusion (KUPI)



2025 年 3 月

神戸大学国際人間科学部

神戸大学・学ぶ楽しみ発見プログラム (KUPI)
～知的障害青年のための大学教育の創造～

目次

1. 6年目のKUPIを終えて	2
2. プログラムの概要と経過.....	7
1) 募集要項とチラシ	8
2) 説明会開催	8
3) プログラムの内容作り	17
4) 入学者募集の状況と応募、選考	19
5) 神戸大学学生のメンター募集	19
6) 大学教務の協力で「特別の課程」制度の発展を	19
7) 保険の加入について、コロナ感染拡大防止について	20
8) 入学式の様子	20
9) 卒業研究発表会と修了式の様子	20
10) 4回目受講生の扱いについて	21
11) 卒業生の授業参加について	21
3. プログラムの内容.....	22
1) 「よりよく生きるための科学と文化」	22
2) 「障害共生教育論」	42
3) 「話し合う！やってみる！」	63
4) 課外活動「WILL キャンプ」に参加をして	83
4. KUPI 学生の声	85
5. 4回目受講生による卒業研究概要.....	87
6. プログラムから何を学んだか	91
1) 授業担当教員	91
2) 一般学生	96
3) メンター学生、ボランティア	105
4) KUPI を見学して.....	110
7. コーディネーターの感想.....	111
8. KUPI に関する論文、発表、原稿掲載	114
9. おわりに	115

1. 6年目のKUPIを終えて

津田 英二

小学生が入学して卒業するまでの時間

今年度の「神戸大学・学ぶ楽しみ発見プログラム」も、たくさんの方たちの温かいまなざしの中、充実感に満ち溢れた教育実践であった。2019年度から開始したこのプログラムは通称KUPI（Kobe University Program for Inclusion）と呼んでいる。10月から2月の約4か月間、週3回、夕方になるとワクワクした表情で知的障害のあるKUPI学生たちが六甲山の中腹にあるキャンパスに集まってくる。中にはかなり遠方からはるばるやってくるKUPI学生がいるのも、例年と同様だ。今年度は12名のKUPI学生が通ってきた。

そして2月13日の修了式をもって、KUPIは6年目の取り組みを終えた。6年間といえ、小学生が入学してから卒業するまでの期間である。人が育ち、実践が成熟するのに十分な期間といえる。にもかかわらず、実践している渦中の私たちは、いまだに実験的な取り組みであり、「本来であればもっと条件のよい大学で実施すべき取り組み」だという意識を持ち続けている。少しずつ広がってきたとはいえ、いまだに認知度の低い取り組みであり、「知的障害者が大学で学ぶ」ということの意義について世間の大半の人たちは懐疑的であろう。また、制度的な脆弱性を否むこともできず、財政的に言えば文科省からの受託経費に依存する状態が続いている。すなわち、文科省から来る資金源が途絶えれば、KUPIはあえなく閉鎖を余儀なくされる。

そうした脆弱性はKUPI関係者に広く共有されている事実である。それゆえもあって、KUPI学生やその家族からは、KUPI存続を願う声が年々大きくなっている。今年度の私の授業（国際人間科学部「社会教育課題研究（障害共生教育論）」との合同授業）では、「いのちをつなげる」をテーマにした表現活動に取り組んだが、「次の世代に残したいもの」としてKUPI自体にフォーカスしたKUPI学生が数名いた。彼らの生活、あるいは人生にとって、KUPIが大切なものになっているという実感は、年々大きくなっている。

こうしてKUPIをめぐる実践研究のテーマが2つ浮かび上がる。一つは、「知的障害者に大学教育を開く」という実践が、知的障害者やその家族の生活や人生にいかなる影響を与えているのかというテーマであり、もう一つは、そうした実践を大学に根づかせていくためには何が必要かというテーマである。いずれも、最初から意識してきたテーマであり、毎年のように繰り返し言及してきたテーマである。しかし同時に、どちらのテーマも、説得力をもった答えを導き出すためには、やはり実践の積み重ねが肝要であり、実践の経験を糧に漸次的に答えの説得力を増していく性格のテーマだと思う。その意味で、少なくとも1年目のKUPIよりも、6年目を終えた今だからこそ説得力をもって言えることがあると思う。

「知的障害者に大学教育を開く」実践の意味

まず、世間の考えと大学関係者の考えとの齟齬が大きいところだと思うが、大学は「無駄」がなくなったら大学としての機能を果たせなくなる。近年、特に国立大学法人化以降といってもいいと思うが、大学から「無駄」を排除しようとする圧力が強まっているように感じられる。数値化可能な目に見える成果、あるいは「役に立つこと」「金になること」を求められる圧力が、大学教員に対してもじわりじわりと強まってきた。

多くの研究は、研究者が生涯をかけて追究する問いを背景にしていたり、答えに近づくための方法を手探りで探していたりする。それらの研究は、試行錯誤を繰り返して失敗をたくさん重ねながら、長い時間をかけて答えらしきものを見出だしていくものだ。もちろん、研究成果が出ることも、研究結果が「役に立つ」ことも好ましい。が、成果が出ない研究はつぶされても仕方がないとか、「役に立つ」研究しか認められないなどといった事態が進行すると、「短期的に結果が出る研究」ばかりが横行し、じっくり取り組む研究は淘汰され、大学の機能は大きく低下する。少なくとも一部の大学関係者は、このように大学にとって大切な「無駄」の除去と引き換えに、決定的に重要な社会的な遺産が切り崩されてきていると感じている。（こうした大学の変化については、佐藤郁哉『大学改革の迷走』ちくま新書、2019年；竹中亨『大学改革』中公新書、2024年など参照）

そうした観点からも、KUPI は数々の失敗を伴う「壮大な実験」であるべきだと私は思う。少なくとも、知的障害者が大学で学ぶことの「効果」をあまり安易に導き出さないほうがよいと思う。したがって、KUPI の取り組みが、「就労につながった」「知的能力が高まった」といった安直な「役に立つ」目標から距離を置くべきだとも考えている。KUPI の実践をめぐっては、もっとじっくりと時間をかけて人間に大きな変化をもたらすということを論じていきたい。大切な「効果」は、人間形成のもっと根幹部分に働きかけるものであるかもしれないし、KUPI 学生から同心円的に変化が広く波及していくようなものかもしれない。少なくとも、既存の社会と文化に迎合し、それらに適応していくことを「効果」として言い立てるようなことは慎みたい。

とはいえ、こうした「壮大さ」が、研究成果の乏しさの言い訳になってはいけないとも思う。研究という側面でも、できることを着々と積み重ねていくことがなければ、「実験」にすらならない。いまだに本丸に切り込んだ研究成果を著すことはできていないが、今年度はメンターを経験した学生たちが、KUPI 学生の学びの内容を授業記録から紐解く取り組みに着手してくれている。また、本報告書の巻末に KUPI の取り組みから生まれてきた研究の過程を示す成果の一部を再掲している。こうした営為が広がっていくことも、この実践の喜びのひとつである。

大学教育の本質は、「既にある知識を伝達する」教育、「伝達されたことを正確に頭に刻み込む」学習ではない。こうした教育と学習を P. フレイレは「銀行型教育」と呼び、人間の力を奪う営みとして批判している。そうではなく、個々の学習者が、自分自身の経験、環境との相互作用、他者とのコミュニケーションを通して、問いを立て、新たな知識を産

み出していく過程を創り出していくのが、大学教育の本質だと考える。「知識は教えてもらうものではなく、自分で発見するもの」であることは、認知科学の研究でも明らかにされている（今井むつみ『学びとは何か』岩波新書、2016 年）。「わかっていることを理解する」のではなく、「わからないことを問うていく」のが、大学教育である。その営みにおいては、KUPI 学生も神戸大学の学生も、そして教員も対等な探究者である。

こうした観点から KUPI 学生の学びの意味を探究することは、個性的な学習者の産み出す知が、他者との間にどのような共鳴を惹き起こしていくか、産み出された知はその後の個々人の知の生産にどのようにつながっていき、その結果としてどのような人間どうしの相互作用、ひいてはどのような社会の形成に結びついていくのか、といった問いにつながっていくのではないかと思う。すなわち、KUPI に関わった人たちが、その後どのような人生を歩んでいくのか、その人たちがどのような社会の形成者として立ち現れていくのか、ということが、実践的関心であると同時に、研究の問いでもあるのである。

大学での実践を支えるもの

もう一つのテーマは、もっと政策科学的な性格をもつ。「知的障害者に大学教育を開く」実践をいかに大学に根づかせていくことができるか、という問いである。この問いは、当然のことながら一つ目の問いと深く結びついている。「成果」を示すことで、この実践に対するより大きな投資を期待できるからである。しかし、学びが就労に結びついたり、教えられたことが効果的に身に付いたりといった、短期的な観点での「成果」を示しても、おそらく最後まで「それをなぜ大学でやるのか」という問いには答えることができないだろう。つまり、大学の持っている固有の要素と結びつけて、この問いを説明しなければならない。

幸いなことに今年度、KUPI は二つの大きな取材を受けた。一つは、株式会社ダイヤモンド社のオンラインマガジンの取材であり（福島宏之「“学び”での「自分を成長させたい」思いと、「学習者に寄り添う」大切さ」『HR ONLINE』2024 年、<https://diamond.jp/articles/-/355102>）、もう一つは、放送大学のドキュメンタリー取材である（放送大学「学ぶって楽しい！～知的障害者と高等教育～」）。媒体は異なるが、どちらもていねいな取材を経て、とても素敵な作品に仕上げていただいた。実践者である私たちが観ても素敵な作品だと感じるのは、取材者たちが先入観を排し、私たちのロマンを共有しようと努力し、実際に私たちが求めている価値を理解してくださったからだと思う。

また、今年度は、全国の自治体や学校などで KUPI の話をする機会をいくつもいただいた。国際学会を含むいくつかの学会でも KUPI の話をした。さまざまな人たちを相手に KUPI の話をする中で、KUPI の取り組みが人々の共感を引き起こす内容をもっていることを実感する。

放送大学の番組では、「大学教育と最も遠い位置に置かれている知的障害者に、大学に

来ていただくことを通して、私たち自身が変わっていく」という声、また「なぜ知的障害者は大学で学ぶことができないと思うの？」という声が拾われている。大学とは何か、大学教育はどうあるべきか、という問いが、これらの声の源にある。私たちがどのような価値を大切に、どのようなロマンを追い求めているのかということも、こうした問いと結びついている。整理するならば、いかにしてインクルーシブな社会に向かっていくことができるか、その運動に大学がいかに関与しえるか、という問いである。

なお私たちは、インクルーシブな社会とは、すべての人がウェルビーイングを追求し実現することのできる公正な社会、排除のない社会だと理解している。インクルーシブな社会には、人類がめざすべき価値が含まれており、また大学はそうした価値の実現に大きな役割を果たすべき機関だと考えている。

アメリカには、高等教育機会法 Higher Education Opportunity Act という法律がある。大学に公正な社会を実現する責務を課しており、アメリカに知的障害者を対象とした大学のプログラムが数多く存在する背景となっている法律である。日本にはこのような趣旨の法律は存在しない。それどころかこの法律の精神への理解そのものが欠如しているのではないだろうか。大学の大量化が進む中で、「エリート養成機関としての大学」と「若者たちがモラトリアム期を過ごすレジヤランド」という分裂したイメージが、日本の大学を取り巻いているのではないか。一方では「企業社会を支える優秀な人材の排出」が求められ、他方で「役に立たない巨大で硬直した大学組織」への批判が続いている。果たして日本社会は、大学に「公正な社会を実現するミッション」を期待しているだろうか。

すなわち、私たちが KUPI の実践を通してたたかっている相手は、「知的障害者に大学教育は必要ない」とされる価値観であり、その価値観の背景にある大学教育に対する古い認識、インクルーシブな社会に対する無理解なのだと思う。そして、このたたかいは、取材を経て仕上げていただいた2つの作品のように、多くの人々への共感を求めることによって進んでいく。私たちは、もっと共感を得るツールを持たなければならない。

そして7年目に向けて

今年度の KUPI の授業実践の象徴になったことの一つに、階段アートの制作がある。階段アートは、2022 年度の取り組みでも制作されたが、大掃除の際に撤去されたため、今年度新たに制作することとなったものである。そもそも、階段アートに取り組むことになったのには、木曜日の話し合い学習の中で、「教室のアプローチにある階段が暗くて、足元に不安のある人にとって危険だ」という意見が出され、階段アートによって視覚的に安全性を向上させることができるのではないか、という判断があったことと、さらに「KUPI を神戸大学の学生に知ってもらう」ためにも階段アートが有効だろうという結論に至ったという背景がある。とても KUPI らしい、誇らしい取り組みである。

しかしこのような取り組みがなされる背景には、同じキャンパスを利用する学生たち、そして教員にも、KUPI の存在は周知されていないという事実がある。KUPI を通して社会を

変えていくということを意識していながらも、実は足元さえ変えることができていないという現実がある。足元を変えるためには、生き生きとした実践の力が不可欠である。多くの人を巻き込んで、巻き込まれた人が「これはおもしろい」「これは意味のある活動だ」と思ってもらわなければならない。今のところ、そうした力が KUPI にはあると思う。その証左が、2つのメディアの作品に体现されている。この力を持続させていくことが、「定着期」ともいうべきこれからの KUPI の大きな課題になると思う。

また、KUPI の意義を言語化する努力も、引き続き着々と積み重ねていくべきだとも思う。例えば KUPI 学生の家族の言葉を十分に拾えてきていない。KUPI 学生の最も近くで、KUPI 学生の変化を感じ、自分自身の喜びも感じているはずの家族は、KUPI の実践の意義を雄弁に語ってくれるはずである。

7年目の活動では 6年間の KUPI の実践の蓄積を大切にしながら、淡々と、そして着々と KUPI の経験を他者に伝え、共感の渦を広げていきたい。

2. プログラムの概要と経過

2019 年度から開始したプログラムは 6 年目が終わり、今年は 3 名の卒業生を送り出した。4 回受講した者は卒業をするため、合計すると 8 名が卒業をしたことになる。

プログラムの準備は例年通り 7 月から始まった。入学式までの 3 か月間でプログラム内容の計画と募集の準備、説明会や選考会の実施、広報、大学事務との調整を一気に進めた。今年度は初めて受講日の変更を行った。オムニバス授業は水曜日から月曜日に変更、話し合い活動は金曜日から木曜日に変更をした。変更理由は、オムニバス授業は先生方の都合のつきやすさを考慮した。話し合い活動は金曜日の 5 限に教職に関する授業があるためメンター学生が参加しにくいことや「よるあーち」に参加をしている KUPI 学生やメンター学生が「よるあーち」に行けないため変更を行った。「よるあーち」とは神戸大学と神戸市が連携して設置している神戸大学の施設で申込みをすれば誰でも利用できる。2025 年で 20 周年を迎えるそうだ。20 年も前から多様な人たちが楽しめる居場所があるなんて、すごいことだ。子ども食堂もやっている。話を戻すと、多くの KUPI 学生やメンター学生が利用しているため曜日の重なりを避けた。

月曜日は「よりよく生きるための科学と文化」で大学教員 7 名と神戸大学附属特別支援学校の教員 2 名が KUPI 学生のために特別授業を行った。今年も新しい分野の先生方に声をかけたところ快く引き受けてくださった。先生方が KUPI 学生の学びを支えてくださっている。一回の授業のためにわかりやすい資料の作成と授業の構成を考えてくださったことに感謝を伝えたい。授業では KUPI 学生だけでなくメンター学生もワクワクしながら知らない世界について一緒に学んだ。

火曜日は津田教授が「障害共生教育論」の講義を担当した。一般学生の履修科目になっている授業に KUPI 学生が入って一緒に受講をする。今年のテーマは「いのちをつなぐ」で、初めてテーマソング「いのちのうた」（作曲 Miyabi、作曲 村松崇継）が登場して、授業の最初に歌うことが恒例となった。KUPI 学生の L さんはいつも電子ピアノを津田教授の研究室から運んで接続をしてくれた。津田教授かメンター学生の高橋さんがピアノを弾いて全員で歌った。授業の前半（10 月～11 月前半）は 3 グループに分かれて、大切にしていることや大切にされた経験を語り合った。KUPI 学生は写真やアルバムを持参して家族から聞いたエピソードや経験を話した。発表資料はパワーポイントを作成したが、パソコン操作が苦手な KUPI 学生は一般学生やメンター学生に教えてもらった。後半（11 月中頃～1 月末）は過去→現在→未来につないでいきたいものや大切な場所、思いを話した。話し合いを重ねて、何をつないでいきたいか問うて制作を行った。

木曜日は「話し合う！やってみる！」のテーマで KUPI 学生とメンター学生が話し合って活動内容を決めた。コミュニティボールを使用して行う哲学対話や構内の施設を利用した活動の他、イギリスのカーライルピープルファーストとのオンライン交流や「階段アート」の制作を行った。カーライルピープルファーストとの交流は 2020 年度に津田教授の授業で行ったが、その後不定期で開催され、今回は「話し合う！やってみる！」の中で取り組ん

だ。

今年も大勢のボランティアが授業や活動を支えてくれた。学生や社会人学生の方が毎週のように参加をして KUPI 学生との会話や学びを楽しんだ。メンター学生のふり返りにも参加をして、より良くなることを夜遅くまで話し合った。本書でメンター学生と出てくる中にボランティアさんが含まれていることを始めに伝えたい。

募集は昨年度と同様、「特別な課程」履修証明制度を利用して行った。大学の事務（教務学生係）は KUPI 学生の受け入れや合格通知書と履修証明書の発行手続きをしてくださった。KUPI 学生の個人情報の管理はコーディネーターが行った。

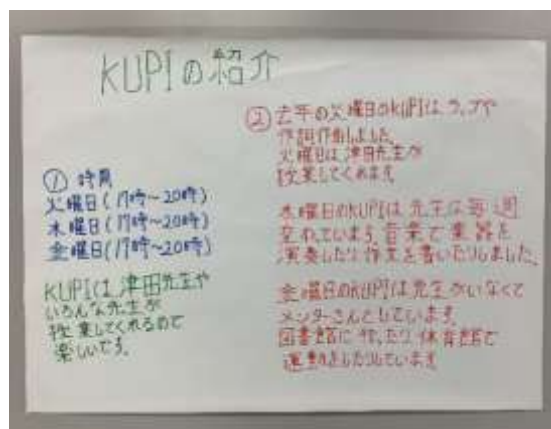
1) 募集要項とチラシ

昨年度の内容を元に修正を行い、募集要項、チラシ、説明会案内、願書、前年度のプログラム内容など一式をセットにして募集に備えた。7 月下旬に津田教授がホームページに募集要項の情報を公開して学生募集がスタートした。コーディネーターは昨年度の受講者にメールで知らせる他、兵庫県教育委員会、神戸市教育委員会、神戸大学業務支援室、就労移行支援事業所（神戸市内）、手をつなぐ育成会などにメールで募集の案内を送った。今年度は 10 月半ばに近隣の特別支援学校（18 校）の進路担当の先生宛に KUPI の見学案内を送ったが申込みはなかった。

（資料）募集要項全文、募集チラシ

2) 説明会開催

8 月 27 日に説明会を実施した。参加者は 10 組。再受講生は KUPI 学生が一人で参加する人もいた。「特別な課程」履修証明制度やプログラム内容の説明を行い、受講の様子は写真やエピソードを交えて話をした。説明資料の中に 2023 年度の活動で KUPI 学生が作成した「KUPI の紹介」も加えた。



（パワーポイントから一部抜粋）

自己紹介をしてもらおうと授業内容に興味を持つ人や友だちを作っておしゃべりをしたい人が多かった。再受講生は好きな授業を話す人もいて、「今年は〇〇先生の授業はあるの？」と質問をした。初参加の人は20時に終了して帰宅することへの不安を話したので、家族が車で迎えに来ることが可能な場合は構内で待機してもらえことや、帰りのバスの時間を決めて先に帰宅できることを伝えた。説明会終了後に出願を受け付けた。

(資料) 説明会の案内

2024(令和6)年度

神戸大学・学ぶ楽しみ発見プログラム

～知的障害青年のための大学教育の創造～

入学者募集要項

【プログラムの趣旨】

神戸大学・学ぶ楽しみ発見プログラムは、大学の資源を無理なく効果的に活用することで、言語によるコミュニケーションが可能な知的障害のある青年に対して、学ぶことの楽しさを感じ、自己理解や他者理解、社会認識を深め、人格を陶冶する機会を提供するプログラムです。大学の知へのアクセスから最も遠ざけられてきた知的障害者の学びに貢献する方策を求める事業として、2019年度から開始しました。6年目の今回も、兵庫県教育委員会と協働ですすめる「学校卒業後の障害者の学びを支援するための地域連携コンソーシアム構築事業」(文部科学省受託研究)の一環として実施します。

このプログラムに参加する知的障害学生は、対話的環境の中で大学の知の世界に親しみ、仲間や一般学生と共に学ぶ機会を得ます。困った時には相談役の学生の支援を受けることができます。十分にこのプログラムの学びに参加した学生には、履修証明書が交付されます。

なお、対面での授業ができないときには、WEB会議システムを利用した授業を行うことになります。

実施期間 2024年10月～2025年2月

場所とアクセス 神戸大学大学院人間発達環境学研究科(神戸市灘区鶴甲3-11)

神戸市バス36番系統 鶴甲団地行

「神大人間発達環境学研究科前」下車すぐ

(36番系統のバスは、阪神御影、JR六甲道、阪急六甲の各駅を通ります)

【プログラムの内容】

月曜日 「よりよく生きるための科学と文化」

教育学、哲学、音楽学、自然科学、美術、ダンスなどを専門とする大学教員が、本プログラムのための特別授業を行います

火曜日 「障害共生教育論」

神戸大学国際人間科学部の授業に参加をして、本プログラムに参加するみなさんと一般学生が話し合いながら共に学び、あるいはお互いに学び合う授業を創っていきます

木曜日 「話し合う！やってみる！」

やってみたいことを話し合って計画を立てます。外にも出かけます。神戸大学生も一緒に研究や創作活動をします

課外活動 神戸大学が主宰するいくつかのプログラムに参加をすることができます(任意)

それぞれのプログラムについては随時お知らせします

一日の流れ（一例）

	月曜日	火曜日	木曜日
集合場所	神戸大学	神戸大学	神戸大学
～17:00	夕食を食べる、自由に過ごす	夕食を食べる、自由に過ごす	夕食を食べる、自由に過ごす
17:00～	授業 「よりよく生きるための 科学と文化」	授業 「障害共生教育論」	プログラム 「話し合う！やってみる！」
18:00～	休憩	休憩	休憩
19:00～	ふりかえり	ふりかえり	ふりかえり
20:00	終了	終了	終了

入学から修了までの流れ

2024 年 10 月 1 日（火） 入学式、オリエンテーション

2024 年 10 月 3 日（木） 授業開始日

2025 年 2 月 12 日（水） 修了式（予定）

【募集について】

募集人数 10 人程度

入学条件 ・ 高等学校あるいは特別支援学校高等部を卒業していること
→ 出身校についてご不明な場合は早めにお問い合わせください

- ・療育手帳をもっていること
- ・プログラムの方針を理解し、学ぶ意欲があること
- ・言語によるコミュニケーションをとる手段があること
- ・実際的な読み書きの力があること
- ・プログラムに対する家族の理解があること
- ・期間中、月・火・木曜日の 17 時までに来られること
- ・自力通学が可能なこと

必要経費 ・ 受講料（50,000 円） 修了までの全額です
・ 授業により教材費、活動費を徴収することがあります
・ 食費（5 時から始まる授業の前に学内施設で夕食を食べる場合）
・ 参加任意の課外活動費（実費）

説明会 日時 2024 年 8 月 27 日（火） 17:00～18:00

場所 神戸大学大学院人間発達環境学研究科（神戸市灘区鶴甲 3-11）

神戸市バス 36 番系統 鶴甲団地行「神大人間発達環境学研究科前」下車すぐ
F 棟 2 階 263 室にお越しください

- ・ 電話またはメールでお申込みください
（中止の場合は連絡をいたしますので申込みをお願いします）
- ・ 予定が合わない方はご相談ください。個別に案内をします
- ・ 当日は体調をご確認のうえご参加ください

【入学選考について】

- 選考方法 ・書類選考
・面接（本人）
・簡単な作文
- 出願書類 ・特別の課程履修願書Ⅰ通 記入例はホームページ参照
・学ぶ楽しみ発見プログラム入学申請書Ⅰ通 記入例はホームページ参照
・保護者同意書
・出身学校の卒業（修了）証明書 注）卒業証書のコピーではありません
*最終学歴が専門学校の方は高等学校（特別支援学校）の証明書を提出してください
*願書を送付する際に証明書が間に合わない場合は選考日に提出をしてください
*当プログラム再受講の方は提出不要です。「〇年度に受講をしました」のメモを願書に付けてください
・書類選考結果の通知について（下半分を切り取って提出）
- 出願先 〒657-8501 神戸市灘区鶴甲 3-11
神戸大学大学院人間発達環境学研究科 ヒューマン・コミュニティ創成研究センター
津田・黒崎宛て **願書在中**
*出願書類は折らずに送付をお願いします
- 出願締切 2024 年 9 月 2 日（月）必着
注）神戸市内で投函をしても到着までに 2 日以上かかることがありますのでご注意ください
- 応募者多数の場合、選考の前に書類選考を行うことがあります
- 選考日時 2024 年 9 月 5 日（木）夕方～ グループ面接と作文があります
- 選考会場 神戸大学大学院人間発達環境学研究科（神戸市灘区鶴甲 3-11）
- 合否発表 2024 年 9 月 6 日（金）普通郵便で発送予定
- 入学説明会（合格者のみ） 2024 年 9 月 25 日（水）夕方～

【問合せ先】

〒657-8501 神戸市灘区鶴甲 3-11
神戸大学大学院人間発達環境学研究科
ヒューマン・コミュニティ創成研究センター黒崎・土居まで
電話 078-803-7970 FAX 078-803-7971
水曜日 13:00～19:00
Mail : krsksc@people.kobe-u.ac.jp



以下のホームページから 2024 年度 募集要項、出願書類をダウンロードできます

「神戸大学・学ぶ楽しみ発見プログラム」で検索（7 月下旬ホームページ更新予定）

<http://www2.kobe-u.ac.jp/~zda/KUPI.html>

※本事業は、実践的研究として実施するものですので、個人情報等の点で細心の注意を払った上で、プログラムの様子などについて学会等で発表する場合があります

Q&A

1. 入学したいけれど、私にはむずかしいのでは？

大丈夫です。大事なのは学びたいという意欲です。たしかに大学の先生の授業ですのでレベルは高いですが、ゆっくりとわかりやすく進めてもらいます。また、神戸大学の学生さんに協力してもらい手伝ってもらいます。

2. 授業でわからないことがあると、どうしたらいいのでしょうか？

このプログラムは、初めての試みですので一緒に取り組んでいきます。なんでも質問してください。また、付いてくれる神戸大学の学生さんにも気軽に相談してください。

3. 曜日によっては、17時に間に合わないことがあります、大丈夫ですか？

大丈夫です。仕事や用事で遅れる場合など事前にわかれば、授業内容の説明や途中からの出席に合わせてサポートします。

4. 修了したら、何か資格がとれますか？

このプログラムは、神戸大学の履修証明制度を利用します。修了しても資格や卒業認定にはなりません。KUPIとしての履修証明書は修了式でお渡しします。

5. 入学選考は、面接や作文もあってむずかしそうですが？

入学者の選考にあたっては、まず大学で学びたいという意欲を知りたいと思います。自分のできる範囲で気持ちを伝えてください。簡単な作文ですので、書ける範囲でけっこうです、また、パソコンで書きたいという場合は申し出てください。

6. お金がかかりそうで心配です。

受講料は総額で 50,000 円がかかります。それ以外には活動費の実費(たとえば、金曜日の活動で出かけた場合の交通費や食事に行った際の食事代など)が必要です。それ以外には基本的にはかかりません。

7. 感染症が拡大したらプログラムはどうなりますか？

神戸大学全体の対応に従います。もちろん授業は感染防止対策をとって実施します。対面での授業がむずかしい場合は、オンラインなど遠隔授業も考えます。

8. わからないこと、不安なことはどこに相談したらいいですか？

新しい事業ですので、不安があると思います。何でも遠慮なく問い合わせ先(募集要項に記載されている)に電話をして聞いてください。

2024 年度

神戸大学・学ぶ楽しみ発見プログラム

～知的障害青年のための大学教育の創造～

Kobe University Program for Inclusion (KUPI)

学校卒業後の学びを支援するための地域連携コンソーシアム構築事業の一環



神大生と共に学ぶ

神戸大学での専門的な学び

楽しい体験型の学び

国立大初の新しい学び

仲間との語らいと学び

『学校卒業後の障害者の学びを支援するための地域連携コンソーシアム構築事業』

(文部科学省受託研究)

■主な事業内容■

1. 地域連携コンソーシアムの形成
2. 障害者の学びのニーズを踏まえた学習プログラムの開発・実践
3. 神戸大学における学習プログラムの開発

■地域連携コンソーシアム連携協議会■

県教委を中心に、神戸市教委、神戸大学、地域企業、団体、当事者団体などで構成

『コンソーシアム構築事業』の一環で実施

■学ぶ楽しみ発見プログラムの目的■

知的障害や発達障害のある人たちに高等教育の学習機会をつくる委託研究の事業です

■プログラムの特色■

- 神戸大学の資源（設備・人）を活用
- 大学教員の専門性を活かした体験的な学びを提供

学習プログラム 週3日(月・火・木)16:30~20:00



<月曜日> 神戸大学

16:30 HR (夕食を兼ねて)

17:00 よりよく生きるための科学と文化

*神戸大学の稲原、大田、川田、佐藤、関、菊池順孝先生等による体験型講義

18:40 授業のふりかえり

20:00 プログラム終了



<火曜日> 神戸大学

16:30 HR (夕食を兼ねて)

17:00 「障害共生教育論」：津田英二先生の講義

*神戸大学生とともに受講

18:40 授業のふりかえり

20:00 プログラム終了



<木曜日> 神戸大学

16:30 HR (夕食を兼ねて)

17:00 「話し合う！やってみる！」

*やってみたいことを話し合って計画を立てます。
外にも出かけます。神戸大学生と一緒に研究や
創作活動を行います。

18:40 授業のふりかえり

20:00 プログラム終了

◆ESD 学び隊「ワークキャップ」

◆ボランティア体験

◆神戸大学でのイベント参加など



【場所とアクセス】

神戸大学大学院人間発達環境学研究科

神戸市バス 36 番系統 鶴甲団地行「神大人間発達環境学研究科前」下車すぐ

(36 番系統のバスは、阪神御影、JR 六甲道、阪急六甲の各駅を通ります)

【問い合わせ】

〒657-8501

神戸市灘区鶴甲 3-11 神戸大学大学院人間発達環境学研究科

ヒューマンコミュニティ創成研究センター 黒崎・土居まで

電話 078-803-7970 FAX 078-803-7971 (水 13:00~19:00)

メール krsksc@people.kobe-u.ac.jp

ホームページ <http://www2.kobe-u.ac.jp/~zda/KUPI.html>

*ホームページから本要項、願書、同意書がダウンロードできます



2024 年度

神戸大学・学ぶ楽しみ発見プログラム (KUPI)

説明会（ご案内）

1. 日 時 2024年8月27日(火) 時 間 17:00 ~ 18:00
受付 16:40 ~
2. 場 所 神戸大学大学院人間発達環境学研究科(神戸市灘区鶴甲3-11)
神戸市バス36番系統 鶴甲団地行 「神大人間発達環境学研究科前」下車すぐ
F棟2階 263室
3. 内 容
- ①プログラムの趣旨、募集要項の説明
 - ②プログラムの内容紹介
授業内容の紹介、スケジュール、時間割の説明
 - ③授業をしていただく神戸大学の先生と関係者の紹介
 - ④入学選考について
スケジュール及び選考方法、合否発表と合格後の提出書類について
 - ⑤質問コーナー
4. その他
- *健康をご確認の上、ご参加ください
 - *説明会の参加がむずかしい場合は、個別に案内をいたします
 - *個別相談にも応じます
 - *願書の提出を受け付けます(卒業証明書は後日でもかまいません)

【問合せ先】

T 657-8501

神戸市灘区鶴甲 3-11

神戸大学大学院人間発達環境学研究科

ヒューマン・コミュニティ創成研究センター 黒崎・土居まで

電話 078-803-7970 FAX 078-803-7971

水曜日 13:00~19:00

Mail : krsksck@people.kobe-u.ac.jp



*以下のホームページから、本要項、出願書類をダウンロードできます

「神戸大学・学ぶ楽しみ発見プログラム」で検索、又は <http://www2.kobe-u.ac.jp/~zda/KUPI.html>

3) プログラムの内容作り

①月曜日プログラム

月曜日プログラムは、神戸大学人間発達環境学研究科の教員を中心に、本事業を理解し賛同いただける方々と授業づくりを進めている。2024年度は、全6名の神戸大学人間発達環境学研究科の教員が授業をご担当いただいた（今年度が初参加：2名）。また、神戸大学附属特別支援学校の教員2名、昨年度までメンター学生として本事業に参加していた摂南大学現代社会学部の加戸友佳子助教も、授業を担当してくださった。

授業に先立ち、コーディネイター2名がそれぞれの教員と、授業日程や内容、進め方等について打ち合わせを実施。水曜日プログラムのテーマである「よりよく生きるための科学と文化」に即している、かつそれぞれの担当教員の専門性を活かした授業を依頼した。KUPIプログラムでの授業を快く引き受けてくださった教員の方々の中でも、授業に向けてのモチベーションやイメージの度合いはそれぞれである。各教員のイメージを聞き取りながら、イメージの程度に即した打ち合わせを行った。特に、初めてご担当いただく教員にとっては、本事業における講義のレベル感是非常に掴みづらいものであると考えられる。よって、これまでの授業の様子やKUPI学生の雰囲気について、メンター学生/コーディネイターの役割について、詳細に説明を行った。また、これまでに授業を実施いただいた先生方とは、これまでの授業内容からの変化や前回は踏まえてブラッシュアップできる点を重視しながら打ち合わせを実施した。

授業に際しては、①シラバスの作成 ②補助資料の作成 ③体験ワークやグループディスカッションの時間の確保 を基本的にはお願いをした。これはそれぞれ①事前情報共有によるKUPI学生の戸惑い防止 ②視覚情報の補助として ③参加型による理解促進 を目的としたものである。これらの要請をすることによって、専門的内容とKUPI学生の興味/関心の間に大きな差を生むことなく授業を構成することが可能となった。

本プログラムは、＜17:00～18:30＞授業、＜18:50～20:00＞KUPI学生の理解促進を目的とした振り返り、＜20:00～21:00＞メンター学生とコーディネイターの振り返りというタイムスケジュールで毎回プログラムを進行した。上記の構成によって、KUPI学生の学び、メンター学生の学び、と多層的な学びが生じる時間となった。

②火曜日プログラム

火曜日プログラムは、神戸大学国際人間科学部の授業「社会教育課題研究（障害共生教育論）」として実施している。この授業は、発達コミュニティ学科の専門科目であるとともに、社会教育主事の資格に関連する科目でもある。一般学生とKUPI学生が共に学びあうことを追求するねらいで、プログラムの内容も検討している。

今年度は、「いのちをつなぐ」をテーマにして、遺伝子概念をキーとしながら、過去から未来へ大切なものをつないでいく私たちのいのちについて考える展開とした。前半は、KUPI学生個々人が「大切に育てられた私」をパワーポイントを用いて表現するプレゼンテ

ーションを行い、後半は「大切にしているものを次の世代につなげていく私」を表現する作品づくりに挑戦した。特に後半は、昨年度までの取り組みを踏襲して KUPI 学生と一般学生が協働で作品を創作することをめざしたが、テーマの性格上、結果的に KUPI 学生の表現を一般学生やメンター学生がサポートするという形となった。授業の途中には、優生思想の話題も織り込み、障害者のいのちにも焦点を当てた。

授業担当者は、こうした授業展開によって、次のような効果を狙った。

- ・ KUPI 学生が、自分自身を人類の歩みの中に位置づける思考になじむ機会とする。
- ・ KUPI 学生、一般学生両者にとって、異質性の高い他者と協働して作品を制作する体験となり、挑戦する気持ちを共有できる機会とする。
- ・ 一般学生が、知的障害者の歴史的・社会的な立場性を意識しながら、KUPI 学生と共に学ぶ他者として関わる機会とする。

授業最終日に設定した最終発表会は公開授業とし、保護者をはじめとする多くの関係者が集まり、12本の力作をみんなで鑑賞した。

③ 木曜日「話し合う！やってみる！」

木曜日は教員の参加はなく KUPI 学生とメンター学生、コーディネイターで活動を行った。興味のあることを出し合い、みんなで様々なことを体験するプログラムである。月曜日と火曜日は授業時間が決まっているため授業（90分）→休憩（20分）→ふり取り、と切り替えができるが、木曜日は 17:00～19:45 が活動時間となるため途中で休憩（20分）を入れるがかなり長時間である。休憩の前後で違う活動をすることもあるが、たいいていは同じ内容で活動を行う。興味が向かない KUPI 学生には参加したくない理由を聞いて、参加したい場面があるか探した。ザワザワした雰囲気が苦手な KUPI 学生には教室を出た場所で落ち着いてもらい、入りたいタイミングを見つけて参加を促した。

活動内容は KUPI 学生やメンター学生から出た意見を元にメンター学生が話し合っ決定をする。毎年実施している活動は構内を散策する、大学の図書館を利用する、体育館で運動を中心とした活動をする、で今年度も行った。「外に出て活動をしたい」という意見があり、他のキャンパスにオープンしたスターバックスコーヒーに行った。そこでは夜景を見ながら飲食を楽しみ、そのあと芝生に座って哲学対話を行った。哲学対話を研究している博士後期課程のメンター学生がコミュニティボール（p4c）を取り入れた対話を様々な場面で提案してくれた。簡単なルール説明は視覚的にもわかりやすく行い、「話したくない時はパスができるよ」「話したくなったらどうぞ」と無理なく参加ができる形で進めた。そのおかげでみんなの話をじっくり聞いて対話を楽しみ、意外な一面を発見することもあった。

今年度は「階段アート」の制作も行った。2022 年度に取り組んだが構内の定期清掃でシールがはがされたため、同じ階段で再び制作を行った。今回は岸本吉弘教授（国際人間科学部発達コミュニティ学科長）からアドバイスをいただき、テーマから発想をした「シン

ボル」を決めて取り組んだ。制作をするにあたり、KUPI を知らない学生さんを誘って一緒に描きたいという気持ちが芽生えた。KUPI 学生が作った KUPI の案内（チラシ）を岸本吉弘教授と勅使河原君江准教授の授業受講者やゼミ生に配布をしてもらい声をかけた。参加する学生さんはいなかったが、KUPI のことを知ってもらえたので、これからも同じキャンパスで KUPI 学生が学んでいることをアピールしていきたい。

4) 入学者募集の状況と応募、選考

7 月末から学生募集を開始。昨年度の受講生に案内（メール）を送った。再受講を強く推奨しているわけではないが、毎年楽しみにしている受講生が多く、前年度の 7 割以上から出願があった。出願者は 12 名。選考は 9 月 5 日に面接（本人）と作文選考を実施した。グループ面接は津田教授、川地教授が行い、作文選考はコーディネイター 2 名が担当をした。



作文は大学が準備をした原稿用紙に書くかパソコン入力かを選んでもらった。絵を描いてもよいが今年は全員が作文を書いた。作文選考の 20 分間はシーンと静まり返った教室で鉛筆の音とキーボードをたたく音しか聞こえなかった。2 枚目を書く人もいれば書いては消す、を繰り返す人もいた。真剣に向き合う姿にこちらの背筋も伸びた。

12 名が合格をした。その中で 4 回目の受講者は 3 名おり卒業研究について説明を行った。今年度は卒業研究をするかどうかは自由としたが全員が取り組んだ。

5) 神戸大学学生のメンター募集

今年度は、神戸大学国際人間科学部、人間発達環境学研究科の学部生、大学院生延べ 19 名がメンター学生として活躍した。昨年度までのメンター経験者あるいは火曜日の授業履修者であった学生が 8 名おり、初めてメンターを経験する学生は 10 名であった。

新規のメンターは、以前から KUPI の取り組みに関心をもっていた学生や、関係する教員がゼミや授業での呼びかけに応じた学生たちである。うち今年度末に卒業あるいは修了する学生が 7 名おり、来年度も新たにメンターを希望する学生の募集を行う必要がある。

また、休職中の公務員などメンターとして雇用契約を結ぶことがふさわしくない 5 名の学生が、メンターと同様の働きによってプログラムを支えた。昨年度同様、初年度に KUPI 学生として参加した者が 1 名、メンター補助として活動したことも付記しておく。

6) 大学教務の協力で「特別の課程」制度の発展を

昨年度と同様、学校教育法に規定される大学等における履修証明制度を活用した。詳細の資料については 2020 年度の報告書を参照いただきたい (<https://www2.kobe-u.ac.jp/~zda/resources/KUPI2020Report.pdf>)。

履修証明制度に関わる事務は国際人間科学部教務学生係と KUPI コーディネーターで分担して行い、合格通知書や履修証明書の発行については教務学生係が担当をした。履修証明書は授業の出席回数や出席態度に基づき、評価委員会と教務委員会で修了の承認を得て学長名で発行をした。学生証はオリジナルのフォームで発行を行っている。

7) 保険の加入について、コロナ感染拡大防止について

保険は、「学生教育研究災害傷害保険」（任意）の案内を行ったが半数以上の KUPI 学生が加入をした。

「新型コロナウイルス感染拡大防止のための神戸大学の活動制限指針」の全項目が 2023 年 5 月 8 日からレベル 0（＝通常）に変更されたことに伴い、本プログラムも大学の指針に従った。

8) 入学式の様子



10 月 1 日（火）、5 限が始まる 17 時から入学式が行われた。KUPI 学生は津田英二教授から合格通知書を受け取り、一言ずつ抱負を述べた。授業や活動を楽しみにしていることや友だちをたくさん作りたいなど、大学生になる喜びを語った。

岸本吉弘教授、太田和宏教授、大田美佐子教授、川地亜弥子教授からお祝いの言葉をいただいた。大田美佐子教授は「授業でお会いできることを楽しみにしています。」と話し、教員からも授業を楽しみにしている様子が伝わってきた。

10 月 1 日は「障害共生教育論」の 1 回目の授業になっていることから、一般学生のみなさんやメンター学生も入学式に参加をして、これから共に学ぶ KUPI 学生と対面をした。入学式のあとは津田英二教授による授業ガイダンスが行われた。



9) 卒業研究発表会と修了式の様子

2 月 13 日（木）16 時過ぎ、会場設営を進める横で卒業発表のリハーサルを行った。卒論指導を担当したコーディネーターの土居綾美は卒業生に順番に声をかけた。緊張した面持ちで発表原稿を読み上げる人、生演奏を担当するメンバーと初セッションをする人、リハーサルは不要！と本番にかける人、と三者三様で準備を進めた。

17 時から卒業研究発表会が行われた。3 か月間かけて作り上げた発表はどれも卒業生ら

しい内容で、興味のある分野を独自の視点で研究を進めたことが伝わった。後輩へのメッセージも熱かった。KUPI の休講日も大学に来て制作した努力を称えたい。詳しい内容については「5」で述べる。

卒業研究発表会のあとに修了式が行われた。ピリッとした空気で始まったが、津田英二教授がお祝いの言葉を話すと緊張がほぐれていった。KUPI 学生は津田英二教授から履修証明書を受け取ると一言ずつ感想を話した。事前に「感想は短い言葉でいいからね」と伝えていたが、様々なシーンを思い出して長く語る人、一番印象に残った授業を話す人、来年もまた KUPI を受けます！と宣言する人、あらかじめ考えてきた文章をしっかりと読む人、溢れそうな涙を押さえながら話す人、と 12 名の感想はとても熱く、4 か月半の学びや経験の多さが伝わった。岸本吉弘教授、太田和宏教授は入学式に続いてご参加くださり、「辛かった思い出も含めて楽しんで学んだと思いますよ」「授業の見学に行けなかったけど、卒業発表や感想を聞いただけで充実していたことがよくわかります」とお祝いのメッセージを話した。川地亜弥子教授、加戸友佳子助教（摂南大学）そして KUPI 学生と一番近いところで一緒に学んだメンター学生やボランティアのみなさん、一般学生の方からお祝いの言葉と感想を聞いた。かつて KUPI の授業を見学された方もご参加いただき、多くの方に祝ってもらった。修了式終了後は歓談時間がいつまでも続いた。



10) 4 回目受講生の扱いについて

4 回目の受講生には今年度で卒業をすることについて説明を行った。卒業研究の取り組みについては自由としたが、3 名とも研究を行った。コーディネイターとの研究時間は主に月曜日のふり返し時間後半に行われた。次年度以降も 4 回目の受講生には同様の対応を行う予定である。卒業という形を取るようになった経緯については 2022 年度の報告書を参照いただきたい (<https://www2.kobe-u.ac.jp/~zda/resources/KUPI2022Report.pdf>)。

11) 卒業生の授業参加について

KUPI を卒業したご家族から、「卒業生も授業を受けられる機会を作ってほしい」と話があり運営委員で話し合った。オムニバス授業 3 回と「障害共生教育論」の発表会の参観に参加してもらうことを決めて、川地亜弥子教授、関典子准教授、加戸友佳子助教（摂南大学）に伝えたところ、卒業生の授業参加を快諾してくれた。

卒業生 5 名のうち 4 名は 4 回全てに出席し、1 名は 3 回出席をした。どの授業も積極的に参加をして現 KUPI 学生と一緒に楽しんだ。発表会は 3 時間に及んだが、最後まで熱心に見てそれぞれの発表に対して丁寧に感想を書いた。学びたい意欲を感じたので、次年度も卒業生が参加できる方法を考えていきたい。

3. プログラムの内容

1) 「よりよく生きるための科学と文化」

【プログラムの趣旨】

「よりよく生きるための科学と文化」を柱に、人間と生活、社会、自然、文化といった視点で授業を構成した。神戸大学を中心とした、教育学、社会学、哲学、芸術、自然科学等を専門にする教員による特別授業を実施した（教員/授業内容については次ページ記載）。

【重要視した “学ぶ楽しみ”】

「神戸大学・学ぶ楽しみ発見プログラム」と名付けているように、KUPI での学びは、“学生が楽しく学べること”を重視している。そのため、教員の協力を得ながら、大学の学びにふさわしいと言える質的内容にて、楽しみながら学べるよう工夫を施した。教員、コーディネイター、メンター学生が連携しながら、障害のある学生にも理解可能なレベルにかみ砕きながら学びを促した。

【担当講師に伝えた留意事項】

1. KUPI 学生が知的障害青年ということを配慮して、授業の進行はゆるやかなテンポを心がけること。
2. 授業実施にあたってはシラバスを作成すること。なお、シラバスは授業概要理解を目的として、KUPI 学生、メンター学生など授業関係者に配布する。
3. KUPI 学生にわかりやすくするために、パワーポイントの使用や授業資料をレジュメにして配布するなど、なるべく視覚的補助をすること。
4. 専門用語や聞き慣れない言葉を使用する場合、できるだけわかりやすく解説すること。
5. 授業には基本、KUPI 学生2～3人に対して1人のメンター学生がつく。メンター学生は授業が理解しやすいよう KUPI 学生をサポートするので、必要に応じて協力要請が可能であること。

【KUPI 学生をサポートする上で気を付けたこと】

授業においては、KUPI 学生がメンター学生にすぐにサポートを求められる環境づくりを重視した。また、サポートするメンター学生に偏りが生じないように/多様な交流が生じるように、コーディネイターが KUPI 学生とメンター学生のマッチングを毎行行った。また、グループワーク等における KUPI 学生のバランスも都度コーディネイターが調整を行った。

授業後のふり返りでは、コーディネイターの土居が授業内容を振りかえるとともに、3つ程度の問いだしを行い、グループワークにて問いの検討を行ってもらった。なお、グループワークの内容は模造紙に記入し、授業最後に発表をしてもらった。授業最後の発表に

おいては、全体で行う回、2 グループを合体させてグループ間交流とする回と、様々な形式で実施をした。

【授業内容】

授業日	テーマ	講師
10月7日	対話型美術鑑賞 ①対話をしながら作品の意味を考えよう ②視覚に頼らず立体作品を鑑賞しパステルで感じたことをあらわそう	勅使河原 君江 准教授
10月21日		
10月17日	「歌」が表現しているもの、「歌」で表現できるものを「想像」する —音楽文化史の世界—	大田 美佐子 教授
10月24日		
10月28日	スズメバチの生態やその進化の面白さを知ろう	佐賀 達矢 助教
11月14日	身近な音の再発見 ① 音探しワークショップ ② フォーリーサウンドを作ろう	余田 有希子 助教
11月18日		
11月25日	人はなぜ書くのか	川地 亜弥子 教授
1月27日		
12月9日	コンテンポラリーダンス体験 ～名画と踊ろう～	關 典子 准教授
12月16日	哲学対話 ①哲学のはじまり——ツッコミと対話 ②見えない「傷」とわたしたち——「こわい人」となかよくできる？	摂南大学 加戸 友佳子 特任助教
12月23日		
2月3日 2月10日	世界にひとつだけのりんごづくり	神戸大学附属 特別支援学校教諭 黒川 陽司 教諭 下木 なつみ 教諭

対話型美術鑑賞

①対話しながら作品の意味を考えよう

講師：勅使河原 君江 准教授

<概要>

2024 年度 KUPI 最初の授業として、絵画作品の鑑賞と対話を行った。抽象度の高い作品を鑑賞し、そこに描かれた形や色から連想したことを最初に少人数のグループで交流し、その後、先生から質問し、発表したい人がみんなの前で発言した。この授業を通して、同じ作品に対するみんなの見方や感じ方の違いに気付くことが授業の狙いだった。



<授業の様子>

➤KUPI 学生の様子

・エピソード① オムニバス授業 スタート！

初回の授業だったこともあり、初めはみんなが静かにしていた。先生が同じ画家が異なる時期に描いた絵をみんなに見せた。それぞれの絵から「何が見える？」という先生の質問に対し、初参加の KUPI 学生 N さんと、先輩となる KUPI 学生 S さんが積極的に発言をしていたことが印象的だった。今年度の新たな KUPI 学生はまだ慣れていないが、メンター学生やコーディネイターからの話しかけでうまく交流ができている様子だった。

・エピソード②「正解」がない美術鑑賞に楽しんで

先生から示された絵画は具体的からだんだん抽象的になり、絵を見て「これは何？」「難しいなあ…」と迷ったり、困ったりする KUPI 学生が何人かいた。しかし、先生から「この絵に正解はないよ」と言われると、KUPI 学生はそこから想像を膨らませていた。同じ絵に対して、「動物にみえる」や「人間の身体の一部にみえる」「食べ物にみえる」などとみんなが積極的に発言をしていた。KUPI 学生はそれぞれ自分の考えを言い、相互的なやり取りの中でお互いの見方や感じ方を聞き、尊重することができるようになっていた。

・エピソード③ 大きな絵はどのように描かれた？

ある絵を鑑賞した後、先生は絵のサイズについて説明を行った。みんなはその巨大さに驚いた。「この絵をどのように描くのかと思う？」という先生からの問いかけに対し、KUPI 学生はそれぞれの推測を述べた。最後に先生から答えを示された時、KUPI 学生はみんな非常に驚いた様子であった。経験と絡めたりしながらいつもと違う描き方を推測することができた KUPI 学生は多くいたように感じた。

<授業を振り返って>

初回の授業を終えて、2024 年度の KUPI も元気いっぱいという確信を得た。今年度はフレッシュでパワフルな 3 人が加わり、KUPI に新しい風が吹いた。

対話と美術鑑賞を組み合わせる授業で、他の KUPI 学生とグループで話すことを通して、KUPI の雰囲気融合しながら授業もうまく受けることができた。再履修生の中にはいつも通り行動している人が多かったが、自身の身体の状態や気分によって、以前より落ち着いていた、もしくは興奮したりしていた人もいた。

KUPI 学生とメンター学生やコーディネイターでバランスよく分けてグループ内で話していたが、基本的に KUPI 学生とメンター学生やコーディネイターとの交流となってしまう、KUPI 学生同士との交流が少ないという現状はまだある。

美術鑑賞を対話の形で進めることはあまりないが、この授業で、先生の説明や誘導により、みんなが想像力を発揮しながら積極的に授業に参加することができるようになった。授業で、他人の発言を聞きながら、互いの意見を尊重することが、対話の大切な要素なのではないだろうか。

②視覚に頼らず立体作品を鑑賞しパステルで感じたことを表そう

<概要>

今回の授業は KUPI 学生がアイマスクを付けながら陶芸作品に触れ、その後、感じたことをパステルでザラザラした紙に描いていた。2 人の KUPI 学生が同じグループで、同じ陶芸作品に触っていた。最後は完成したパステル画の作品を展示し、みんながそれぞれ自身の感想を言い、なぜこの作品を描いたのかをみんなの前で発表した。

<授業の様子>

➤KUPI 学生の様子

・エピソード① アイマスクをつけているみなさん

先生から授業に関する説明が終わってから、KUPI 学生全員がアイマスクをつけて、手で陶芸作品に触る。アイマスクをつけることに苦手な KUPI 学生もいるし、全然怖くない、むしろワクワクしている KUPI 学生もいる。そこで、メンター学生やコーディネイターの協力で、例えば、アイマスクをつけることを少し怖がっている KUPI 学生には意識的に話しかけたり、手を繋いだりする工夫をした。結果として、最後は全員がアイマスクをつけることができた。



・エピソード② 何も見えない 10 分間

KUPI 学生みんながアイマスクをつけた状態で、先生は陶芸作品をグループごとに配布していた。同じグループに 2 人がいて、最初は 1 人が作品を触りながら感じており、もう 1 人は待っている状態となった。「感じ方」もみんなそれぞれが違っている。例えば、触る部分により、「ツルツル」か「ザラザラ」の感じがしたり、指で叩いて作品の音が違ったりしている。アイマスクをつけて何も見えない 10 分間で、KUPI 学生が手で作品を感じている様子が見えた。

・エピソード③ 同じ作品に対する違う表現

最後は、KUPI 学生が陶芸品に触ることを通して、感じたことや思いついたことを絵の形式で表現してもらう。その後、みんな集まって、自分が描いた絵に名前を付けて、発表することとなった。そこで、同じ作品を触った人でも絵の感じが全然違っているのが見えた。作品の手応えや音、触ってみて思いついたことを描いた人がいた。みんなが他の人の発表に興味深く聞いて、「なるほど〜」とか、「面白いなあ〜」とかを言ってくれる KUPI 学生が何人かいた。

＜授業を振り返って＞

美術鑑賞は、基本的に「目」を使うことが多いが、この授業では目を使わず、代わりに「手」を使うことが、KUPI 学生にとって非常に珍しいことだと思われる。しかも、触った作品は目が見えない子どもが作っていた陶芸作品だ。KUPI 学生も手で触ることで、絵の形で表現するということが、目が見えない子どもの世界を少し可視化することができたのではないだろうか。また、KUPI 学生も、この授業を通して、同じ作品に対しても、みんなの感じ方や思い方もそれぞれ違うということが分かったのではないかと思う。

「歌」が表現しているもの、「歌」で表現できるものを「想像」する

—音楽文化史の世界—

講師：大田美佐子 教授

＜概要＞

1 回目：今年度の KUPI 学生は、全員大田先生の授業を受けるのが初めてであった。そのため、まずは自己紹介を兼ねて好きな音楽とその理由を共有した。その後、ジョン・レノン「Imagine」をはじめとするいくつかの楽曲を聴いたり歌ったりし、想起されるイメージについての授業が行われた。

2 回目：歌詞のないピアノ曲を聴き、どのようなイメージを持ったか、どんな場面を想像するかを絵や言葉で表現して共有した。また、「Imagine」を英語で歌い、音やリズム

の技法的な解説を受けた。最後に「翼をください」を歌った。

＜授業の様子＞

➤KUPI 学生の様子

・エピソード① 好きな音楽を発表

1 回目の授業では、はじめに KUPI 学生の好きな音楽を尋ねられ、思いっくだけ紙に書いていった。すぐに思いっついて紙いっぱいにくつも曲名を書く人もいれば、ゆっくりと考えていくつか書く人もいた。書いている中、大学教員に話しかけられ、自己紹介をしていった。



書いた後は 1 人ずつ発表することになり、ただ曲名を発表するだけでなく、なぜ好きなのか、どんなエピソードがあるかを語った。聞いて好きな曲、歌って好きな曲、思い入れのある曲、推しの曲と、KUPI 学生それぞれに様々な「好き」の形があることが自然と浮かび上がった。

・エピソード② 歌詞のない曲から想像



大学教員の弾いたピアノ曲を聴き、どのようなイメージを持ったか、言葉や絵でかいて表現した。はじめはどう書けばいいか迷いが見られたが、音楽そのものから感じた感覚について書くことから始まり、ドラマの BGM であればどのようなシーンでかかっていそうかなど徐々に具体的な表現へと連想が膨らんだ。「朝、コーヒーを淹れて

いるところ」というイメージから発展してコーヒーの絵を描くなど、ひとつのイメージから更に表現が膨らんだ。自由に表現できる楽しさで、授業内でも特に笑顔の多い時間のひとつとなった。

KUPI 学生 1 人ずつが全体に発表し、似たことを書いている人が何人もいたり、逆に全く違うことを書いている人がいたりすることが明らかになった。最後は実際にはどのような意図で作られた曲なのか解説を受け、書いた内容と似ている部分、異なる部分を意識した。

・エピソード③ 天国についてどう思う？

授業終了後、メンター学生がファシリテーターとして哲学対話を行った。「Imagine」の歌詞「天国はない ただ空があるだけ」になぞらえ、「天国ってあると思う？あってほしい？」というテーマとなった。

KUPI 学生、メンター学生共にほとんどが「あると思う、あってほしい」という意見だったが、途中でメンター学生から「しかし、『Imagine』では『天国はない』と言っている」という発言が出てから、反対の意見も出始めた。発言のあとに他の人が挙手して質問することも増え、木曜授業での他の哲学対話と比較して少し緊張感がありつつも、様々な意見が受容される対話となった。



＜授業を振り返って＞

音楽と歌詞の関係性、実在の歌詞の内容について考えてみるという内容である一方で、KUPI 学生の普段の生活の中に音楽がどのような形で存在しているか、音楽との関わり方が明らかになった授業だった。身近に何気なくある音楽を改めて意識するきっかけになったように思う。

また、作曲上の意図や技法の解説を受けることで、伴奏の形にも工夫があることや、どういった演奏が聴き手にどのような印象を与えるかについても考えることができた。

KUPI 学生の中にある音楽像と、授業教材として出会う曲という形の音楽像が交互に現れつつ、音楽とはどのように関わってもよくどのように捉えてもよいという自由な楽しさを実感できる活動となった。

身近な昆虫「スズメバチ」の生態

講師：佐賀 達矢 助教

＜概要＞

はじめにスズメバチの成長過程や食べ物、一生、巣についてなどの講義を受け、スズメバチの生態について学んだ。講義の中では、ハチの巣に触れたり、ハチのお酒漬けを見てじっくり観察したり、ピンセットを使ってハチの子どもを巣から取り出してみたりするなど、普段は毒があって怖い、近寄りたくない存在として認識されているハチを間近で見ることができた。こうした体験を通じて、ハチの生態についてより深く理解を深めた。最後には、希望者のみがハチの子を試食する機会もあった。



＜授業の様子＞

▶ KUPI 学生の様子

エピソード①スズメバチってどんな生きもの？

最初に、スズメバチについての講義を受けた。講義では、スズメバチの種類ごとの位置づけから始まり、その生態や成長過程、さらには一生にわたる生活のサイクルについて詳しく学んだ。特に、スズメバチの幼虫と成虫は、栄養の消化・貯蔵やエサ集めなど、役割を分業していることが紹介された。また、スズメバチの体の特徴として、くびれが細すぎるために固形物がそのお腹に届かないという興味深い事実も紹介された。こうした話を聞いた KUPI 学生の中には、特に働きバチの役割について深い興味を抱き、さらにその生態に対する理解を深めた KUPI 学生もいた。

エピソード②ハチの巣を触ってみる

ハチについての講義を受けた後、ハチの巣を触って観察する活動が行われた。講義では、ハチの巣がハニカム構造と呼ばれ、正六角形の部屋で構成されていること、またその素材がみつろうであることを学んだ。さらに、ハニカム構造は強度が高いため、車や建材など日常生活のさまざまな場面で活用されていることも紹介された。この知識を得た後、希望者が実際に本物のハチの巣に触れ、観察を行った。実際に触れてみることで、巣には大小の異なる形があることに気づいたり、巣の表面は柔らかい一方で裏面は硬いという違いを感じ取ったりするなど、さまざまな発見があった。



エピソード③ドキドキハチの子試食タイム



ハチの魅力やその面白さについて学んだ後、最後に大学の教員が持参したハチの子を食べる会が開催された。ハチの子を食べたことがある KUPI 学生はほとんどおらず、参加者たちはそれぞれ異なる気持ちで挑戦した。中にはワクワクしながら一番乗りで食べる KUPI 学生や、ドキドキしつつも「食べてみたい」と覚悟を決めて挑戦する KUPI 学生もあり、様々な反応が見られた。いざ食べてみると、「美味しい！」という声が

次々と上がり、さらにもう一個食べる KUPI 学生もいた。ハチの子には大きさや食感の違いがあり、「さっき食べたのと違うのが良い」と、様々な種類のハチの子を試す KUPI 学生も

多く見られた。

<授業を振り返って>

ハチはその毒によって「怖い」や「危ない」といった印象を与える昆虫であり、そのため多くの KUPI 学生が初めてハチに触れる際に苦手意識を持っていた。しかし、学びを深めるにつれて、次第にその見方は変わりつつあった。実際、「ハチって面白いな」「思ったよりもかわいい」と感じ、「飼ってみたい」といったポジティブな感想を抱く KUPI 学生も少なくなかった。こうした変化は、ハチに対する理解が深まった結果であり、知識を得ることで見えてくる新たな魅力があることを実感できた瞬間だった。

また、学びの中で、実際に本物のスズメバチの巣に触れたり、ピンセットを使ってハチの幼虫をつまんだり、さらにはハチの子を食べるといったユニークな体験を通して、座学だけでは得られない実践的な学びの機会も豊富にあった。こうした体験は、KUPI 学生たちにとって単なる知識の習得にとどまらず、実際に自分の手で触れることによって、より深い理解を得るための貴重な時間となった。全体として、ハチに対する苦手意識を持っていた学生たちが、学びを通してその魅力に気づき、逆に好意的な印象を抱くようになったことは、非常に良い学びの成果だったと言える。

身近な音の再発見

講師：余田 有希子 助教

<概要>

1 回目：音探しワークショップ

「身の回りのさまざまな音について考えよう」というテーマでの授業。まずは余田先生が過去に音付けをされたアニメーション作品を視聴した。時よりクスッと笑いながら楽しそうに視聴をする KUPI 学生の様子がみられた。

その後、4 班に分かれてそれぞれのお題に沿ったさまざまな音を録音するという活動を行った。お題は「ペットボトルの音」「ドアの音」「ペン・鉛筆の音」「紙の音」の 4 つである。グループで相談しながらたくさんの音を録音の様子がみられた。最後には、それぞれ録音した音をつかって、「何をどうしている音か」クイズを実施した。「知っている音なのになかなかわからない」KUPI 学生たちはそんな感覚を楽しんでいるように見えた。

2 回目：フォーリーサウンドを作ろう

身近な物を使い、アニメーションに合わせたフォーリーサウンドを作ろうというテーマでの授業。まずは映画のワンシーン（馬が走るシーン）を見て、どんな音が聞こえるのか、聞こえてきた音はホンモノの音なのかを考えた。そしてその音がどのように作られたのかを確認した。音が作られていく様子を見た KUPI 学生は、おお！と驚いている様子であった。

その後は「ウォレスとグルミット」のワンシーンに合わせてフォーリーサウンド作りを行った。新聞が落ちるリアルな音を作ったり、空気入れの音をペンギンの足音に見立てたり、オタマトーンを使って犬が怒る様子を表現したりした。録音した音とアニメーションを見て、笑みをこぼし、とても満足している様子であった。

<授業の様子>

▶KUPI 学生の様子

・エピソード①：親しみやすい活動

身近なものである「音」について「音楽」ではない形で意識するという機会は、とても新鮮で、なおかつ親しみやすい活動であったように感じる。KUPI 学生ひとりひとりの興味関心は異なるため、授業によって興味の持ち方もマチマチである。そんななか、本授業は、すべての KUPI 学生が興味を持ち、積極的に授業に参加する様子が見られた。それぞれが自分なりに考えやすい内容であったというのが一つの要因であ



ろう。このように多くの KUPI 学生が前向きに取り組むことができる授業は、学びの機会としてとても重要である。そんな中で、どのように学びを深めていくか。もちろん「楽しかった」と感じられることも大切であるが、それだけでとどまらせないために、サポート側が発展させていく視点を提示していくことでより豊かな授業になっていくと感じた。

・エピソード②：ルールや規範から外れることの難しさ

音を探し録音する活動において、「それはやっちゃダメなんじゃない」などルールや規範を意識した発言をする KUPI 学生が多くいた。KUPI 学生たちは、日常生活の中でそういったことを強く意識している/させられているのだろう。そういった意識が、自由な発想を求められている際に案外大きな障壁となっていることにメンター学生たちは気づいていくこととなった。常識を超えたアイデアが生まれてくるような活動にしていくにはどうサポートしていけばいいのか。これまで他の授業においては、「常識を超えていく」ことよりも「思考を深めていく」ことを求められる場面が多くあった。「思考を深めていく」ためのサポートや声かけはこれまで意識できていたものの、「常識を超えていく」について意識があまりできていないことに気が付いた。また、その難しさにも気づかされた。それほどまでに「ルールや規範から外れる」こと自体が難しいことなのだろう。メンター学生

の振り返りにおいては、「授業だから特別にルールから外れてみてもいいんだよ」など声かけしてみることがアイデアとして挙げられたが、果たしてそれだけで充分なのだろうか。今後の活動で注目していきたい観点となった。

・エピソード③：集団での自己主張

全体を 2 グループに分けてそれぞれどの音を作りたいのかを決めたが、自己主張が得意な KUPI 学生の意見が盛んに出る中、自己主張が苦手な KUPI 学生は「なんでもよい」と、やりたいことを決める際に後回しにされる場面が多々見られた。メンター学生も積極的に自己主張が苦手な KUPI 学生に意見を聞いていたが、何をしたいのか、どんな音を作りたいのか分からない様子であった。積極的に意見を発することは良いことではあるが、他の人がその様子を見て遠慮してしまったり、後回しになってしまうことはいけない。しかし、意見を言うのが難しい KUPI 学生に対し、意見を求めすぎることも良いことではない。KUPI 学生それぞれにあった方法で意見を引き出し、全員が納得して取り組める環境を作るためにはどのようにすべきかを考える必要がある。

・エピソード④：「自分もやりたい」



第 2 回目の授業で、「犬が怒る場面」のフォーリーサウンドづくりが大人気であった。1 度録音が終わりと、すべてのシーンが取り終わったところで、自分もやりたいと同じシーンの録音を希望した KUPI 学生がいた。余田先生の計らいで、同じシーンを 2 度録音してもらい、分けて再生をし、いろいろな音が録音できたとひと段落したかと思えたが、その後 2 人の KUPI 学生が同一シーンの

録音を希望し、結果同じシーンに対して 4 つの録音ができた。最終的にはすべての音を同時に流していただき、KUPI 学生も笑いに包まれ終了したが、役割分担がうまく機能していなかったように思えた。グループワーク中には「他のグループの担当の部分をやりたい」という学生が多数見られたため、不公平感を感じた KUPI 学生もいたのではないだろうか。意見を尊重しつつも特別扱いにならない方法を模索する必要があると感じた。

＜授業を振り返って＞

「音が苦手」と授業前に話していた KUPI 学生も、いざ余田先生の授業を受けてみると、楽しんで参加している様子であった。普段意識して聞くことのない、身近な物から発せられる音や、アニメや映画、CM で使われている音に着目することは、新鮮で親しみやすかつ

たように思える。ただ、授業内容に関心があっても気分の波によっては積極的に参加できない KUPI 学生もあり、サポートすることの難しさを感じる授業でもあった。授業のテーマである「身近な音の再発見」の通り、この授業を受けた後の KUPI 学生・メンター学生はアニメなどに使われている音は何の音なのか、どんな音なのか意識をして聴いているようであった。普段何気なく耳にしている音の解像度が上がるとても有意義な授業であった。

人はなぜ書くのか

講師：川地 亜弥子 教授

<概要>

1 回目：作文を書いてみよう

最初に作文学習である「生活綴り方」はどのようにして生まれたのか、その歴史や世界の実践などの説明を受けた。その後、さっそく自分たちで作文を書いた。テーマは「自由」で自分の好きなアイドルについて書く学生、KUPI について書く学生、家族について書く学生など様々であった。20 分ほど作文を書く時間をとった後、小グループに分かれて自分の作文の読みあいをした。

2 回目：自分について書いてみよう

授業開始早々、今回は「自分のこと」をテーマにして作文を書いた。KUPI 生の要望に合わせて方眼のある作文用紙と無地の作文用紙が用意され、前回よりも自思いのままに作文に集中する KUPI 学生の様子が見られた。その後、前回同様小グループに分かれて自分の作文の読みあいをした。今回は、昨年卒業した KUPI 学生も参加していたため、前回より活発な読みあいの様子であった。最後に「作文をみんなの前で読みたい人？」という質問には何人かの学生が手を挙げて、自信をもって作文を読んでいた。

<授業の様子>

➤KUPI 学生の様子

・エピソード①めっちゃめっちゃ集中

いつも元気な KUPI 学生であるが、川地先生の授業、作文を書く時間はみんなとっても真剣に自分と向き合って作文を書く。最初は 20 分と言っていた先生も集中して作文を書き続ける KUPI 学生の様子を見てあと五分、あと三分と書く時間を伸ばしていく。KUPI 学生の書きたい欲は凄まじく小グループで作文を読みあう時間になってもまだまだ書き続ける KUPI 学生も何人か見られた。それほど、集中して



作文を書く様子からは言葉にして伝えたいことがたくさんあるのだなと思った一方、グループワークにはみんなが参加できるようにメンター学生が声掛けしていく必要があると感じた。

・エピソード②作文を読みあう

自分の書いた作文を小グループで読みあう時間には、役割として司会があった。何人かの KUPI 学生は自らその役を担ってくれ、周りの様子を見ながら上手に進行してくれた。また、司会の質問に答えるように友達の作文に対して積極的に質問をする様子が見られた。質問し合うことで作文の内容がより濃くなっていき、質問された KUPI 学生は興味を持ってもらえたことが大変うれしそうであった。友達が書いた作文について質問をしたり、良かったところを褒めたりすることで互いに深め合う時間となった。

・エピソード③自分について書く、話す



2 回目の授業では多くの KUPI 学生が自分のことをテーマにして作文を書いていた。自分の好きなことや仕事について振り返り、その内容について詳しく書いているのが印象的だった。中には、自分の障害や病気について書いている学生もあり、作文によって言葉にすることで自分自身と向き合う大切な時間になっているのだと感じた。

・エピソード④人はなぜ「書く」のか

振り返りの時間に「人はなぜ書くのか」というテーマで話し合った。毎年授業の最後で考える難しいテーマである。KUPI 学生たちは悩みながらも、自分が書いた作文について振り返りながら書いて表現することの楽しさや難しさについて意見を出し合った。また、「『かく』って言ってもいろんな『かく』（『書く』だけでなく『描く』も）があるよね。」や「自分のために、または相手のために書く」など様々な意見を出し合い、ひとりひとりが「書く」意味や意義について普段の生活や経験を振り返りながら考えられる時間となった。

<授業を振り返って>

川地先生の作文の授業は毎年行われており、KUPI 学生は自分の思いや考えを表現できるとこの授業を楽しみにしていた。実際に授業では、作文を「書く」時間には長文を書いたり、単語を並べたりするなど思い思いの形で表現していた。そして「伝える」時間には特定の人に読んでほしいからとみんなの前では読まずに、読んでほしい相手にこっそり渡す

学生や、自分の作文をぜひ聞いてほしいとグループ発表だけではなく全体の前で発表する学生がいた。「書く」「伝える」それぞれの方法は様々だが、どの学生も自分が書いた作文に気持ちを込めているのが伝わった。「書く」「伝える」ことを通して、自分のことを振り返り、友達と伝えあえる有意義な授業であったと思う。

よりよく生きるための科学と文化 コンテンポラリーダンス体験～名画を踊ろう～

講師：關 典子 准教授

<概要>

はじめに、大学教員が干支に関する絵本(甲骨文字であそぶ 中国の十二支のものがたり)をプロジェクターに写して読み聞かせし、干支の成り立ちについて学んだ。その後、円になって体ほぐしの体操&マッサージし合いっこをした。干支が同じ人同士でグループを組んで、自分の干支を表現する動きやダンス等を考え、それを全員の前で発表した。なお、今回の授業は KUPI 学生の OB も数名参加し、いつもよりは多い人数での授業となった。また、体を動かして表現することが苦手な KUPI 学生は干支の動物の絵を描いたり、他の人の発表を見て思ったことを書いたりすることで授業に参加した。

<授業の様子>

エピソード①干支を表す甲骨文字

講師のご親戚の方が作成された絵本を用いて、干支のまつわるお話を読んだ。絵本の中では干支の動物たちは甲骨文字で表されており、「この文字は何の動物かな？」と予想してみたり「たしかにこの文字、〇〇の形に似てるね！」などと実際の動物の姿を思い浮かべながら動物を表す甲骨文字を見比べたり、周りの人と思ったことを共有する KUPI 学生もいた。また、初めて見たからか甲骨文字にとっても興味を持ち、「面白い」と絵本をよく眺める、新しいものに触れる体験をした KUPI 学生もいた。



エピソード②体も心もほぐそう

それぞれダンスを考える前に、円になってストレッチやマッサージし合いっこをした。マッサージでは隣の人の肩を叩いたりもんだりさすったり、隣の人に肩を叩かれたりもまれたりさすられたりした。マッサージは、「気持ちいいよ～」とか「強い？弱い？」などとコミュニケーションをとりながら行い、体もほぐしつつ仲間たちと和やかな雰囲気を作っていた。KUPI 学生の OB と初めましての人達もいたが、この活動内で少し緊張がほぐれ

たように感じた。

エピソード③それぞれの干支を表現する発表



同じ干支の人がいたらその人同士でグループを作り、いなければ他のグループと合併するなどしてグループを決めた。発表に向けて、紙やペンなどを使って被りものを作ったり、部屋にあるものを用いてどのように干支を表現するか話し合ったりするという活動を行った。やりたいことが決まっている人はすぐに決めていたが、なかなか決まらない人は他の干支の人に一緒に考えてもらったり、一度やってみてアドバイスをもらったりして完成に近づいていった。一人でやるのが恥ずかしい KUPI 学生は他の KUPI 学生を誘って二人でやるなど、お互い助け合って発表作品を作っていく様子が見られた。発表では劇っぽいもの、動物の動きを表現するもの、動物を表す甲骨文字を体で表現するものなどそれぞれの個性がたくさん詰まった作品だった。客側からは「お〜〜」と感心する声や「わはは」と笑いが起きる声、「すごい!」とほめる声など色んな声が演者に向けられ、他のグループの発表を興味津々で見ている様子があった。

＜授業を振り返って＞

甲骨文字という普段あまり目にすることのない文字の存在について学びながら、干支の由来を知ることができた。また、干支の理解を深めた上で、それを表現するために動きやダンスを作成するという、比較的難易度の高い内容に挑戦したにもかかわらず、KUPI 学生たちは積極的に発表に向けてアイデアを出し合い、アドバイスをし合いながら一つの作品を作り上げていった。この過程で見られた KUPI 学生たちの生き生きとした姿勢はとても印象的で、楽しみながら活動に取り組んでいる様子が多くの KUPI 学生に見受けられた。さらに、体を使って表現することが難しいと感じた学生も、他の方法で授業に参加し、自分が描いた絵を他の学生に見せて回るなど、自分なりの方法で楽しんでいる様子が見られ、個々の KUPI 学生が自分なりの形で表現しようとする姿勢がとても良かったと感じた。



哲学対話

①哲学のはじまり——ツッコミと対話

講師：加戸友佳子 特任助教（摂南大学）

<概要>

哲学は、最も古く、今も続く学問である。そして、昔の哲学者たちは、一人ではなく、他の人と、まるで漫才をするかのように話しながら考えてきた。今回は、いつもと少し違う哲学対話であり、有名な「ネタ」を紹介し、この「ネタ」についてみんなでツッコミを入れながら考えた。授業は以下の流れで進められた。

授業の導入として、「哲学とは何か」を説明する

1. 「ギュゲスの指輪」の話を紹介する
2. 「もし透明人間になれたら何をしたい？」という問いをもとに、学生たちが意見交換を行う
3. 「ギュゲスを止めるにはどうしたらいいか？」について、学生たちが意見交換を行う
4. 授業の最後に、全体で振り返りを行い、「悪いこととは何か？」や「哲学とは何か？」についてグループディスカッションを行う

<授業の様子>

KUPI 学生の様子

・エピソード1：指輪の話

授業の初めに、プラトンの『国家』に登場する「ギュゲスの指輪」の話が紹介された。この指輪をはめると透明になれるという設定を基に、「もし透明人間になれたら何をするか？」という問いかけが行われた。学生たちはこの話に興味を持ち、すぐに活発な意見交換が始まった。



・エピソード2：みんなの意見交換

学生たちは円になり、それぞれが「透明になれたら何をするか？」について発表した。「学校や映画館に忍び込む」「好きなアイドルや芸能人に会いに行く」「立ち入り禁止の場所に行く」「他人の秘密をこっそり知る」「いたずらをする」「何もしない（透明人間になること自体に興味がない）」というような意見が挙げられた。

・エピソード3：ギュゲスの話の続き

「ギュゲスの指輪」の物語では、指輪を手に入れたギュゲスが王妃と結託し、王を殺して自ら王となる。これに対し、「ギュゲスを止めるにはどうしたらいいか？」という問いかけがされた。「注意をする」「王子に知らせる」「透明にならなくても問題を解決する方法を考える」「強制的に止める」という答えがあった。学生たちは、自分がギュゲスの立場だったらどうするか、また悪いことをしてしまう人をどのように止めるかについて、倫理的な視点から考えた。

・エピソード4：授業の振り返り

授業の最後に、全体で振り返りを行った。「悪いことって何?」「悪いことはしちゃダメ?」というテーマについて、グループごとに意見をまとめて発表した。「人に迷惑をかけることは悪いこと」「言葉による暴力も悪いことの一種である」「悪いことをすると、自分自身が後で後悔する」などの意見が挙げられた。

<授業を振り返って>

この授業は、哲学という普段あまり考えない分野に対する興味を引き出す内容であった。指輪の話やツッコミを通じて、学生たちは哲学的な思考を楽しみながら学ぶことができたと思う。特に、他者との対話を通じて自分の考えを深めることができたことは、今後の学びにおいても大いに役立つと感じている。また、「悪いこと」とは何かについて考えることで、道徳や倫理の基準が人それぞれ異なることを実感した。透明人間の話という身近なテーマを通じて、哲学の基本的な問いを考えることができたのは、とても良い経験だった。

②見えない「傷」とわたしたち——「こわい人」となかよくできる?

<概要>

今回の授業では、「スティグマ」と呼ばれる見えない社会的な「傷」について考えます。ディズニーアニメのキャラクターを例に挙げて、ほんとうに痛いわけではないけれど、人といるとしんどいことがあるといった特徴を持った人々について、みんなで話し合う。授業は以下の流れで進められた。

1. [スティグマ]という言葉の説明
2. 映画「アナと雪の女王」を紹介する
3. 「ひとりに成りたい時は?なぜ?」という問いをもとに、学生たちが意見交換を行う

<授業の様子>

KUPI 学生の様子

エピソード1：ひとりに成りたい時は?

学生たちは円になり、それぞれが「ひとりに成りたい時はいつか?」というテーマについて意見を述べました。[イライラしている時、自己嫌悪に陥るから人に当たってしまう][集中している時][学校で3年間いじめられた経験があり、孤独を求める時がある]という意見があげられた。

この段階で、エルサの気持ちに共感する声が多くあった。特に、Nさんは過去の経験から



「誰かと一緒にいても、自分を理解してくれる人が必要だ」と話した。

エピソード2：ひとりになることが役に立つのか？

学生たち「ひとりになることが役に立つのか？」というテーマについて意見を交換した。「ひとりになることで、逆にゆっくりできるし、大切な作業ができる」「自分の部屋の広さが心地良く、慣れた空間が大切だ」「自分らしさを保ちながら、仲良く過ごせる場所が必要だ」「広い部屋が良い。解放感がストレスを減らす」と述べた。このように、学生たちはひとりになることが時には役立ち、心地良い環境を持つことが大切であるという認識を深めた。

エピソード3：授業の振り返り

みんなグループごとに「スティグマ（傷）を抱えている時、1人でいたいのか、誰かといたいのか？」というテーマで議論を行った。「誰かと居たいが、1人で解決するのは難しい」「誰かと居たいが、安心できる人じゃないと嫌。傷付けることを考えると、一緒にいるのが怖い」「他の学生もそれぞれの経験を交えながら、孤独感や社会的な傷について深く考える時間となりました」という答えがあった。

<授業を振り返って>

この授業は、社会における「スティグマ」という概念について深く考えるきっかけとなった。ディズニーアニメを通じて、学生たちは見えない傷を持つ人々への理解を深め、彼らとの関係をより良くするための方法を模索することができた。特に、他者を理解することの重要性や、自分自身がどう関わるべきかを考えさせられる内容であった。このような学びは、今後の社会生活においても大いに役立つと感じている。

世界でひとつだけのりんご作り

講師：神戸大学付属特別支援学校

黒川 陽司 教諭、下木 なつみ 教諭

<概要>

本授業は2月3日と10日の全2回に渡って行われた。テーマは「りんご作り」で新聞紙と針金を使ってりんごの形を作り、それに千代紙や和紙で色付けをする、というものだった。

<授業の様子>

・エピソード①：個性の尊重と信頼感

りんご作りの最中に KUPI 学生の N さんは、工程のひとつである「糊の二度塗り」を忘れていたかもしれないと思った。私はそんな N さんにどのような対応を取れば良いのか判断できずにいた。というのも、N さんは本当に二度塗りの工程を忘れているのか、把握したうえで二度塗りしないことを選択したのではないかという不安、また決められた型にはめようとする働きかけが N さんにとって不快にならないか、そうでないとしても適切なのかという疑問が起こったのだ。少し悩んでから起こした行動は「黒川先生に相談する」だった。すると黒川先生は「ちょっと作品、手加えてもいい？」と言ってすんなり作業を手伝い、N さんも「あ、いいですよ」と快く答えていた。

私と黒川先生の行動の差は、黒川先生は N さん（含む KUPI 学生）に対して「手伝われるのが嫌だったら断るだろう」という信頼感が充分にあったかどうかという点にあり、私の不安は「不快にさせたことで嫌われるのではないか」という保身に基づいたものだったのと振り返る。また言ってしまえば「りんご作り」というテーマもまた一つの「型」である。ある型の中でどう振舞うか、その型に対して何を思いどう対応するか、という点に個性が現れる。「型にはめること」と「個性を否定すること」は同義ではない。瞬時に適切な判断ができなかったこと、他者への信頼感の欠如を自覚したことと、苦々しいものの得るものの大きい経験をすることができた。

・エピソード②：黄色のりんご

KUPI 学生の一人である J さんは全体を単一の赤色で覆われた、いわば「りんごらしいりんご」を一度完成させた。完成後、ふとお手本のりんごの模型に黄色の斑点があることが目に留まったらしく、それを再現しようと試みたらしい。私はその作業を途中から手伝ったのだが、しばらく作業をするうちに J さんの目的は「黄色の斑点を再現すること」から「りんご全体を黄色で埋め尽くすこと」に変化し、結果「黄色のりんご」という一際目を引く作品ができあがった。

この発想の飛躍が起こったことの背景には、斑点を付ける作業を進める内に授業時間を過ぎてしまい、かなり焦ってしまったということがあるかもしれない。例えば授業時間の終わりが近づいた時、J さんが「未完成だけど時間がないから途中でやめよう」と切り替えられる、あるいは「多少時間を過ぎても問題ないだろう」というのんびりとした性格をしていれば、この「黄色のりんご」は生まれなかったことになる（J さんは不安を感じやすいところがあり、メンター学生が対応に迷う事が度々あった）。

J さんの強い個性が武器となり、お手本を再現した作品ではなく、表面は黄色で内側は赤色という「表面と内側が逆転した」と解釈することもできるような深みのある作品ができあがった。J さんという人間の輝きを垣間見た、非常に印象深い出来事であった。

＜授業を振り返って＞

本授業はこれまでの授業以上に KUPI 学生の個性に多く触れられるものであったと思う。まず出来上がった作品がどれも個性豊かである。それだけでなく、作品作りの過程も KUPI 学生によってさまざまであった。例えば、道具の扱い方、器用さ、メンター学生とのかかわり方などである。こうした個性がよく見えたのは一方的に話を聞くことに多くの時間を費やすのではなく、自由な創作活動だったということがあるだろう。

また本授業は今年度最後の授業ということもあり、KUPI 学生とメンター学生との間に関係性が構築されていたことも理由として挙げられそう。苦手な作業はメンター学生を頼りながら作品に取り組む KUPI 学生の姿や、メンター学生も少しずつ個性豊かな KUPI 学生を理解し始め、落ち着いて対応している様子も見ることができた。



2) 「障害共生教育論」

【概要】

火曜日プログラム「障害共生教育論」は、神戸大学国際人間科学部の授業「社会教育課題研究（障害共生教育論）」として実施している。この授業は、発達コミュニティ学科の専門科目であるとともに、社会教育主事の資格に関連する科目である。他の曜日と異なり、KUPI 学生と一般学生が共に学びあうことを追求する授業である。

今年度は、KUPI 学生と一般学生が協働で、「いのちをつなぐ」について表現する作品を創作するのが授業テーマであった。「いのちの歌」（作詞：Miyabi、作曲：村松崇継）をテーマソングとして毎週、参加者全員で歌ってから授業が始まる。

前半は「大切に育ててもらった経験」について、KUPI 学生が一人ずつ PowerPoint を用いたプレゼンテーションを作成した。「いのち」の継承について考えるきっかけとして、自分自身が大切に育てられた経験に焦点を当てることで、「いのち」の継承を自分の問題として考える下地づくりがねらいである。

後半は、前半を発展させ、今度は自分自身が次の世代に「いのち（大切にしているものや人）」を受け継いでいくことを考えた。KUPI 学生は、他の KUPI 学生や一般学生・メンター学生と一緒に、助けも得ながら、演劇や人形劇、歌やダンス、絵画や詩や絵本、物語などの創作活動を通して考えを深めていった。

「いのちをつなぐ」をテーマにした KUPI 学生、一般学生に対するそれぞれの学びには、以下のねらいがあった。

【KUPI 学生の学び】

- ・表現したい自己を省察する機会となる。
- ・新たな自己表現の方法を習得する機会となる。
- ・「いのち」について考え、その思考を自由に表現する機会となる。

【一般学生の学び】

- ・KUPI 学生のライフストーリーや人格に触れる機会となる。
- ・他者の学びや自己表現の支援を実践的に学ぶ機会となる。
- ・場合によっては、一般学生が他者への支援の中で自分の専門性を試す機会となる。

【両者に共通する学び】

- ・「いのち」についての考えを深め、異質性の高い他者からの違った視点で「いのち」について考える機会となる。
- ・異質性の高い他者と協働で作品制作する体験となり、挑戦する気持ちを共有できる機会となる。

授業全体のスケジュールは、以下のとおりである。

日 程	授業内容
10 月 1 日	入学式、ガイダンス
10 月 8 日	昨年度のふりかえりと今年度のテーマ
10 月 15 日 ～11 月 5 日	「大切に育ててもらった私」について発表資料づくり（グループワーク）
11 月 12 日	「大切に育ててもらった私」発表会
11 月 19 日 ～1 月 28 日	「大切にしているものや人を次の世代に受け渡していく」ということについて表現する作品づくり（グループワーク）
(11 月 19 日)	身近な存在で「応援したり、育てなくなったりする人やもの」
(11 月 26 日)	「遺伝子」について
(12 月 17 日)	「優生保護法」について…「命が重い人」と「命が軽い人」がいる
(12 月 24 日)	「誰もが子どもを産み育てることのできる社会」について
(1 月 28 日)	発表会リハーサル
2 月 4 日	「いのちをつなぐ」最終発表会（公開授業）

次に、一日の基本的な流れは、以下のとおりである。

～16:50 頃 HC センターでの交流・夕食など

17:00～17:15 参加者全員で「いのちの歌」合唱、大学教員の導入

17:15～18:20 各グループでの活動（KUPI 学生・一般学生・メンター学生）

18:20～18:30 全体の諸連絡（一般学生の参加はここまで）

18:30～18:45 休憩、一般学生の困り事相談会

18:45～19:40 授業のふりかえり（KUPI 学生・メンター学生）

19:40～20:00 ふりかえりシートの記入、解散

20:00～21:00 メンター学生とコーディネイター、大学教員のふりかえり

授業は、KUPI 学生 4 人と一般学生 3～4 人、メンター学生 1～2 人のグループを 3 グループつくり、グループごとに活動した。前半の「大切に育ててもらった私」については、KUPI 学生は幼い頃の写真や卒業アルバムを持ち寄り、一般学生・メンター学生に自身の「大切にしてもらった経験」を語った。そうして語られた幾つかのエピソードから、KUPI 学生は一般学生・メンター学生の協力を得ながら、発表資料を作成して発表会を行った。

後半の「大切にしているものや人を次の世代に受け渡していく」ことについては、前半の発表を踏まえて、KUPI 学生自身が次の世代に「いのち」を大切に育てて、つなげることを表現する「作品」の創作活動を展開していった。はじめに、身近な存在で「応援したり、育てなくなったりする人やもの」について、KUPI 学生が語った。一般学生・メンター学生は、その語りから KUPI 学生が考える「いのちをつなぐ」ことを引き出していった。そして、それらをどのような「作品」として表現するのか、「作品」のストーリー展開はどうするのか、一般学生・メンター学生とも意見交換して、KUPI 学生の豊かな発想を「作品」づくりに込めていった。

後半の大学教員による授業の導入では、KUPI 学生らが「いのちをつなぐ」ことについて考えるための話題提供があった。「遺伝子」については、私の遺伝子は両親の遺伝子からもらったものであること、遺伝子は先祖から子孫へと受け継がれていくこと、生き物は自分たちの遺伝子を残そうとして必死で生きていること、人間は私たちが大切にしているあらゆるものを遺伝子のように次の世代につないでいこうとすること（それを「文化」と呼ぶこと）から、あなたが「応援したい」「育てたい」と思う人やものはあなたや仲間たちの「遺伝子」や大切にしている「文化」と呼べるものなのかもしれないと伝えられた。

「優生保護法」については、遺伝する障害をもっている人が妊娠した場合、医師は勝手におなかの中の赤ちゃんを殺してもいいと書かれた法律があったことが伝えられた。「命が重い人」と「命が軽い人」がいるという考え方があったことに、驚きの表情を見せる KUPI 学生もいた。また、2 年前に子どもを産めない体にする手術を受けた障害者のストーリーが語られて、「誰もが子どもを産み育てることができる社会」にしたい旨が伝えられた。これらの話題提供は、KUPI 学生の作品づくりに影響を与えた。

最終発表会では、ダンスあり、演劇あり、ドラマ上映あり、紙芝居ありと、KUPI 学生それぞれの表現方法で「作品」を発表した。一般学生・メンター学生も KUPI 学生の「作品」づくりに関わることで、自身とは異なる価値観や発想に触れ、新たな気づきや学びを得ることとなった。

【12 のエピソード】

L さん

■ 原体験から一貫している「誰かの役に立ちたい」気持ちの現れ

L さんは、「大切にされている私」についての具体的なエピソードとして、最初は、小学生の時に花壇や門の修理でたびたび学校に来ていた、地域の工務店のおじさんの話をしてくれた。そのおじさんから「今日暇か？」と声を掛けられ、一緒に物を運んだり、作業を手伝ったりするなかで仲が良くなっていったという。その後、ペアになった一般学生、メンター学生と学校経験を共有していくなかで、3 人とも陸上部で



あったことが判明し、陸上部の大変だった練習や出場した大会の思い出を共有することでお互いの距離がグッと縮まった。

次の週の授業では、陸上部という共通の話題が見つかり、エピソードが浮かびやすくなったのかもしれない。工務店のおじさんの話は全く出なくなり、陸上部の顧問の先生とのエピソードをもとに発表準備を進めていくことになった。Lさんの卒業アルバムや幼少期の写真を見せてもらいながら、顧問の先生とのエピソードを聞いていくと、校庭に白線を引いたり、練習で使用する道具を準備したりすることを頼まれた思い出を語ってくれた。

Lさんが語ってくれた「大切にされている私」の経験として共通していたのは、人から任される経験や人の役に立つ経験を通して、自分が大切にされていると感じていたことだった。たしかに KUPI の授業内外で、Lさんはいつも率先して周囲の手伝いや裏方の仕事を引き受けてくれている。当初、そんな Lさんの姿を見て、とてもありがたいと同時に、どうしてそこまで積極的に手伝いをしてくれるのだろうと不思議に思うことがあった。今回 KUPI の授業で語ってくれた経験から、現在の Lさんの原体験とも言える経験を知ることができた。

後半の授業では、メインテーマである「いのちをつなぐ」ことについて考えた。「大切にされている私」の経験を踏まえて、Lさんが未来へと繋ぎたいことは、自身がサポーターであるサッカーチーム（Jリーグ）のヴィッセル神戸だった。

今年で30年の刻を迎えた阪神・淡路大震災。幼かったLさんは自宅で被災した。家の中はメチャクチャになり、近所で火災が発生したことも重なって、学校へ避難した。約1カ月の間、グラウンドでテントを張って過ごした経験があった。時を同じくして、ヴィッセル神戸は、チームとしての産声をあげる「はず」だった。くしくも、1995年1月17日は神戸市内でのチーム初練習を予定していた。早朝の大地震発生によりチーム練習は中止、選手たちもまた「被災者」であった。

あれから、30年が経った。Lさんは神戸大学構内で仕事をし、KUPI 学生として4年間学び、ESDプラットフォーム WILL のメンバーとして各地でボランティア活動をしている。ヴィッセル神戸は、2020年元日に天皇杯制覇、チームに初のビッグタイトルをもたらした。2023年シーズンにはJ1初優勝。2024年シーズンは2度目の天皇杯制覇とJ1連覇を果たしている。Lさんはヴィッセル神戸サポーターとしてホームゲームのほとんどを現地観戦し、全試合の結果をノートに記録している。30年前に神戸で「同じように」被災したLさんとヴィッセル神戸は、現在「同じ」道を共に歩んでいる。

ヴィッセル神戸のチームチャント（サポーターが歌う応援歌）のひとつに「神戸讃歌」がある。試合会場で選手入場前と勝った後に歌っている。2005年、チームが最下位に沈ん



だとき、名曲「愛の讃歌」のメロディーにサポーターの言葉をつないで歌詞がつくられた。

俺達のこの街に お前が生まれたあの日
どんなことがあっても 忘れはしない
共に傷つき 共に立ち上がり
これからずっと 歩んでゆこう
美しき港町 俺達は守りたい
命ある限り 神戸を愛したい

そんな L さんが未来へ「つなぎたい」ことは、ヴィッセル神戸を応援し続けていくことだ。チームには若手選手を育成して欲しいと願っている。そして、大きな災害があったときは、避難所の手伝いをして炊き出しをつくりたいと考えている。

L さんは、どんなに辛いことやシンドイことがあっても、誰かのために動くことができる。誰かの役に立ちたいと思っている。そんな彼は、誰からも愛され、頼りにされる。現在の日々の仕事や KUPI での学び、WILL での経験は、L さんにとって自信となり、未来へつなぐために「大切にしているもの」となっている。L さんにとっての「いのちをつなぐこと」とは、彼の原体験から生まれた「優しさ」と「強さ」をつなぐことなのだろう。

ヴィッセル神戸は、リーグ最下位や J 2 降格を乗り越えたからこそ、現在の強いチームがある。L さんは、そんなヴィッセル神戸が大好きなのだ。

クリムゾンレッドの遺伝子は、震災の「あの日」からずっとつながっている。

J さん

■会話と創作から表現できた家族愛

授業前半では、J さんを大切にしてくれた人として、お母さん、兄弟、友人、お世話になったお医者さんと、たくさんの人々とのエピソードを聞くことができた。赤ちゃんのころや、お母さんに抱きかかえられているときの写真を持ってきて、可愛らしいと言われると嬉しそうな表情を見せてくれた。



過去のエピソードについて、思い出すと次々に話したい内容が出てくるのか、熱心に話してくれた。高校時代の友人については発表で紹介していいか許可を取らないといけないという気持ちや気恥ずかしさもあったようだった。一方で、たくさんいる兄弟は苦しい時に励ましてくれた大切な存在であると言い、名前を全員紹介したいという熱意があった。

J さんは写真に写った小さい頃の自分について「病気にかかった J」という表現をたびたび使い、お母さんやお医者さんは病気や感覚の繊細さで辛い思いをしていたときに助けてくれたという感覚が強いようだった。兄弟のエピソードと合わせて、苦しいときに助けて

もらった記憶を言葉にすることで、大切にされてきたことをたくさん実感できた様子が見られた。

発表づくりの時間では、タイピングが得意であることを教えてくれて、こだわりを持って楽しくスライドづくりに取り組んでくれた。途中パソコンが上手く立ち上がらず作業が止まってしまったときなどは、気分が落ち込んでしまう様子もあったが、スライドづくりにも真剣に取り組んでいたからこそその気持ちだと思う。

前半の発表会は緊張がありながらも、発表したい、みんなに見てほしいという気持ちを持って見事に発表することができた。

授業後半の創作活動では、J さんは何をどう表現するのかしばらく迷う時間が続いた。ダンスや歌などやりたい表現はたくさんあり、限られた発表時間の中で何を選ぶか迷っているときに、他の KUPI 学生から劇への出演の依頼が入った。そこで、ドラマをしたい！と思いつくと、登場人物やテーマ、台本まで一気に決まり、J さんの楽しそうな笑顔がみられるようになった。

参考にしたドラマは J さんが小さい頃お母さんと一緒に見ていたドラマである。J さんは、病気になった子どもに寄り添うお母さん役を演じた。他の KUPI 学生、メンター学生、ボランティアが子ども役、看護師役、薬剤師役を演じた。撮影となると、緊張で厳しいお母さんになってしまい何度も撮り直した。「どうしても緊張してしまう、優しいお母さんになりたいねんけどな」という言葉も聞かれた。その結果、いろいろな人の協力もあり、J さんこだわりの音楽もいれて編集した素晴らしいドラマが完成した。



ドラマには、J さん自身がこれまでお母さんにしてもらったこと、「子どもを1番大切にしたい」という思い、看護師など命にかかわる職業に就きたいという夢が詰まっている。他の KUPI 学生に刺激され、表現したいものと表現方法がピタッとハマった瞬間が印象的だった。J さんは来年も新しいドラマを撮ると意気込んでおり、伝えたいものを表現する楽しさを感じた授業となったのではないかなと思う。

N さん

■ ツールから派生し生まれた大切なつながり

N さんは今年度初めて KUPI に入学し、火曜日の授業を通して様々な活動をおこなった。前半の活動では、「いのちをつなぐ」というテーマと関連して、「大切にされてきた経験」を N さん、一般学生、メンター学生がともに語りあった。そのなかで N さんは、持ってきた写真を通して両親との思い出や家族とのお出かけが好きなことなど、色々な話を展開していた。

Nさんと以前から交流があったボランティアは当初、自分の世界に閉じこもっているように窺えたNさんに対して「マンツーマンで手伝ってあげる必要性」を感じていた。しかし、「大切にされてきた経験」を改めて言葉にしたり、メンター学生や一般学生の「大切にされてきた経験」を聞いたりするなかで、人との輪が広がり、自分から振り返りの司会を担うなど、Nさんの世界がどんどん広がって



いくような姿が見られた。また、Nさんが好きなものである自動販売機や飲み物をツールとしてメンター学生や一般学生と会話を展開するなかで、Nさんが持つ世界を他の人にも伝えていくというような姿も見られた。

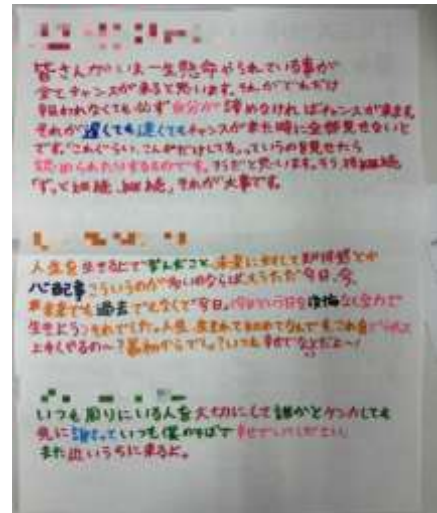
授業後半の創作活動では、「いのちをつなぐ」最終発表会に向けて、Nさんは自身の「いのち」をどう捉え、いのちの大切さについて、創作活動を通して、どう表現すればいいかを一生懸命考えることができた。Nさんは、鉄道に関心を持っており、電車に乗る旅物語の中で、人とのつながりや駅員さんに助けてもらうといったエピソードを交えた紙芝居をすることになった。また、自動販売機にも関心を抱いており、授業ではいつもお気に入りの飲み物を持参して、自動販売機の特長や季節限定のオリジナル飲料について、紹介してくれた。そのため、紙芝居の中に、自動販売機で飲料を買うシーンを含めることを提案し、鉄道と自動販売機の内容を含めた紙芝居を披露することにした。紙芝居はKUPI学生、メンター学生、一般学生が手分けして、個々のストーリーに沿った内容の絵を書き、その上に色鉛筆やクーピーで色塗りの作業を協働して行った。紙芝居を披露する際に、躍動感を出すために、電車の効果音やアナウンスを実際に流してはどうかと提案すると、彼自身も提案を受け入れ、実際にシナリオに沿って音源を流し、本番ではその場を盛り上げることができた。電車の効果音やアナウンスを本番で披露したことで、より発表が躍動感あふれる場面となり、多くの人が再現度の高い作品であったと評価してくれた。また、Nさん自身もKUPIに入学したのが初年度であったことから、発表する際、とても緊張していたものの、大きな声で紙芝居に沿った劇を演じることができ、発表後は満足しているように見えた。ボランティアの一人は、保護者の方との会話から「そこにはNさんの学生時代の経験や生きてきた証、真面目さやリーダーシップがあらわれている。」と推測している。



Mさん

■「大切にされている私」に対する自己の気づきと「いのちをつなぐ」ことの大切さ

Mさんは、「大切にされている私」に関する話題を取り上げ、自分が生まれた時のことや、幼少期のことについて話してくれた。その中でも特に、Mさんが生まれた時に関するエピソードが印象的であった。それは、Mさんのお父さんが友人の結婚式に行く日にMさんが誕生したエピソードであった。Mさんが生まれたのは出産予定日より早かったため、誰もその日にMさんが生まれると想定していなかった。その日はMさんのご家族が忙しく、お父さんが友人の結婚式に行く予定だったのだが、急遽、親御さんや親戚の方が病院にかけつけてくれたそうだ。Mさん自身、このエピソードを少し前に知ったそうである。そのため、「大切にされている私」での発表会でも、このエピソードについて紹介してくれた。授業を重ねる度に、Mさんは、幼少期のアルバムを大量に持参し、幼少期の思い出のエピソードを嬉しそうに、メンター学生や一般学生に語ってくれた。お互いにエピソードを交えて語り合うことで、一般学生、メンター学生との距離が近くなり、間主観的な場面を構築することができた。Mさんの話を聞いていく中で、いかに彼女自身が両親や周囲の人々から大切に愛されて育ったのかを知ることができた。また、Mさんは仕事をしながらKUPIに参加し、隙間時間を活用して勉学に励んでいたため、学業と仕事の両方に意欲的に取り組んでいた。



後半の活動で「いのちをつなぐ」というテーマで物語を作る時、Mさんは応援したい推しについて色々話した。Mさんは三年前に韓国のアイドルグループを知り、ライブにもハイタッチ会にも参加して大好きになった。推しの話になるとワクワクしてたくさん紹介してくれる。今年はアイドルグループのリーダーが交代することになったので、Mさんは大好きな推しがリーダーという大きな責任の仕事をしていることにより、自分も新しい仕事に挑戦しようと思い、今年から次第に新しい仕事をし始めた。忙しい日々の生活を送り、いろんな仕事をやっている推しの様子を見て、自分も「どんな仕事もできるようになりたい」、「できることをやって一步一步前に進んでいきたい」と思った。

私はMさんの気持ちがよくわかる。推しを応援することで確かにたくさんのエネルギーがもらえる。私の身の回りの友人も応援している推しがいて、推しからの力をもらって大学院に入ったり、資格を取ったりして好きなことをしている。その友人は「私は幸せだな」と言い、よく頑張っていると思っている。そのような話はMさんから聞いたことがある。推しは舞台上で頑張っている代わりに、自分も職場で色々な仕事に挑戦して頑張っていきたいと思う。Mさんにとっては目標があるからこそ、充実して幸せな生活を送ることができる。私は本当に感動した。今回は「いのちをつなぐ」というテーマで物語を作ることによ

り、Mさんは自分自身の人生の大切さ、人々とのつながりの重要さをよく認識し、期待できる未来に向けて、責任感と自信を持ち、着実に前に一步一步進んで、またいろんなスキルを身につけ、仕事にも自分の人生にも役立てると思う。

Sさん

■創作や対話の中で変化する他者へのまなざし

前半の授業で多くの KUPI 学生が一般学生やメンター学生と自身の家族や大切な人について語り、そのストーリーを発表に落とし込んでいく中で、Sさんは初回から1人で淡々と作業を進めていた。Sさんが発表したのは自身が属する団体のメンバーで、その団体に関する情報やその人物の長所、その人物に対する感謝の気持ちをまとめた。そこには、Sさんがその人物との関係性の中で何かをしてもらった、という経験はあまり見えてこなかった。「Sさんがその人に何かしてもらったエピソードを入れるのはどう？」などとメンター学生が声をかけても本人はあまり腑に落ちていないようだった。「大切にされた」「育ててもらった」という言葉からは、家族や近い人になにかをしてもらった経験をイメージしやすいと思うし、それも「大切に育ててもらった私」だと思う。一方で、Sさんは、その人物への自分の思いを綴るなかで、「大切にされた」「育ててもらった」という言葉の意味を、実感が湧かないながらもSさんなりに解釈していたのではないだろうか。前半の創作活動で、「いのちをつなぐ」という大きなテーマをSさんがどれだけ自分ごととして捉えられたかはわからないが、「大切に育ててもらった私」というテーマに対してある種の違和感を抱きながらも、誰かとの関係性の中で自分・他者が存在するということを見つめ直すきっかけになったのではないかと考えられる。



「いのちをうけついでいくわたし」と題して進められた後半の活動では、ボランティアで来てくれた学生とともに活動を進めた。「Sさんらしく」発表内容・発表原稿は早い段階で完成したが、メンター学生はSさんなら「いのちをつなぐ」というテーマにもっと迫れるのではないかと思った。そこで、「作った発表原稿のなかで、どこが「いのち」というテーマに関わりがある部分？」という少しいじわるな問いを投げかけた。すると、「今回の発表は、〇〇さん（ボランティアで来てくれた学生）と一緒にテーマや内容を考えた」と答えてくれた。また、発表のタイトルを決める際にも「Sさんがこの授業で感じた「いのちをつなぐ」というテーマと関わりが出るようなタイトルが見つかるといいね」という話をした。そして決まったタイトルは、「命・協力・仲間」。「応援したい人やもの」「育てたい人やもの」という話題から展開して、動物の命や自身が所属する団体の仲間、彼らと協

力して活動することの「よさ」が発表では語られた。

火曜日のプログラムがすべて終了したあと、S さんに対してメンター学生が「火曜日のプログラムで学んだことは何だったと思う？」という漠然とした問いを投げかけたところ、「ボランティアの学生とお互いが動物を飼っているという話から色々話すことができた」、「どうやって発表しようか考えた」と話してくれた。前者の発言からは、S さんにとって学生と対話をし、そのなかで自分との共通点など新たな発見があること自体を「学び」と捉えているのではないだろうかと推測した。一方後者の発言からは、昨年は自分の好きな色やフォントで発表資料を作成していた S さんが、「みんなに伝わりやすい発表ってなんだろう」というような観点を持つという変化を感じることができた。

Q さん

■家族に大切にされてきた経験と KUPI で新たなつながりの創出に向けて

Q さんは今年度初めて KUPI に入学し、自分の生活と KUPI での活動を調整しながら、火曜日のプログラムを通して様々な活動を行った。

今年度のテーマは「いのちをつなぐ」。前半の活動では「いのちをうけついできたわたし」について考えるということで、Q さんと一般学生は「大切にされてきた経験」をともに語り合った。そのなかで Q さんは、写真を用いながら家族とのエピソードをたくさん話してくれた。それらのエピソードをまとめた前半の活動の発表会では、「両親と祖父母の 4 人から沢山愛情を貰って今の自分がいる」「プレゼントをたまにしたりして、お返ししていきたい」という思いが語られた。



後半の活動は体調不良が重なり、なかなか参加することができなかったが、そのなかでも「いのち」というテーマに関連して「大切にしているもの」「これから大切にしていきたいもの」についてメンター学生と話し合い、作品づくりを進めていった。Q さんは自身で小説を書いているということで、文章を書くことに馴染みがあり、文章で表

現したい、その文章をパワーポイントにして発表したいと表現方法はすなりと決まった。また、作品のキーワードとしては「自分が書いている小説の登場人物」、「大切なぬいぐるみ」の 2 つが挙げられていた。「大切なぬいぐるみ」に関しては、「ぬいぐるみがないとしんどい」というような Q さんの経験や思いが語られた。しかし、「自分のことよりも小説についての方が発表を考えやすい」ということで、「自分が書いている小説の登場人物」への思いをみんなに伝える形で発表内容を作りあげていった。

後半の発表会当日も参加が難しかったものの、パワーポイントに音声を入れて発表することができた。発表内容を聞くなかで私は小説のキャラクターと「大切なぬいぐるみ」の話をしていた Q さんを重ね、KUPI での人とのつながりが Q さんにとってあたたかいものだったらいいなと考えていた。

0 さん

■KUPI での成長と言葉にできない思い

今回で3回目の KUPI 学生となる 0 さんは、出会った時の表情がとても印象的だった。最初に 0 さんが見せた表情は「寂しげな」表情であった。月曜日の KUPI に見学参加していた私とワークのペアを組む予定だったが、他のグループの人数が少なくなったことで、私が別グループへ移動することになった。ペアが組めなくなった時に少し口を開け、寂しげな表情は、KUPI への期待の裏返しであったことだと理解するのに時間はかからなかった。

翌日火曜日の KUPI で 0 さんの隣に座ると、意気揚々と一生懸命に話をしてくれたが、私には内容は理解できなかった。0 さんが「キャンプ」や「津田先生」などの、固有名詞を一生懸命伝えている姿を見て、ボランティアの倉石さんが以前に合宿へ行った時のことだと解説してくれ、初めて言葉の意味が理解できた。



0 さんと前半に取り組んだのは「大切に育ててもらった私」というテーマで、プレゼン資料をパワーポイントで作成することであった。大切に育ててくれた家族や愛犬のことを一生懸命に語り、翌週にはたくさんの写真データも持参してきてくれた。写真の中には家族との写真や近所のお祭りなど、0 さんの大切にしているものが感じ取れた。ここで私は出来映えを気にするあまり、パソコンでの作成を自ら進めてしまった。振り返りの際に 0 さんの自主性を引き出す様にアドバイスを受け、翌週からまずは彼の思うように作成してもらい、イメージ通りできない時にだけ、作業を補助することにした。真剣にパソコンの文字を打つ姿から、学ぶこと、挑戦することの大切さを教わりながら、共に作品作りに取り組んだ。文字変換も覚え、文字の大きさも調整できるようになった 0 さんから誇らしげな笑みと共に、翌週にパソコンを購入したと聞いたことは、更なる驚きでもあった。

後半は「いのちをつなぐ」をテーマに、次世代に残したいものを表現することに取り組んだ。0 さんの選んだ表現は「歌とダンス」であった。自身の持つ「やさしさ」を大切にしたいという思いと、KUPI で学ぶ楽しさを表現したいという作品作りには、一般学生の A さんと B さんも参画してもらい、それぞれが作詞と振付に取り組んでくれた。製作の過程で、一般学生の A さんから、「今日、前を歩いている人が遅かったので、イライラしていた。だけど、0 さんのやさしさを思い出して、広い心を持たないとなって思いました。」という言葉があった。0 さんの表情は言葉の意味を受け入れようとするいつもの表情であったが、0 さんの大切にしたいやさしさと KUPI で学ぶことの面白さを感じた瞬間でもあった。製作も佳境となる中で、A さんは卒論がある中でも、ダンスの振り付けを動画にして教えてくれた。B さんも 0 さんの想いを込めた作詞と、発表当日は自作の動画に歌詞を表示してくれるなど、



それぞれが自発的かつ献身的に取り組んでくれた。

KUPI の火曜日の授業では、最初に「いのちの歌」を全員で合唱する。12月になった頃、隣で歌うOさんの歌声にハッとさせられた。言葉になっていて、歌が上手になっている。Oさんは自分の考えていることを言葉にできない。文字から歌詞を覚えることも苦手だとお母様に伺った。しかし、通学中の車内でいつも歌って練習していたのだと本人が教えてくれた。「人が想いを伝えるのは言葉だけではないよ。」そんな言葉を感じさせる笑顔であった。修了式の後、成長を実感できるから好きだという、KUPIでの再会を約束した際には「寂しげな」表情であった。卒業となる4回目のKUPIへの期待であろう。

Kさん

■写真を通して見えたKさんの見ている世界

「いのちをつなぐ」ということについて考えるうえで、Kさんにとってカメラは切っても切れない存在だ。未来に残したいもの、受け継いでいきたいものを考える際、自分がいま大切にしているものはなんだろうか、というところから考え始めた。Kさんにとってそれは、祖父から受け継いだカメラだった。次に、どのような発表をするか、過去、現在、未来に分けてストーリーを考えていった。祖父からカメラを受け継ぎ、16歳から写真を撮り始めたという過去から、現在は、そのカメラをとっても大切にしている、写真を撮ることが好きであるというストーリーができた。それでは、未来に受け継いでいくということについて、どのような表現方法があるだろうかと、さらに考えを深めていった。メンター学生や一般学生と一緒に考えていくなかで、未来に残したいものを写真で表現したらどうだろうか、という提案があった。そこで、未来に残したい日常の風景をテーマに、写真展を開くことになった。

写真の展示について決めていく際、Kさんは、最初は「何枚まで展示していいですか?」、「どのくらいの大きさなら印刷できますか?」といった質問をしていて、少し遠慮気味なように見受けられた。こちらから条件を指定してしまうことは避け、可能な限りKさんのイメージややりたいことができるよう、実際に展示する場所に行って、どのくらいの大きさが見やすいか、何枚ぐらい展示できそうか、イメージを膨らませながら、展示方法を決めていった。準備を進めていくなかで、随所にKさんの展示へのこだわりが感じられた。どういう順番で写真を飾るべきか、1枚1枚の写真を見比べながらじっくりと考えていた。また、最初は片方の壁に8枚の写真



真を飾るということを考えていたが、Kさんから反対側の壁にも飾りたいという意見が出て、3枚は反対の壁に飾ることになった。KUPIの授業時間後も二人で展示準備を進め、作業が終わったのは20時過ぎだった。「Kさんのイメージしたものができるかな?」と尋ね

ると、「想像以上のものができた」と満足気だった。発表日の1週間前から写真を展示していたため、KUPI に関係のない多くの人にも K さんの写真を見てもらうことができた。たまたま前を通った学生が「うわ、写真すごい」と思わず声に出していたのを準備中の K さんも聞いていた。自分の撮った写真が展示され、それを見た人の反応を直接見るという貴重な経験になったのではないだろうか。振り返ってみると、当日の発表方法について、写真をスライドで流して紹介して、実際の展示は時間がある時に自由に見てもらう方法はどうかと提案したこともあったが、直接見てもらいたい、また、見た人の感想や質問をその場で聞きたい、という K さん本人の強い意思があった。ここにも、実物を見てもらい、見た人の反応を直接見たいという、K さんのこだわりが感じられた。



K さんの撮影ポリシーは、できるだけ少ない回数でイメージ通りの写真を撮り切ることだという。K さんが見ている世界や、着眼点がとても面白いと感じ、特に印象に残った写真が2枚ある。左の写真は「動物園」というタイトルの写真で、K さんがこの写真は展示したいと即決した1枚である。「動物園」というタイトルであるが、写真に写っているのは三宮の南の地下道である。よくよく見てみると、地下道の壁に様々な動物の絵が描かれている。何気なく通り過ぎてしまう地下道だが、K さんにはそれが「動物園」に見え、通る時に少し怖いと感じたという。写真そのもののインパクトもさることながら、「動物園」というタイトルが写真の魅力をさらに引き立てている。右の写真は「迎春」というタイトルである。こちらも普段見過ごしてしまうような、配管の錆の写真である。K さんはそれを見て面白いと感じ、写真に収めた。しかし、写真のタイトルは「迎春」である。お正月に撮った写真なのだろう、配管の奥に写る商店街の様子の中に、ぼんやりと「迎春」の文字がある。この写真からも、K さんならではの風景の切り取り方が感じられた。発表後に、K さんの母親から、「これまで本人がどういう思いで写真を撮っていたのか全然知らなかった」という感想があり、とても印象に残った。たしかに、写真展という表現を通して、K さんが見ている世界を見ることができた気がする。

P さん

■「協力」して作品をつくることの楽しさ

後半の活動テーマは、「いのちをうけついでいくわたし」。大学教員による遺伝子の話があった活動日のグループワークで P さんは、「応援したくなる人やもの」「育てたくなる人やもの」として、ドラえもんやクレヨンしんちゃんなど、長く続いているアニメの話を出してくれた。そこから、「原作者がなくなってもお話は続いている、なぜ続いているんだろう?」「誰か他の人がアニメの「遺伝子」を引き継いでいっているのかな?」という話へと展開していった。一方で、P さんが活動していたグループでは「KUPI」自体も重要なキーワードとなっていた。一般学生やメンター学生が質問を重ねていく中で、KUPI 学生からこれまでの KUPI での思い出やこれからも KUPI で大切にしてほしいことなどが語られた。



2回のグループ全体でのワークを経て、3回目の授業では実際にどのような内容で作品を作っていくのか、KUPI 学生が一般学生やメンター学生とペアになって活動を進めていった。P さんの作品づくりとしては、「アニメ」と「KUPI」という2つのキーワードが上がっていたが、P さんは「KUPI」で作品づくりをしていきたいということで、KUPI での思い出や KUPI への思いを詳しく聞いていった。実際に作品づくりへと落とし込んでいく過程では、まず表現方法を決定した。P さんは昨年度に「演劇」を用いて作品づくりを行っており、今年も演劇がしたいということで、表現方法はすんなりと決まった。また、物語については、それまでに聞いていた KUPI での思い出や KUPI への思いを「過去」「現在」「未来」という構図に落とし込みながら、一般学生とともに作り上げていった。

私が最も印象的だったのは、物語のなかで未来の P さんをどのように描き出すのか、P さん、一般学生、メンター学生がともに考えた場面である。「2030 年の P さんはどうなっているんだろう?どうなっていたい?」という話を展開するなかで、一般学生が「P さんがアカデミー賞をとってスピーチしているシーンをいれるのはどうだろうか?」と提案した。P さんはその案を気に入ったのか、うれしそうに笑っていた。その授業後の振り返りで考えた P さんのスピーチ原稿初版には、KUPI への思いがたくさん込められていた―「1人だったら、出来ないけど、メンターさん、一般学生さんたちたくさんの人に協力してもらったから出来ました」(一部抜粋)―。原稿のなかには、「協力」という言葉が何度かでてくる。P さんにとって火曜日プログラムの活動は、いろいろな人に助けられ、またいろいろな人を助けながら、お互いに自分がやりたいことを実現していく、まさに「協力」のプロセスを学ぶものとなっていたのだろう。

R さん

■発表の裏にあった物語の広がり

後半の「いのちをつなぐ」というテーマについて、R さんは好きなアイドルとの出会いから始まる物語を紙芝居のようにして発表することを構想していた。アイドルと出会い、プロポーズされ、新しい命を授かるという流れであったが、プロポーズ後の話にアイドルの彼は登場せず、物語はアイドルとの馴れ初めが描かれる前半と、彼女自身の日常生活を描く後半に分かれているような印象だった。

「いのちをつなぐ」ことを直接的に示す新しい命の誕生は物語のひとつの焦点だったが、授かる命は R さん自身であったり、亡くなった彼女のおばあさまであったりし、アイドルの彼は「関係ない」とのことだった。当初、子どもを育てていく場面も考えられていたが、いつしかその場面はなくなり、物語の主題は次世代の誕生から現在の家族へと移っていった。R さんにとって大好きで大切な家族を守っていきたいという想いが前面に出て、最終的に発表では前半のアイドルのお話はカットされた。発表直前の変更になったが、「(R さんがそのアイドルを好きなことは) みんな知っているから」と発表をみてくれる人たちを前にして、家族を大切にしていきたいという想いを伝えたい様子だった。

物語は R さんと一般学生である私たちの会話の中で練られていき、おおまかには R さんが語る場面を私たちが質問や確認をしながら物語として配置していった。R さんは好きなアイドルや、家族のこと、お仕事のことなど多くのことを語ってくれ、それらは物語の一部であったり関係なかったりしたが、R さんに確認すればはっきりと答えが返ってきたので、



私たちはそれを物語として解釈することに頭を悩ませた。なかでも前半のアイドルのお話と、後半の家族や R さん自身のお話とのつながりは悩んだ点だった。後半のお話の位置づけはアイドルと出会う前の前日譚や、プロポーズ後の花嫁修業のようなものという候補が挙がったが、どれも後に撤回されることになった。発表を次の週に控えた最終準備では、描いてもらった絵を見ながら原稿を一緒に書き起こしていったが、その際も前半と後半のつながりは曖昧なままであった。私としては物語をまとめたかったので両者のつながりが必要だと考え、前半と後半の間に空白を設けつつ物語の最後まで原稿を起こしたところ、R さんが手元のスマートフォンで動画をみせてくれた。最初、私は物語に関係ない動画だと思ったが、R さんと話すうちに私が空白にした部分を埋めるための内容であることが分かった。付き合うことになったがそれを隠しているという設定で、後半の日常へ上手くつなぐアイデアだったので、発表でカットされてしまったことを少し残念に思うほどだった。

R さんにとって「いのちをつなぐ」というテーマは、つながれてきたいのちへの感謝とそれを大切にしていきたいという想いとして表れていた。彼女とのコミュニケーションを通じて、私はその豊かな世界や発想を垣間見せてもらえたと感じている。

Tさん

■身近な「いのちのつながり」をきっかけに深まる、社会で奪われる「いのち」に対する思い



前半の授業では、自分の家族がいかに大切か、そんな家族が自分の落語を応援してくれているということなどを一般学生やメンター学生に対して楽しそうに語り、発表していた。そんな Tさんは後半の授業では、うってかわって自身が好きなテレビアニメ「サザエさん」に出てくるキャラクターについての発表を考えていた。特に好きなキャラクターであるカツオに対してラブレターを書く、サザエさんに関

するクイズを出す、パワーポイントを使ってキャラクターのプロフィールを紹介するなどさまざまなアイデアを出していて、Tさんのもつ表現方法の引き出しの多さに驚かされた。一方で、Tさん自身がいのちをどうつないでいくのか、「いのちをつなぐ」というテーマと自身が好きなテレビアニメとがあまり結びついていないようにも思われた。

「サザエさん」についての知識やどういうところが好きなのかを語る中で、徐々に前半で語ったような Tさんの家族についての話もでてきた。前半では、Tさんのご両親や祖父母への愛が発表の中から感じ取れ、後半の授業でも家族のおかげで自分が幸せ、家族が自分を大切にしてくれて、自分も家族を大切にしているということを語っていたが、後半では家族についてより深い話をしてくれたように思う。

きっかけとなったのは、授業内での障害のある方どうしの結婚や避妊手術についての話だった。その回の前の授業では、優生保護法について大学教員から話があり、Tさん自身はショックを受けつつ、「遺伝」という言葉に対して、「難しい」と話していた。Tさんは、家族がいのちをつないでいる、ということを語ったうえで、自分は結婚したくない、と語った。その理由を尋ねると、Tさんの中に強い印象を残しているさまざまなニュースについて語ってくれた。夫婦間で一方がもう一方を殺した、というニュース、放火があったというニュース、自殺があったというニュース。発表をつくるなかでは東日本大震災についても語ってくれた。こうした「いのち」という大きなテーマとそれを奪うような残酷な出来事に対して、Tさんはそれまで話しづらさを感じていたようだ。後半の授業の場で自らの社会に対する関心を表に出しながら、そうした事柄に向き合い、「なぜ結婚するのか」「なぜ命は奪われてしまうのか」という問いに対する考えを深められたのではないかと思う。

Uさん

■ダンスと歩んだこれまでとこれから

前半の創作活動が始まった最初の授業で、Uさんは『いのちのうた』の替え歌を作ることを宣言した。昨年度以前のUさんを知るメンター学生は、一貫して「ダンス」を表現の中心としている彼が「歌」のみで表現すると宣言したことに、はじめは驚いてしまった。しかしすぐに、Uさんが昨年度のKUPIで替え歌づくりにも取り組んでいたことが思い出され、Uさんの中でこれまでのKUPIでの活動が「表現方法」という形でもつながっていることを強く感じさせられた。

そんな『いのちのうた』の替え歌の歌詞は、一般学生とUさんとの二人三脚で作上げられた。まず、一般学生がメロディーにうまく言葉がハマるような文字数を紙に書きだす。次に、Uさんが自分の「大切に育ててもらった経験」の中で歌詞にしたい内容を語る。そうして出てきた内容を二人で吟味しながら、先ほどの文字数に当てはまるように言葉を選び、一文一文丁寧に歌詞が作られていった。



そうして出来上がった歌詞の中には、仲間とダンスをするきっかけをくれたダンススクールの先生から貰った「涙や悩んだ時は踊れば大丈夫。とりあえず体を動かすとダンスが生まれるよ」という言葉をはじめ、自分がダンスを教えてもらったとき・褒めてもらったときのエピソードが盛り込まれた。発表会本番では、大学教員のピアノ伴奏に合わせ、時に歌詞に忠実に、時にアドリブを交えながら、堂々と歌いきった。歌いきった後、Uさんは感極まり、まとも涙を流していた。

後半の「いのちをつなぐ」をテーマとする創作活動では、Uさんはやはり「ダンス」を中心に据えた表現をすることとなった。更に、KUPIで活動した四年間の集大成となる活動ということもあり、パントマイムや演劇といったダンス以外の表現方法も積極的に取り入れることとなり、最終的には総合芸術たる「ミュージカル」と呼べるような発表形態となった。

こうした表現方法については早い段階で方針が固まったため、後半の活動時間の多くは表現内容について考える時間に割かれることとなった。「いのちをつなぐ」という、すぐには何を表現すればよいかわからないテーマを前に、Uさんと、彼と二人三脚で歩むことになるメンター学生はひたすら対話を重ねた。

対話の出発点となったのは、Uさんの中にある「自分のダンスを、CDやDVDといったモノとしてではなく、誰かに教えることで残したい」という強い気持ちだった。毎年KUPIと一緒に踊ってくれたメンバーたちにやっていたように、将来はダンススクールを立ち上げて、振り付けや立ち位置を教えたい。そうして教えたメンバーたちが、たとえ僕がいなくなったとしても、教えた通りの振り付けでなくていいから、ダンスをしてほしい。U

さんの中にあったのは、そんなダンスを「いのち」のように繋いでいきたいという気持ちであった。そして、対話の途中でふと U さんが口にした言葉を借りる形で、「ダンスにもいのちがある」というこの表現の根幹を成す考え方が生まれた。

「ダンスにもいのちがある」という考えが生まれると、U さんがこれから先の未来に繋いでいきたいダンスだけでなく、U さんがこれまでに受け継いできたダンスについても視線が向けられることになった。そうして、U さんとダンスの「過去」と「未来」について対話を重ねるうちに、だんだんと「過去」から「未来」に向けた一本の流れが見えてきた。

U さんがダンスをみんなに教えたいと思うのは、ダンスが障害を持っている人でも、心を病んでいる人でも、支援を求めている人でも、誰もが楽しく集まってできるものだと考えているからだということ。その背景には、先のダンススクールの先生や小学校の先生が「障害のことを抱え込まなくていいんだよ。」「障害のあるなしに関係なく、ダンスを楽しめばいいんだよ。」と声をかけてくれた過去があること。今度は自分がそちら側に回りたいこと。こうした U さんの語りから、U さんが「いのち」のようにダンスを受け継ぎ、育て、そして今度は自分が誰かに繋いでいきたいことを表現することが決まった。

表現内容が決まってからは、急ピッチで発表の準備が進められた。ダンスの振り付けや台詞といったパフォーマンスの内容については U さんが、それを実現する舞台演出についてはメンター学生が担ったのだが、互いに信頼して背中を預け、発表会に向けて突き進んだ時間は、確かに青春であった。

最終的にこの舞台では、U さんの中に「ダンス」が生まれた小学校での出来事をはじめ、ユニバーサル・スタジオ・ジャパンでダンサーの人に直接褒められたこと、ダンススクールの先生から力をくれる言葉を貰った時のこと、U さんと「ダンス」を語る上で欠かせないこれまでの KUPI 火曜日プログラムでの活動が、時系列に沿う形で表現された。そして最後は『いのちのうた』に合わせ、振り付けを教えた一般学生と共に「ダンス」を披露した。発表後、「大成功してよかった」と語る U さんは、涙を流してくれていた。



こうして、U さんの火曜日プログラムでの創作活動は、一旦の終幕を迎えることとなった。初年度からダンスによって様々な物事を表現してきた U さんだが、今年度はダンスそれ自体を通して自分の人生や「いのち」について考えを深めることとなった。それは、それまでは自分と強く結びついていたダンスを一旦俯瞰するきっかけとなり、自分の人生におけるダンスの位置づけを確認したり、自分がダンスを踊る意味を再定義したりする機会をもたらしていたのではなかろうか。ここでの学びが、彼のこれからの未来を、明るく照らしてくれることを願っている。

【まとめ：メンター学生は火曜日プログラムをどのように見ていたのか】

■KUPI という学びほぐしの場

KUPI は、KUPI 学生だけでなく、メンター学生や一般学生にとっても豊かな学びの場となっている。ここでは、印象に残っている学びを二つ紹介したい。

一つ目は、KUPI 学生の世界観を楽しむということである。この学びがメンター学生の間で共有された出来事があった。R さんは、自分の好きなアイドル大野くんと結婚し、赤ちゃんが生まれるという内容の物語を書いていた。赤ちゃんにとっては、R さんがお母さん、大野くんがお父さんである。しかし、R さんは、赤ちゃんのお母さんは、R さん自身のお母さんであり、大野くんはお父さんではないと主張していた。これを聞いて、メンター学生や一般学生は、家系図を書きなんとか正しい理解を促そうとしていた。メンター学生の振り返りの時間にその出来事を共有したところ、メンター学生の「正しい知識」を伝えるのではなく、R さんの世界観を理解しようとする姿勢を持とうという結論が出た。次の授業で早速 R さんの世界観を深掘りすると、その赤ちゃんは R さんの亡くなったおばあさんの生まれ変わりであり、結婚に関係なくお腹にやってくるものだということが分かった。R さんの持つ世界観の面白さに気付いた一般学生は、彼女の世界観が映し出された物語づくりに取り組もうと試みるようになった。また、創作活動が完成に近づく中で、「KUPI 学生が満足いく発表をつくってください」という津田先生のことばが印象に残っている。メンター学生は、無意識に「正しい知識を伝えなくてはならない」「ちゃんとした発表に仕上げなくてはならない」といった価値観を身に付けていた。しかし、KUPI 学生と学ぶ中で学びほぐしが行われ、教育とは何かという大きなテーマにもつながる気付きが得られたのではないかと思う。メンター学生・一般学生と KUPI 学生の間にあるズレから、自分自身が内面化している価値観に気付き、新しい価値の面白さを楽しむことができた。

二つ目は、「できる・できない」を超えた学びの場であるということだ。この授業では、KUPI 学生とメンター学生や一般学生が協力し、ひとつの表現をつくりあげた。KUPI 学生の思いや世界観を、劇や物語、紙芝居、ダンスなどさまざまな方法で表現する。自分一人ではできないことに挑戦する機会にあふれており、「できない」が「できる」になる場なのである。これは、メンター学生や一般学生にとっても同じである。世界観が豊かな KUPI 学生に刺激され、表現の過程に自身の案も加えながら活動し、最後の発表会では、授業の前半では想像もできなかった多様な表現が行われた。（文責：荒木）

■KUPI で互いに学びあうことの意義

KUPI を通して、KUPI 学生のみならず、メンター学生、一般学生にとって、互いに学びあうことの意義が見出された。この意義について2点紹介したい。

1 点目は KUPI 学生同士のつながりによる信頼関係の構築がなされたことである。属性や年齢も異なる KUPI 学生がお互いを理解し合い、助け合うという場面が KUPI では多々見られた。KUPI 学生の中でも、受講するのが4年目の卒業間近である KUPI 学生がいる一方で、

初参加の KUPI 学生もいた。初参加の KUPI 学生は、KUPI に参加することに、希望を抱く一方で、不安や緊張などの気持ちを抱いていた。私はメンター学生として、KUPI 学生自身が積極的に活動に携わり、他の KUPI 学生と交流することができるように、個々の特性やニーズに応じた支援を行った。特に、初年度の KUPI 学生はグループワークや発表会などの交流場面において、不安や緊張を示していたため、共感的理解を示し、緊張を和らげることができた。また、発表やグループワークを通して、KUPI 学生同士が共通の趣味や話題などを話し合い、共有する中で、お互いに顔の見える関係を構築することができるようになったと感じている。更に、他の KUPI 学生に自分のことを知ってもらい、自己開示を行うことができていた。活動を重ねる中で、KUPI 学生同士が発表や創作活動に向けた活動を推し進めていく中で、メンター学生が不在の場合でも、KUPI 上級生が後輩の KUPI 学生に助言や手助けをする場面が見られた。

2 点目は、KUPI 学生自身のストレングスを生かすことができたことである。メンター学生としての経験を通して、KUPI 学生自身も、各々自身のストレングスを有しており、様々な課題や問題に自分なりに対処しているということに大いに気づかされる契機となった。具体的な支援方法としてスモールステップ法を用いたことは効果的であったと感じている。小さな目標を設定し、達成を称賛することは彼らの自己肯定感の向上に寄与したと考えている。また、視覚的支援や具体物を活用して理解を助け、彼らの負担を軽減することも必要であった。更に、協力的な環境を整え、得意な活動を通じて自己表現の機会を設けることが今回の KUPI での成功につながったと考えている。(文責：飯田)

■対話で変化、向上する創作表現

本年度の授業テーマは一貫して「いのちをつなぐ」というものであった。

前半では KUPI 学生自身が家庭や学校などの場でどのように大切にされ、どのような場面で愛の受け取り手としての自身を感じられたかという点に焦点を当てた発表作り活動がなされた。一般学生、メンター学生は発表作りに関わる中で KUPI 学生の語る経験や人間関係を知り、いち授業活動以上の深い親しさを感じられた様子も見られた。一方で、KUPI 学生の語りが発表の主たる材料になるという面から、特に一般学生の中には話を聞き出さなければならないという感覚が生まれたようにも思う。

後半では、KUPI 学生が未来の世代に残せるもの、つなぎたいと思うものをテーマとした発表に向けた創作活動が行われた。前半で自身が受け取ったものを将来的に渡す側に回るといふ、今現在では仮定の内容であるからこそ、自由な創作方法で表現することとの相性のよさが感じられた。KUPI 学生は主に、①どのような内容を表現したいか②どのような創作方法で表現したいかのどちらかから着想をはじめ、ペアの一般学生やメンター学生との話し合いを重ねてもう片方の側面について考えを深める様子が多く見られた。

全体的に KUPI 学生の意欲は高く、はじめの着想から更に発想を広げたり、ペアからの意見に対して明確に賛成、反対を示したりと、主体となって活動に参加できていた。しかし

周囲には、回ごとに豊かになる表現が「いのちをつなぐ」というテーマに沿っているものであるかという葛藤も生まれていた。授業の構成として、前半では愛や命の受け取り手であった立場を、後半では渡し手に変換させるというプロセスがあった。しかし、エピソードの抽象化と、そこから発展した創造はかなり難易度の高いテーマであったように思う。

結果として、大まかには KUPI 学生は自身の経験や興味、好きなものについての表現を意欲的に発信し、一般学生はその中に含まれる「いのちをつなぐ」に繋がる点を指摘して表現を変化させていくという役割が生まれた。発表会では、どれも個性的で発表者らしさが前面に現れながら、それぞれの形でテーマに関わる内容が含まれた発表になっていた。

一般学生、メンター学生の多くは、他の授業では、授業の目的や構成からテーマを読み取り、そこから派生して自身の考えを含む発表を作ることが多い。しかし、KUPI での活動では、はじめに KUPI 学生の中に興味や意欲があり、語ってもらった内容をテーマに近づけたり関連性を見出したりする様子が見られた。そして、「いのちをつなぐ」という抽象的なテーマを念頭においた一般学生の存在によって、KUPI 学生側も未来の姿や将来の夢に繋がる像を創作の形で見出すことができたのではないだろうか。

向かい合った対話の中に具体と抽象の混交空間を生み出しながら、誰も完成形の想像がつかないまま手探りで創作していくペア活動は、参加者全員にとって新鮮な学びをもたらすものであったと言える。（文責：高橋）

3) 「話し合う！やってみる！」

【活動の概要】

メンター学生が中心となり、KUPI 学生とメンター学生にとっての大学の学びとは何かという問いに向き合い、考え、活動内容を作っていく。対話を重ねることで起きる変化や発見を楽しみ、それらが活動に活かされることも期待したい。そして何より、やってみないとわからない面白さを楽しみたい。20 時からのメンター学生のふり返りは、ふり返りと次の活動内容を決めるため、大変忙しい中、担ってくれた。

【活動日について】

オムニバス授業を担当する教員の予定を考慮し、木曜日に授業が 3 回行われた。活動日は不規則になったが、より多くの授業を受けることができたことは良かった。メンター学生は固定のため、月・木のメンター学生はいつもと違う内容をサポートすることになったが柔軟に対応をした。木曜日に実施した授業のふり返りに対話形式を採用するなど、初めての試みもあり新鮮だった。

- ・ 12/26 は放送大学が制作する番組の撮影が入った (12/23、24、26)
- ・ 1/30 は文部科学省の方が見学に来られた。

活動日	主な内容
10/3	コミュニティボールを作りながら自己紹介をしよう 好きなこと、得意なこと、将来の夢について話そう
10/10	構内散策をして感想を話そう
10/31	神戸大学のスターボックスに行き、対話をしよう
11/7	・ 図書館を利用しよう、又は 10/31 のふり返りをしよう ・ L さん、井上さんがシンポジウムで発表したことを教えてもらおう
11/11	・ 体育館で何をするか話し合おう ・ 対話「人はなぜ、やせたいと思うのか？」
11/21	階段アート① 階段を見ながら描きたい（書きたい）ものをイメージしよう
12/2	体育館で活動をしよう
12/5	・ 11/28（休講日）は何をしていた？（対話） ・ 階段アート② テーマを決めよう→テーマは「愛」に決定
12/12	階段アート③ 谷川俊太郎「あい」を読んで対話をしよう 模造紙をみんなで囲んでテーマを思いつくかべながら描いてみよう
12/19	階段アート④ シンボルを考えて模造紙に描いてみよう
12/26	階段アート⑤ シールに描く① シンボルから描こう
1/9	カーライルピープルファーストとの交流準備
1/16	階段アート⑥ シールに描く②「愛ってなに？」を紙に書いてから描く
1/23	カーライルピープルファーストとオンライン交流
1/30	階段アート⑦ シールに描く③「KUPI」を写真でコラージュ
2/6	階段アート⑧ シールを仕上げて階段に貼る 完成！

24.10.03 コミュニティボールを作りながら自己紹介をしよう

毎年、週の最後の曜日は「話し合う！やってみる！」というコンセプトで、KUPI 生自身が学びを形づくり、取り組んでみる、という内容になっている。他の曜日のように大学の知を先生から教わるような授業とはまた異なりつつ、それら学びとの連続性もある。

KUPI が終わった後もつづく、それぞれの人生における生涯学習の礎となるような取り組みとして、KUPI 学生がメンター学生も交えつつ、互いに話し合い、聴き合うことで、自分達のやってみたいことや、抱えているニーズを探り、それらを実際に学びや活動へとつなげてゆく。



この日は、その初回。例年、話し合いの際には「p4c」というハワイからひろがった哲学対話の方法で話し合っている。コミュニケーションが言語情報だけに偏りにくく、今年度も「p4c」に取り組むこととした。

「p4c」ではまず、教室にいるみんなで輪になって座る。そして、対話で使うためのコミュニティボールと呼ばれるボールを作る。一周、ひとりずつ筒に毛糸を巻きながら、自分が呼んでほしい名前と、

将来の夢を話した。みんなで巻いた毛糸を結束バンドでまとめ、はさみで切れ込みを入れると、コミュニティボールが完成する。

そこからは対話の時間。ボールを持っている人が話せて、そのほかの人は聴く。話を聴き終えたら質問してよい。ボールを持って話し終えた人は、だれでも次に話を聴きたい人にボールを回す。ボールをもらった人は、そのまま話をしてもいいし、まだ話す準備ができていなかったり、話したくなかったら、話さずにまた誰かにボールをパスしていい。そういったルールで「p4c」は進む。

毎回、さまざまなやり方で対話の問いやテーマを決める。初回は、メンターから「好きなこと と とくいなこと はちがう？」という問いを提示してみることにした。この問いをみんなで考えながら話すことによって、互いの自己紹介にもなりつつ、それぞれの「好き」や「とくい」が語られれば、その後の学びへのとっかかりになるのではないか、というねらいだった。

このねらいは、おおむねうまくはたらい
た。それぞれの「すきなもの」「とくいな
もの」が語られたり、語られなかったり、
あるいは「きれいなもの」「にがてなも
の」も語られたりした。たとえば、ある
KUPI 学生は、自動販売機が好きであるこ
とを語りつつ、それは「ものの値段の違い」
が好きだからであり、メーカーや機械ごと
に飲み物の値段が多様な自動販売機が好き
だと語った。また、同様の理由で路線ごと
に運賃の異なる電車やバスも好きである、と付け加えた。



さらに、「すきなこと」と「とくいなこと」の重なりや違いについて、「すきだからと
くいになる」とか「とくいだからすきになる」、あるいは「すきなことととくいなことは、
ぜんぜんちがう」など、さまざまな考えが探求的にしっかりと語られた。総じて、今年の
KUPI 学生には、話すことのとくいな人が多い、という実感を得た。このことをめぐって、
メンターにおいては、学びの成果が感じられやすい一方で、言語的なコミュニケーション
に偏ってしまうことへの懸念が共有された。

24. 10. 10 構内散策をして感想を話そう



この日は鶴甲第2キャンパスを3グループ
に分かれて散策した。はじめに6~7人のグ
ループを3つ作り、各グループで行先や巡る
順番などを確認した。校内散策はC棟、アゴ
ラ、体育館の3か所を写真を撮りながら巡る
という形式で行われた。

C棟は音楽に関する設備が充実しており、
ピアノが何台も置いてあった。ピアノの鍵盤
を押して音を出してみたり、天板を開けて中
を覗いてみたり等、皆が思い思いにピアノと

触れ合っていた。「もっと練習していつか皆にピアノを聞かせたい」「〇〇っていう曲を
弾けるようになりたい」とピアノの練習に意欲をみせるKUPI学生が複数人いたのが印象的
だった。

A棟6階にあるアゴラでは中に入ることはできなかったが、窓から中の様子を見てみた
り貼ってあるチラシを読んでみたりしてアゴラの雰囲気味わった。アゴラで働いている
Pさんをはじめ、アゴラを利用したことのある人達から料理や営業時間などの情報を教え
てもらった。また6階から見える町や海、空の景色がとても綺麗でKUPI学生はたくさん写

真を撮っていた。

体育館は外から様子をみる形で訪れた。中では体操部が器械体操の練習を行っており、マット運動や体育の話で盛り上がった。スタート時は明るかった空が徐々に暗くなっている、校内の様子や景色が変わっていく様子を KUPI 学生皆が楽しんでいたように思う。

校内散策を通して印象的だったのは、
‘先輩’の KUPI 学生が率先して案内をしてくれたことである。1 年目の KUPI 学生ははじめての校内散策であったが、複数のメンター学生にとってもこの 3 か所は普段全く行くことのない場所であり、行き方すら分からないこともあった。そのためメンター学生が案内をするのではなく、みんなで協力して行先を探したり教えあったりする雰囲気が自然と生まれていた。校内散策のあとは、木曜日の KUPI



でやりたいことを対話で話し合った。「サッカーや野球などのスポーツをやりたい」「ピアノを弾きたい」「植物を育てたい」「大学の外で活動をしたい」とたくさんの意見が出された。自分の好きなことと絡めて意見を発表する KUPI 学生が多く、とても生き生きとした表情で話をしていたのが印象的だった。

24. 10. 31 神戸大学のスタバへ行こう、神大生を誘って対話をしよう

KUPI 学生が大学の空間に身体を表すことが、まずもって学びの始まりではないか、というねらいに加えて、新しく大学にオープンしたスターバックスに行ってみたい！という KUPI 学生とメンター学生の強い合意から、KUPI が開かれている鶴甲第 2 キャンパスを飛び出て、六甲台第 2 キャンパスでの一日となった。

ハロウィンということで、何人かの KUPI 学生は思い思いの衣装に身を包みつ



つ、グループに分かれてスターバックスの飲み物を注文した。普段は出会いにくい他学部の学生と入り混じりながら、美しい夜景を眺めた。肌寒い大学の夜に、みんなで温かい飲み物を飲む、という時間は、KUPI 学生にとって、またメンター学生にとって、あるいはその場に居合わせた大学生にとって、どのような意味を持っただろうか。ただ、それぞれの

先の人生において、同じ一瞬が、かけがえのないひとときとして思い返されるかもしれない。そんな気がして、ならない。



その後、百年記念館の広場で哲学対話を行った。せっかく出かけてきたので、勇気を出して、近くの大学生にも参加を呼び掛けてみたものの、帰り道の学生ばかりで、なかなか立ち止まってはくれなかった。しかし、KUPI 学生が前もって準備した KUPI を紹介するチラシを配ることはできた。

今後に対話を行っていくにあたって、メンター学生としては、KUPI 学生のみんなから問いやテーマを立ててもらいたい、という願いがあった。しかし、そのことを、ある KUPI 学生に話していたところ、そもそも「問いてどういうこと？」という質問を受けた。そう言われてみれば、問いてなんなんだろう、問うってどういうことなんだろうか、と答えに窮した。仕方がないので、この質問をそのまま、テーマにしてみることにした。

「問いてなに？」という抽象的なテーマに、メンター学生も頭を悩ませた。はじめはなかなか言葉が出ず、テーマが難解すぎたか、もうすこしわかりやすいものに変更しようか、と思案した。しかし、すこしずつ、かんたんでシンプルな言葉から、探求が進みはじめた。

ある KUPI 学生が「わかりません」と言った。それに対して別の学生が「わからないことが、問いなんじゃないか」と応答した。問いについての問いという入り組んだ、複雑なテーマにもかかわらず、連鎖するように「考えること」「わからないことを考えること」「知らないことについて考えること」「考えたいこと」…と対話がふくらんだ。



一人の KUPI 学生がこう言った。「問うことって、新しい自分に出会うことだと思います。」そのとき、なんとなく、いまならみんなで今後の対話の問いを出し合えるかもしれないと思った。プログラムの時間は終わりに近づいていた。そこで、一日の締めくくりに、全員に紙とペンを配り、今後、対話で囲みたいテーマや問いをそれぞれに書いてもらった。わずかな時間だったものの、悩みつつ書かれた紙には、一人一人の「わからないこと」「考えたいこと」あるいは「新しい自分」に向けた夢が書かれていた。

24.11.07 前半：図書館を利用する、又は 10/31 のふり返りを行う 後半：井上さんと L さんが発表したことを聞こう

この日の前半は、図書館を訪問するグループと教室で対話を行うグループに分かれての活動であった。図書館を訪問した KUPI 学生は大学の図書館にとっても興味を持ち、書庫にある本の多さ、静けさにとっても驚く姿も見られた。学校の教科書や、動物の写真集、外国の社会に関連する本など、それぞれが様々な本を手に取り、何人かの学生は借りて帰っていた。メンター学生にパソコンでの検索方法や書庫の使い方などを聞く様子からは図書館を自分の学びに活かそうとする姿勢が感じられた。

教室で対話を行ったグループは、10/31 のスターバックスでの活動を振り返った。対話では感想だけでなく、KUPI を知ってもらう方法や他の大学生の誘い方などの意見も出し合い、KUPI を広めたいという KUPI 学生たちの思いを感じることができた。



後半は井上さんと L さんによる発表を聞いた。井上さんがメインで発表をしたあとに井上さんと L さんの対話を聞くという形式だった。KUPI の紹介や大学で学ぶ意味、メンター学生である井上さんの葛藤など興味深い内容ばかりであり、KUPI 学生は真剣な表情で発表を聞いていた。L さんは皆の前ではあまり話したがらなかったが、学会前後の話を少し聞くことができた。L さんの話や学会での写真から、L さんにとってこの発表がとてもいい

思い出であることを実感した。井上さんと L さんによる発表は KUPI 学生にとって「KUPI とは何か」を考察する良い契機になったのではと考える。

24.11.11 活動計画、24.12.02 体育館で活動

前半：体育館で何をするか話し合う / 後半：対話

本授業では、通常は木曜日に行われている対話の活動を 2 回に渡って行った。1 回目の授業はフルーツバスケットから始まり、場が温まったところで「2 回目の授業の時に体育館でどんなことがしたいか」について話し合った。続いて、「人はなぜ痩せたいと思うのか」「長生きしたいと思うか、長生きするのは良いことか」という 2 つのテーマに沿って

対話を行う。「コミュニティボールを持っている人が話す」というルールに則って、輪になりながら話し合いを進めた。2 回目の授業では、まず皆で輪を作って準備体操をした後、全員でケイドロをした（気分がのらない人は見学）。その後、グループに分かれてフットボールやカラオケ、ウノなど各自好きなことを行う。また、「世界に一つだけの花」を全員で手話をしながら歌うこともした。最後に、KUPI 学生が中心となって本日の活動を振り返って、授業は終了した。

<授業の様子>

・エピソード①：やりたいことがいっぱい！

体育館でしたいことについての話し合いが始まると、KUPI 学生からは「野球」「ボッチャ」「バスケ」など多様な意見が挙げられた。指名された人へ、意見が言いたいと自ら志願する人へとテンポよくコミュニティボールが回っていき、次々に自分のやりたいことを口にする。やはり場所が体育館だからか、身体を目一杯動かすスポーツが多くあげられる中で、体力に自信のない人は「絵を描いたりしたい」と発言することがあった。決して多数派ではない意見を言っても誰かが反論したり無かったことにされたりせず、むしろ皆が楽しめるようにするために前半は全員で、後半は個々に分かれて遊ぼうとまとめられた。このようにあたたかな空間だからこそ、やりたいことをたくさん思い付き発言することができるだろう。



・エピソード②：皆でできること



体育館での活動だったため基本的に身体を動かしたい人が多く、運動に不安がある人は皆でやろうと提案されたケイドロに参加しにくかった。しかし、その後に行った「世界に一つだけの花」を手話で歌う時間には、運動が好きな人もそうでない人も参加して、本当に皆で行うことができたため一体感を得られたと思う。普段の授業ではグループに分かれることも多く、全員で一つのことを一緒にする機会はあまり多くないため、楽しい思い出にもなった。

・エピソード③：振り返り

最後の振り返りの時間では、普段あまり前に立ちたがらない KUPI 学生が司会や書記をやってくれた。「今日の楽しかったこと」「次の機会にやりたいこと」を KUPI 学生が 1 人ずつ意見を述べていき、司会が仕切りながら書記がホワイトボードにメモしていった。度々話している人の言葉を上手く聞き取れなかったり口調が強かったりすることもあったが、一人一人の意見をきちんと聴きながら振り返りを進めていった。授業の振り返りを話す KUPI 学生の表情は明るく、本日の授業はとても楽しい活動になったようだ。

＜授業を振り返って＞

本授業は、2 回の活動を通して、誰一人取りこぼさないように行われたものであった。1 回目の対話の授業では、コミュニティボールを持った人が話すというルールがあることで、普段はあまり話さない人も意見を述べたり普段よりも皆が話している人に注目したりすることができていた。いろんな意見が交わされたが、誰かの意見を否定することもなく、皆がのびのびと自分の意見を言うことができていた。また 2 回目の授業では、身体を動かすことが中心の活動になりそうに思えたが、運動が不安な人は無理に参加せず絵を描いたり歌を歌ったりすることができた。さらに、運動が不安な人がただ個別で活動するだけではなく、手話を通して全員で活動することもできていた。個人の意思や自由を尊重しつつ、皆でできることは皆でする、ということが出来る KUPI の授業は、KUPI 学生にとってかけがえのない居場所となっているのではないだろうか。また、メンター学生や指導教員にとっても、多様な人が共存するために重要なことを学ぶことができるだろう。

24.11.21 階段アート① 階段を見て、どんな絵を描きたい？

今日は、「階段アート」の 1 回目の活動を行った。まず最初に、階段アートとは何かということについて六甲祭や日本の各地の階段アートの写真を見てイメージを掴んだ。様々な模様に見えるアートや、全部の団を合わせると大きな一つの絵に見えるものなど、階段アートの表現の仕方にも様々な方法があるんだ、とわいわいした空気でも KUPI 学生の活動に対する意欲が高まっていった。その上で 2 年前に KUPI で作った階段アートについても紹介し、当時の記憶を懐かしむ KUPI 学生がいた。



前半は実際に鶴甲第 2 キャンパス B 棟の階段を見に行き、「どんな階段アートにしたいか」を模造紙に自由なイメージで書き出した。机に置いた付箋に思いを書いて貼るのもよし、模造紙に直接書き込むのもよし、とそれぞれが思い思いに自分のかきたいものを表現していた。1 本の線からつなげていき何かの形にする、といったような活動もみられ、楽しく活動することができた。

後半は p4c の形式で「どんな階段アートにしたいか」について話し合った。その際、「書記をしたい」と自ら手を挙げた学生もあり、自主的な活動が行われた。話し合いの中で、「去年とは一新したデザインにしたい」「カラフルにしたい」「KUPI 学生が作ったと



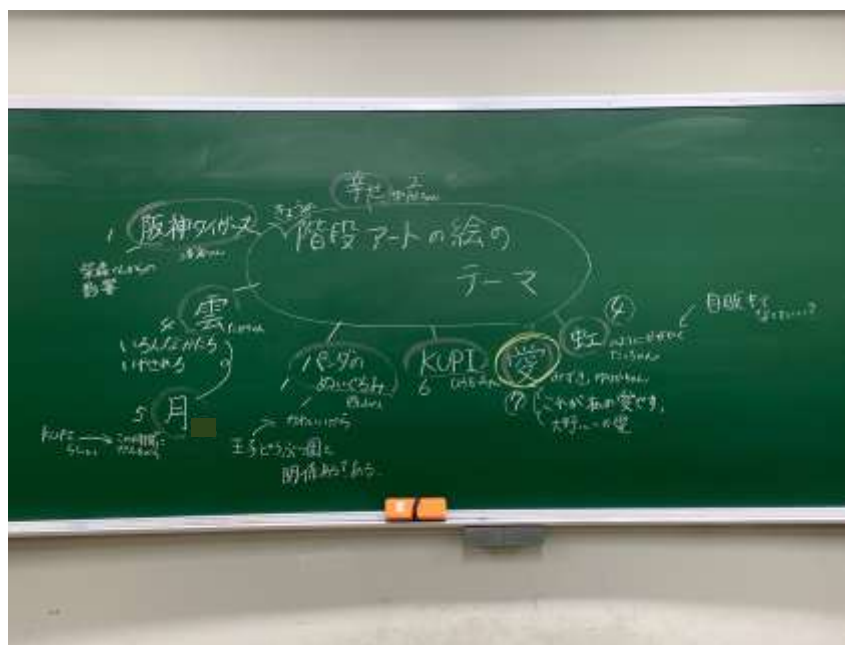
いうことが分かるようにしたい」など多様な意見が出た。KUPI 学生として 4 年目の M さん、S さんからは今年度から新しく入った 3 人の学生中心に活動を進めても良いのではないか、という意見が出た。また、今年度の特徴的だったこととして、階段アート以外にもアンケートやチラシを用いた宣伝等様々なアイデアが出たことだ。3 年目、4 年目になる KUPI 学生も多く、KUPI をもっと多くの人に知ってもらうためにどうするか、ということ

を深く考えていたのが今年らしかった。

実際に階段を見たり、p4c でたくさんの人の考えを聞く・自分の思いを言葉にするとという活動をしたりしたことで、今後の活動に対しての思いが膨らむ良い機会になった。

24. 12. 05 前半：11/28（休講）の日は何してた？ / 後半：階段アート②

一週休講を挟んでから
の木曜日。二ヶ月も毎週、共に学んでいると、二週間空いただけでも久しぶりという感覚が生じてくる。ひとまず対話の感覚を取り戻そうと、輪になってみる。久しさが、KUPI 学生の間に緊張感として表れているような印象を受けたため、せっかくなので、先週の木曜日に何をしていたか、という話題でボールを一周回してみた。普段はあ



まり語られることのない、日常の暮らしについての話がふくらんだ。生活の語りから、学びのニーズが見えてくることも多い。

その後、再び前回に引き続き、階段アートについて取り組んだ。今年度の KUPI では、こ

れまでの活動の印象として、言語によるコミュニケーションや学びが豊かであるように見受けられた。前回、階段アートについてのイメージを膨らませた際も、絵によるイメージより、言葉によるイメージがたくさん挙げられていた。そこで、階段アートに取り組んでゆくにあたって、言語による表出をほぐしつつ、絵による表現の練習に取り組んでみることにした。



とはいえ、まったくきっかけもなく、個々人で好きな絵を描くよりも、これまで重ねてきた対話のように、何かひとつ決まった共通のテーマがある方が、みんなで絵を描きやすいのではないかと考え、絵のテーマを考えてみることにした。対話のテーマと同様のやり方で、描きたいテーマを出し合い、投票を行った結果、「愛」が選ばれた。

4年間 KUPI に参加している KUPI 学生からの助言もあり、地面に座ったり寝転がったりしながら自由な姿勢で描ける教室に移動し、三つのグループに分かれて「愛」をテーマに模造紙に絵を描いた。今後、「愛」をテーマに対話をしてから、また絵をかくことで、学びが膨らんでゆくのではないかと、という見立てがメンター学生の間で共有された。

24.12.12 階段アート③

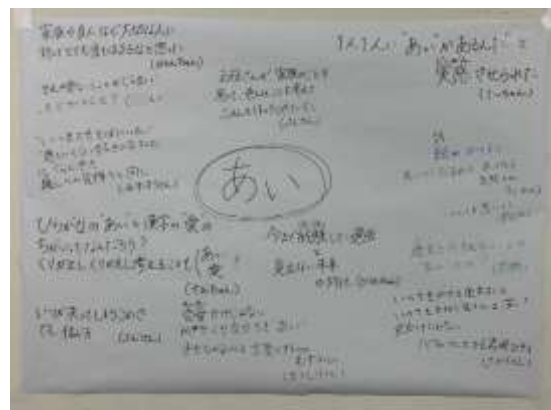
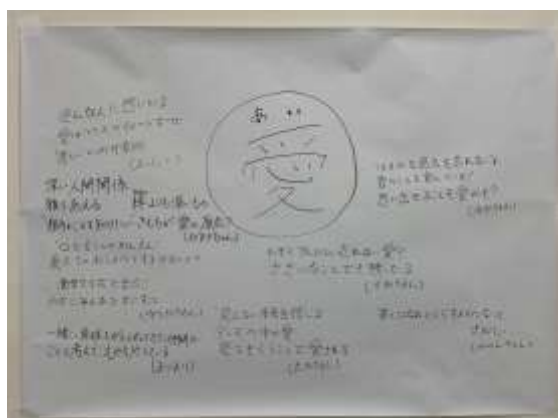
「愛」についての詩をよんでみよう・「愛」についての絵を描いてみよう

先週に引き続き、紙を囲んで自由な姿勢で描くことのできる教室を借りて、活動を行った。活動の前半は、「愛」に関する詩を読んで、「愛とはなにか」の哲学対話をした。とりあげた詩は、谷川俊太郎さんの「あい」という詩である。「あい」と「愛」が交互に行頭におかれ、特定の対象への「愛」を表現したものではなく、読み手がそれぞれの「愛」を想起できるような詩であった。

詩をみんなで朗読したあとは、「詩をよんだ感想」と「みんなが感じる『愛』」について対話した。家族に感じる愛、推し(趣味)への愛、友達への愛といった自分にとって身近な愛についての意見がでるなかで、詩とひきつけて「好き」という感情とは異なる、愛ゆえの「悲しさ」「寂しさ」のエピソードを語る KUPI 学生やメンター学生もいた。それぞれが話すエ



ピソードははじめて聞くような家族の話であり、お互いのことについて新たな発見もあった。また、対話のなかで「わからない」と言葉にする KUPI 学生もいた。その方は、再受講生であり受講を重ねるごとに発言量が増え、今年は特に哲学対話においても積極的に発言している様子が見られる KUPI 学生であった。久しぶりに聞いた彼の「わからない」という言葉からは、彼のなかで考えたうえでうまれた言葉であることが感じられた。



そして、後半は再び模造紙に絵を描いた。準備した模造紙が足りなかったため、急遽みんなで紙を囲んで描くかたちになった。3人程、個人での活動を希望する KUPI 学生もいたため、前回と同じように個人で1枚の模造紙を使って描けるかたちも大事にし

た。描いた絵をみると、前回よりも大きな絵を描いていたたり、ハートだけでなく、クラッカーや風船といった一見、愛とはつながりがみえないような抽象的な絵を描いていたりと、前回との違いがみられた。また、火曜日の「いのち」をテーマにした授業とつなげて、描く様子も見られた。



24.12.19 階段アート④

シンボルをきめて、絵を描いてみよう

いつものように簡単な哲学対話をしてから活動をはじめた。このときの対話のテーマは、「いま一番ほしいもの」であった。今回の階段アートの活動では、人間発達環境学研究所表現系の先生である岸本吉弘先生のアドバイスを参考に、階段アートのなかに大きなシン

ボルを一つ決めて描くことで統一感のあるデザインにすることを提案した。4つの小グループに分かれ、これまで自分たちが描いた絵を見て回り、グループごとにシンボルを一つ決めた。シンボルは、「風船」「K」（2グループ）、「クラッカー」の3種類であった。大きくシンボルを描いた後は、周りに「愛」をテーマに絵を描いた。同じ「愛」というテーマでの表現であったが、前回は描かなかった絵を描く KUPI 学生や、KUPI 学生同士で絵が伝染するように同じ絵を描くような姿も見られ、グループ内でお互いの存在を意識しているような様子が見られた。



活動の最後には、各グループが描いた絵を真ん中に置いた状態で円になって、「階段アートのシンボルをなににしたいか」ということを対話した。様々な意見がでたため、活動内で次のシンボルのかたちを決めることはできなかった。

メンター学生とコーディネーターの振り返りでは、シンボルや次の進め方について話し合ったが、なかなか結論を出すことはできなかった。シンボルは二つのグループで提案されていた「K(神戸大学・KUPIのK)」の方向で議論が進んだが、それをどのように階段シールに描いていくかについては迷いを残したまま、次回をむかえることになった。



24.12.26 階段アート⑤シールに描く①

階段シールにシンボルを描く、絵を描く

前半は、シンボルを「神戸大学」と「KUPI」にも関わる「K」にすることを提案し、“kind of”というフレーズにひきつけながら、「K」から連想するものについて哲学対話



をした。そのあと、「どんな愛があるのか」という問いについて対話を重ねた。「K」から連想するものについては、「か行」からはじまる言葉や、自分の名前のなかに「K」が入っていることを見つけて、「K」を自分にひきつけて考えている方もいた。このときの哲学対話の板書は以下の写真で示す。

後半は、いよいよ原寸大の階段シールを囲み、絵を描いた。直前のメンター学生とコーディネーター間の打ち合わせでは、「あえて描く担当等は決めず、その場の雰囲気ゆだねて描くこと」と「優先的にシンボルのKを描いていくこと」のみを共有してとりかかった。そのため、はじめはなかなか描きはじめられず、メンター学生も自分の言葉が指示になることをためらう思いもあり、沈黙が続いた。非常にきまづい雰囲気であった。しかし徐々に KUPI 学生から、まずは階段シールの中心を決めることや、シンボルを描く人を誰にするかについての意見や声が生まれていった。



シンボルの「K」の下書きを描く人は、1年目の KUPI 学生となったが、その KUPI 学生が描いているときも周りの KUPI 学生が「そこから(描いたらいいよ!)」「ストップ!」と遠隔操作をしているかのように関わる場面が見られ、思いもしなかった協働のかたちが生まれていた。また、「K」の下に隙間ができたため、みんなの輪からは外れた席で座っていた KUPI 学生の提案のもと、「UPI」も書くことになった。そのときも P のなかの空白を丸にするのかハートにするのかといったデザインの面で、KUPI 学生同士で意見が交わされていた。



シンボルを描いたあと、絵具をつかって描いた。前回までの模造紙に描いたときのように思いついた絵を描いていく人、ダジャレを書く人、同じところに色を塗り重ねる人、と様々な描き方が見られた。



最後のメンター学生とコーディネーターのふりかえりでは、KUPI 学生の積極的な動きや KUPI 学生同士の関わりについてが、話題の中心となった。このような KUPI 学生の姿から、今までやってきた活動への確かな手ごたえと、これからの活動の可能性を実感した。また、きまづい雰囲気の中かに一度浸ることで、それを乗り越えた先にいろんな方面からの声が生まれる可能性に気づくことができた。

25.01.09 イギリスとのオンライン交流の準備をする

2024 年度の木曜 KUPI では、1 月 23 日にイギリスの「カーライルピープルファースト」さんとのオンライン交流会を行った。「カーライルピープルファースト」とは、知的障がいを持つ人が「自分たちで発言をする」「自分たちのことは自分たちで決めたい」という気持ちがあることを知り、彼らにわかりやすく情報を伝えたり、イギリスに住んでいる知的障がいのある人たちを繋いでいる団体である。津田先生がカーライルピープルファーストのメンバーと親交があり、2020 年度の KUPI の授業でオンライン交流を実施した。今回は 2024 年 5 月に KUPI 学生の有志で交流を行った続きとして、プログラム内で交流をする運びとなった。

今回の交流で KUPI 学生は、お気に入りの写真 1 枚を選び、それをイギリスの方々に紹介するという活動を行った。9 日に発表準備を行い、23 日に発表本番を行うという、2 活動日を使った活動となった。この活動においては、KUPI 卒業生の参加希望者も受け入れて実施した。

9 日の活動では、KUPI 学生は班に分かれて、メンター学生と協力しながら発表の準備を行った。KUPI 学生は、年末年始休みの間に用意してきた写真を見ながら、発表原稿を考え、さらにその原稿を英語に翻訳するという活動に取り組んだ。KUPI 学生は自分の力でどん



んと発表を完成させていった。例えば、小学生から高校時代にかけて英語を習っていたという N 君は、英語の表現を自分で完成させていた。また、Google 翻訳を使って自分の言いたいことを英訳したり、音声読み上げ機能を用いて英文の読み方を聞き、それを真似ながら発表練習をしたりするなど、テクノロジーを駆使する KUPI 学生の姿が見られた。さらに、今回の発表準備では、メンター学生の発案で図書館で借りた辞書を用意しており、それを用いて発表原稿を書く KUPI 学生も見られた。パワーポイント資料についても、作り慣れている KUPI 学生もあり、KUPI 学生が自分の力を発揮する機会となった。

さらに、KUPI 生にとってこの機会は、日本語とは異なる言語との出会いともなった。J さんは、自分が思っている以上にアルファベットやローマ字を自分で書くことができると、この活動を通して気が付き、嬉しそうにしていた。また、日本語と英語で語順が異なることに納得のいかない様子や、魚の鯛が「めでたい」とかかっているから縁起が良いということ、英語でどのように説明しようか悩む KUPI 学生の姿が見られた。

なかには、英語ではなく日本語で発表したいという KUPI 学生もいた。メンター学生とコーディネイターで行われるふりかえりの際にこれについて話し合い、本人が自分の言葉で発表することを優先し、希望者は日本語で発表することを決めた。その際、発表時に投影するパワーポイント資料にはメンター学生が作成した英訳を記載することで、イギリスの方々にも内容が伝わるようにした。

25.01.16 階段アート⑥ シールに描く②



この日の前半は、階段アートの横に貼る「愛ってなに？」というワークシートを作成する活動を行った。これまでの活動を踏まえ、学生一人ひとりが「愛」に対する自分なりのイメージや考えをはっきりと持っていた。これらの活動が結びついたこともあるのだろうか、このように抽象度の高い問いに対してもすぐに考えを書くことができていた KUPI 学生が多く見られた。

後半は描く活動の 2 回目に取り組んだ。「かわいくポップなイメージにしたい」と話していた N さんがシールを持参してくれた。描く、ということはすこししんどいと感じる学

生にとっても参加しやすい技法として、シールが活用されていたところがとても良かったように思う。複数の色を混ぜ合わせてその時にしか作れないような色を創り出したり、他の人が描いた絵に少しアレンジを加えるなどして前回の活動よりものびのびとしたカラフルなものに仕上がった。描く以外にも、写真が好きな S くんは活動の様子をカメラに記録する、M さんはみんなの様子を動画で撮影するなど、それぞれの参加の仕方を取っていた。

今回も、「KUPI」の周りの装飾をメインにして活動を進めたが、後半には文字の中のデザインをどうするか、といったことも話しながら取り組んだ。「グラデーションにしたい」など、前回のモチーフである「虹色」やたくさんの色を用いることによるきらびやかさを意識したような意見も見られた。

次回はイギリスとの交流会ということもあり、自分の思いを話すことや現地の方との交流を心待ちにしている KUPI 学生が多く、終始楽しく活動が進められていた。

25. 01. 23 カーライルピープルファーストさんとの交流

イギリスとのオンライン交流会・本番



この日は、カーライルピープルファーストさんとオンラインで繋ぎ、9日に準備した発表を実際に行った（交流会の概要については、9日の欄参照）。

前半は発表準備の最終確認を行った。KUPI 学生は緊張している様子で、KUPI 学生同士で励まし合ったりする姿も見られた。

交流会本番では、交流先のカーライルピープルファーストの方々が、1人1人の発表に対してコ

メントや質問をくださった。メンター学生がその質問を日本語訳すると、KUPI 学生はその質問にどう答えようか真剣に考えていた。ピープルファーストの方々は、KUPI 学生の発言を待ちながら根気強く話を聞いてくださった。「待つ」ことで本人が活動に入りやすくすることを意識している KUPI との共通項が見え、オンラインという場でありながらも、心地の良い交流となった。

KUPI 学生全員の発表が終わったあとは、ピープルファーストの方々によって、家族や地域についての紹介が行われた。写真もたくさん使用していただき、KUPI 学生はそれについて感想を言い合ったり、質問を投げかけたりする様子が見られた。

イギリスとの交流会は、英語を使った発表や海外との交流といった、大学のリソースを



使った、大学ならではの活動であったと考えられる。コーディネーターとメンター学生で行われた振り返りでは、KUPI 学生が予想以上の力を発揮していたことに対し、今回はメンター学生が行った役割を、KUPI 学生に任せても良かったのではないかという意見も出た。コーディネーター交流するなかで、自分の能力に気が付いたり、力を発揮できる機会を得たりすることができるという体験を KUPI 学生にもたらし活動であったように思う。

25.01.30 階段アート⑦シールに描く③

階段アート作りも佳境に差し掛かり、各々が自分の描きたい絵、参加したい形を早くに見つけて自ら楽しんで参加する様子があちこちで見られた。

シンボルである「K」の文字をどのように目立たせるかについて、コーディネーター、メンター学生側から「KUPI での活動を撮った写真を何枚もコラージュして貼る」ということを提案し、授業時間内での意見交換や対話を行ったわけではないものの、好意的に受け止められたようだった。

教室前方ではこれまでの階段アートの続きで隙間になっている部分を絵の具やマーカーで描き足していく班、後方ではコラージュに使う写真を切り取る班に自然に分かれていた。特に指名や指示があったわけでもなく、ちょうど半分ずつくらいの人数に分かれて、それぞれの作業空間が程よく保たれる密度になっていたのが印象的であった。

コラージュ班は写真をどんどん切り取っていき、黙々と仕事をする人もいれば、お喋りを交えながら作業をする人もいる、あたたかみと集中しやすさが同時に存在する雰囲気が出来ていた。

切った写真を受け取って「K」に貼りに行く役目を任された KUPI 学生は真剣な面持ちで貼り付けていった。写真どうしが重なったり顔が隠れたりしないような配慮が感じられる丁寧な作業だった。

絵を描いている人は面積の大半が埋まっていたことから、新しく自分らしい絵を描く以外に、既にある他の人の絵を活かそうという意欲が見られた。隙間を背景として単色で塗りつぶしたり、キラキラのシールを上から貼ることで飾りつけるなど、元からある絵を邪魔しない工夫をしながら色を塗り広げていった。

次週に仕上げを残すのみとなり、見学に来ていただいた方々に褒められたことや完成形が見えてきたことで、作品を作り上げているという誇らしさが全体に生まれているように感じた。

25.02.06 階段アート⑧ポスカとコラージュで仕上げる④&貼る

この日は、階段アートの最終仕上げをしたのち、B 棟 1 階の階段に完成した作品を貼る作業を行った。仕上げでは、ポスカを使って白い部分や絵と絵の隙間を埋めたり、「KUPI」の文字に貼る写真を追加したり等の作業を全員が熱中して取り組んでいた。

また、仕上げの間に7名程でB棟の階段を掃除した。ほうきや雑巾で階段を綺麗にしたり、2年前の階段アートの際に貼られた写真や「KUPI ってなに？」のシートを取り外したりした。仕上げが完了したあとは、作品を階段前まで持っていき、シールを切る作業に移った。シールが1段ずつに切られていくと、切る作業を続けるグループ、シールを階段に貼るグループ、「愛ってなに？」のプリントを階段



横に貼るグループといったように自然と役割分担が進んだ。自分が得意な作業、やってみたと思った作業を選び率先して行う姿が散見され、KUPIらしさの溢れる空間になっていたように思う。また細かい作業が多かったためメンター学生主導になることが予想されたが、実際はアドバイスをし合ったり、シールをまっすぐ貼るという難しい作業を共同で進めたり等、木曜 KUPI 全体の絆を感じることができた。

シールを全て貼り終え完成した階段アートを見た一同は大きな歓声をあげ、心から完成を喜んでいた。階段に貼って遠くから眺めて見た作品は、とても色鮮やかで迫力がさらに増していた。皆が「いい写真スポットになる」「映える!」と、写真をたくさん撮りながら言っていたのが印象的だ。多くの時間をかけて絵を描きあげ、かつ寒い中での難しい作業を経て完成したという体験が、階段アートをより美しくより尊いものにしてくれたように私は感じた。この階段アートは KUPI の存在を知ってもらう絶好の機会に間違いなくなるだろう。



図書館に行きませんか？

一本と出会う、他者と出会う、自分に気づくー

文責：倉石 悠平(ボランティア)、竿 美羽(木曜メンター学生)

<はじまったきっかけ>

木曜日の活動(11/7)で人間科学図書館に行った。「『いのち』に関する本を見たい」と他曜日の KUPI で学んでいることに関する本を探す人、興味のある分野の書棚に行く人、勉強道具を持参する人、各々がそれぞれのしたいように図書館を利用していた。そんななか、再受講生から「こんな機会がないと本を借りれない」という声を聴いた。また、メンター学生からも「いろんな発見があって面白い。また行きたい。」という声があった。それでは定期的に図書館に行くような機会をつくってみよう。みんなで図書館を行脚しよう。そんなはじまりだった。

<開催頻度・概要>

時間帯は KUPI がはじまる前(16 時～16 時 40 分)で、11 月から 2 月にかけて約 9 回開催した。毎回 0～3 人の KUPI 学生が参加していた。参加者はいたりいなかったり、ゆるやかに続けた。

活動の概要は、図書館に行って見たい本を見たい場所で読む。誰かと話しながら読みたい人のために、図書館内の「グループ学習室」という部屋を借りることもあった。静かに一人で読みたい人が多く、その部屋を使うことはなかった。

右の写真は、全体に配布した本活動のお知らせチラシである。



<実際の様子>

一本と出会うー

教育学の本に興味がある KUPI 学生。背表紙を眺めながら気になった本を手にとっていった。その中で借りた本は、牧野篤『中国変動社会の教育：流動化する個人と市場主義への対応』(勁草書房、2006 年)という、いかにも難しそうな本だった。借りた理由を尋ねると、「中国」という単語が気になったもよう。パラパラとページをめくり、時折気になるページをじっくりと眺めていた。「おもしろい?」と尋ねると「うん」と答え、「難しくない?」と尋ねると「簡単」と答えてくれた。普段なかなか読まないような本と、思いがけず出会うことが図書館の醍醐味でもあると思う。図書館へ行こうの活動を通して、彼もそのような図書館の醍醐味を味わうことができたのではないだろうか。

—他者と出会う—

ある KUPI 学生は、成美堂出版編集部編集『野球監督の仕事』（成美堂出版、2008 年）という本を借りていた。KUPI の授業の休み時間に、その本が机に置かれていたので、思わず「へえ、こんな本も置いてあるんだね」と話しかけると、近くにいた他の KUPI 学生もその本が気になったようで、「おもしろそうだね」と 3 人でその本について少し会話することができた。人間科学図書館には、教育やスポーツ、美術など様々な分野の本が揃っているため、KUPI 学生それぞれの興味関心に近い本がたくさん置いてある。借りた本から、彼女は野球に興味があるということを知ることができた。また、本がきっかけで KUPI 学生やメンター学生との間に会話が生まれ、本を通してお互いを知ることができたと思われる。

—他者と出会う、自分に気づく—

図書館の席に座って小学校 3 年生の社会科の教科書を読んでいた KUPI 学生がいた。その教科書を読み終えると、今度は 4 年生の社会科の教科書を読んでいた。社会科が好きだったようで、懐かしがりながら、特に神戸市について書かれているページを熱心に読んでいたように見受けられた。彼の姿を見ていると、自分も社会科が好きだったことや、小学校の社会科では自分が住んでいた市や県について勉強したことなど、懐かしい思い出がよみがえってきた。KUPI 全体を振り返ってみても、好きだった教科や嫌いだった教科について、何度か KUPI 学生と話したことがあり、同じ学校経験を共有することで、お互いに親近感を覚えるきっかけとなった。

<さいごに>

この活動をする中で、私自身の図書館へ行く目的が「この本(関連する分野)を借りるために行く」「自習スペースとして使う」と近頃固定化していることに気づく。レポート・論文等の提出が迫るとなおさらそうだ。KUPI 学生が様々な分野の書棚を歩き、自由に見てまわる姿を見て、自分の図書館での行動の不自由さに気づく。

1 月・2 月頃には、私が図書館に行くとすでに KUPI 学生が図書館で本を読み、眺めていることが増えた。この活動の参加者としてそこにいるのか、そうでないのかだんだんよくわからなくなってきた。それがいいなと思う。この活動を通して、大学内での KUPI の場を気持ちだけでも広げられたような気がした。

4) 課外活動「WILL キャンプ」に参加をして

WILL 冬の ESD プログラムに KUPI 学生を迎えて

白根愛子（神戸大学国際人間科学部・ESD プラットフォーム WILL）

活動内容

2024 年 12 月 21 日から 22 日の一泊二日で、神戸大学・ESD プラットフォーム WILL が主催する WILL 冬の ESD プログラムが兵庫県加西市で開催されました。KUPI 学生 4 名、メンター 3 名のほか、学生や社会人、未就学児も含む総勢 39 名が参加し、レクリエーションやワークショップ、食事作りを通して交流を行いました。プログラムの概要は右の表の通りです。

一日目のフリーレクリエーションでは、周囲の参加者とともにボールやラケットを使って自由にからだを動かしました。ESD 車座トークでは、参加者の関心事や参加メンバーに対して訊いてみたいことを自由に出し合い、話をしました。夕食や二日目のバーベキューでは、鹿肉や猪肉を味わいました。鹿肉はメンバーが実際にさばいたもので、「いのちをいただく」ということにそれぞれ思いをめぐらせたことと思います。このプログラムでは、活動だけでなく食事、入浴、就寝の準備や片付けもすべて参加者で協力して行いました。三度目の参加となる KUPI 学生 3 名も初めて参加する KUPI 学生も、初めは緊張している様子でしたが、メンバーと一緒に活動や生活をともにすることで、少しずつ打ち解けることができていたと思います。

プログラム表

	1日目	2日目
朝	集合	朝の体操 朝食 まちへ自由散歩
昼	昼食 フリーレクリエーション ESD 車座トーク	バーベキュー 二日間のふり回り
夜	夕食 一日目のふり回り 夜のフリートーク	解散



バーベキューの様子

プログラムでの KUPI 学生の様子

WILL の活動もベテランになってきている L さんは、活動中もほかの KUPI 学生や参加者を気遣い、たくさん声を掛けてくれていました。朝は「おはよう！」夜は「おやすみ！」と元気に挨拶してくれ、バーベキューやワークショップの時には率先して準備や片付けを手伝ってくれました。

今回初めて参加してくれた N さんは、大好きな自動販売機を話題に参加者との話に花を咲かせている様子が印象的でした。N さんにとって、初めて出会う人が非常に多かったと思いますが、持ち前の知識で楽しそうに話す自動販売機や飲料会社のサービスの話題ですぐに打ち解け、場を和ませてくれました。二日目の朝、まちに散歩に出掛けたときも、「自動販売機」という独特の視点で歩いてくれました。まちあるきの新たな面白さや、そこから新しい学びへつながる可能性を感じました。

OさんもWILLの活動にはかなり慣れてきた様子でしたが、今回はいつもと違う側面を見せてくれました。なんと、バドミントンがとても上手だったのです。これまで知らなかったのですが、実は昔バドミントンをやっていたことがあったそうです。初めて出会ったメンバーとも楽しそうにバドミントンをしていました。朝の体操では大きな声を出して、みんなを元気づけてくれました。

Sさんは、ESD車座トークにて、自身が活動先へ出かけたときの話を参加者全員の前でしてくれました。Sさんの積極的な姿勢に背中を押されたのか、ほかの参加者のなかからも自ら手を挙げて発言する人が出てきました。車座トークが終わった後の時間にも、活動の話でメンバーと盛り上がっている場面がありました。

さいごに

非日常な空間での交流や共同生活を行う中で、周りからさまざまな影響を受け、自分自身を見つめ直すことができたり、仲間とともに新しいことにチャレンジしようというエネルギーが湧いてきたりするという二日間を感じました。KUPI学生みなさん、今回は参加してくださりありがとうございました。また一緒に活動できることを楽しみにしています！



ESD車座トークの様子



フリーレクリエーションの様子

4. KUPI 学生の声

①「とっても楽しかったクピ」

私は度の授業がとても楽しかったです。HC センターで、みんなとお喋りをして、楽しかったです。NくんとLさんとUさんと友達になれたことがすごくうれしかった。なかなか参加してなかったけれど、次のクピでもその次のクピでもすぐに参加でもがんばりたいです。その次のクピでは卒論が入って来るけど、早く卒論がやりたいです。HC センターで、コーディネイターさんの黒崎さんと一緒にお喋りをしたり、土居ちゃんの子どもともであいだっこできたことすごくうれしかった。ちがうこどもでもだっこしてみたいです。土居ちゃんとも喋れたことうれしかった。メンター生さんと友達になれた連絡とれたこと他のメンターさんとしゃべれたことがすごくうれしかったです。また、次のクピ、その次のクピ参加したいです。

②「いろんな先生達」

僕は、この KUPI でのけいけんは、津田先生や関先生などに教えてもらっていただきありがとうございます。卒論などを書いたりしましたが、しこうさくごをしながらしていきましました。本当に、有りがとうございました。黒崎さん、倉智さん、本当に有りがとうございました。

③「楽しかった KUPI」

私は KUPI に初参加しました。メンター生や一般学生とおしゃべり出来た事が嬉しかったです。大学の授業や対話も皆でワイワイと楽しめたのも良い思い出です。スタバで期間限定のフラペチーノを飲んだり、キックベースした事も印象に残っています。そしてディサービスで一緒だった友達に KUPI で再会できたのも良い思い出です。4 か月半という短い期間でしたが、とても楽しい思い出になりました。そして、この KUPI を支えて下さった、黒崎さん、土居さん、一般学生さん、メンター生さん、今まで本当にありがとうございました！来年の KUPI もぜひ参加したいです。

令和7年2月13日（木）

KUPI 最高！！

④「KUPI が終わって」

KUPI の3かいめが終わりました。いのちの歌をうたえたことが、よかったです。むずかしいこともあったけどみんながたすけてくれたのでよかったです。みなさんありがとうございました。

⑤「神戸大学のスターボックス」

木曜日の KUPI で神戸大学のスターボックスに行きました。スターボックスで飲み物を買って KUPI 生さん、メンター生さんと一緒に、お話しをしながら飲み物を飲んで景色を見て楽しかったです。外のしばふの上で皆とお話しをしました。

⑥

私は KUPI が大好きです。お勉強も、お友達やメンターさんとのおしゃべりも、とても楽しかったです。今年は、家族や愛のことを、いっぱい考えました。発表も、階段アートもがんばりました。私は、階段アートにチューリップとハートをかきました。うれしい気持ち、楽しい気持ちをいっぱいかきました。そしてみんなに「ありがとう」を言いたいと思いました。みなさん、メンターさん、先生、ありがとうございました。来年も、また、みんなといっしょにお勉強をしたいです。

⑦

KUPI の勉強をして、津田先生授業が長いと感じた。もっとみじかくしてほしいなあ。

⑧「KUPI のやったダンスたのしかった」

今回も KUPI のダンスとうたがたのしかったです。今回はまたあたらしいメンバーといっしょにダンスとうたのかしをつくりました。今回はいのちがテーマでとってもダンスのふりつけをつくることからとてもむずかしいかったです。でもみなさんのサポートやたすけてもらってとってもすばらしいかندوقするさくひんができてよかったです。3 年かんやったダンスとうたのかしよりも今年のダンスとうたのかしのほうがとってもたのしくよいさくひんができてよかったです。ダンスのさんかしてもらったメンバーにありがとうとかんしゃにきもちでいっぱいです。

⑨

皆んなと一緒に HC センターでお弁当を食べたこと、コンテンポラリーダンスで干支になりきって踊ったこと、ハロウィンの日にスターボックスに行って好きなものを買って、夜景を見ながら食べたことが楽しかったです。

5. 4 回目受講生による卒業研究概要

1) 4 回目の受講生の立場と卒業研究の位置づけ

大学では基本的に 4 年間で卒業となる。よって、KUPI での学びに関しても、これまで同様 4 回までとし、4 回目受講生 3 名には卒業研究を行うことを提案した。なお、今年度より卒業研究の実施に関しては本人の意志に沿うこととし、KUPI 開講時に「卒業研究を行いたいかどうか」について聞き取りを行った。今年度に関しては、3 名全員が実施の意向を示したため、3 名とも卒業研究に取り組むこととなった。授業後などに少しずつ準備を行い、完成物に関しては修了式において発表を行った。

2) サポートについて

卒業研究に取り組むに当たっては、コーディネイター 2 名を中心にサポートを行った。取り組みスケジュールの大枠を 3 名に共有し、10 月～12 月においては、振り返りの時間後の時間に研究内容/発表方法の検討を行った。その後、1 月～2 月においては、決定した研究内容/発表方法に沿って研究/発表準備を進めた。

3) 内容検討について

研究内容に関しては、支援者側がテーマを限定してしまう状況を避けるため、まずは、幅広い質問を盛り込んだ以下のワークシートを記入してもらい、3 名が重要視する内容についてあぶりだしを行った。また、発表方法に関しても幅広い形を検討したうえで、絞っていく形をとった。内容/方法ともに、これまでの卒業生の形式に囚われないよう意識した。

発表内容	
卒業式にて、みんなに向けて発表したい事柄を考えていきましょう！ そのためにまずは、自分について/KUPIについてたくさん書き出そう！	● KUPIでの4年間はあなたにとってどんなものでしたか？
● 自分の好きなこと	
● 自分の強み趣味	● KUPIのみんなに伝えたいことはありますか？
● KUPIで学んだことで印象に残っていること	● これまで書きだしたことをもとに、 KUPIの卒業式で発表したいことを決めますよう！

発表形態について

前回決めた発表内容をどんな方法でみんなに伝えるか、その形を考えてほしいと思います。

- KUPIの4年間で経験した発表方法を思い出してみよう。
どんなものがありましたか？

- ①以外には、発表方法にはどんなものが考えられますか？
(思いっただけ挙げてみましょう！)

- 今回はどんな発表方法にしますか？

● 制作スケジュールを決めよう！

日にち	やること
1月	
2月	
3月	
13日	卒業発表、卒業式（終了式）

* 一週間前までには完成を目指そう！

3名の発表者それぞれにおいては、進め方は一貫しつつも、内容検討のスピードや話し合いに関してはそれぞれの意思に沿った形をとった。

Lさんに関しては、卒業研究を行うという意志はあったものの、何をするかに関してはなかなか浮かばない様子があった。そこで上記ワークシートを活用しながら、テーマを考える部分に比重を置いて作業を進めていった。話を進めていくと、Lさんのなかで、KUPIでの4年間で非常に大きな経験である一方で、授業内容などの記憶は曖昧になっている部分があるようだった。そこで、印象に残った部分を振り返ることも目的として、「KUPIでの4年間」について発表を行うことになった。記憶に曖昧さがある状態では、印象に残った授業をピックアップするのはなかなか困難なため、まずは、4年間の授業内容をまとめたシートを見てもらい、覚えている授業に印をつけてもらった。その後、その印をもとにパワーポイントにて発表の準備をまとめていった。記憶を整理するにおいては、文字ベースでのまとめだけでなく写真も用いて振り返りを行ったことでよりスムーズに作業が進んだ印象であった。4年間で振り返りながらパワーポイントをつくりあげていくという作業はコーディネイターもサポートに入りながら進めたが、最後のまとめのスライドに関しては、Lさんが一人でスラスラと執筆を行う様子があった。特に、後輩のみんなへのメッセージはコーディネイター介入いっさいなしで自分なりに考え文章をねることができていた。普段の授業などで自分の想いを積極的に語ることがあまりないLさんが、このように自分の想いを形にすることが出来たのは、本人にとってとても大きな経験になったのではないだろうか。

Sさんに関しては、「手話」や「動画制作」が得意であった為、今回の卒業制作においてもこれらの案が挙がってくると予想をしていた。しかし、Sさんから「やりたい」と挙がってきた案は「作文」であった。「作文を書きたい」という気持ちは強くあった一方で、何を書くかについてはイメージが持てていない様子であった為、その部分を中心にコーディネイターと話し合いを重ねて行った。Sさんは、KUPIの活動以外に、ボランティア活動WILLに積極的に参加をしており、最近ではWILLでの活動が自身の生活の中心にあるようであった。Sさんの中では、KUPI以外のことを取り上げてほしいのかという気持ちがあったようだったが、卒業研究に関しては何を取り上げて大丈夫ということをお伝えすると、安心

したように「じゃあ WILL について書く」と決意を伝えてくれた。執筆に関しては、ある程度は一人でスラスラと進めることができていたようだったが、一定執筆をしたところで手が止まった様子があった。そこで、追加で書くと内容が豊富になりそうな問いかけをコーディネイターから何点か行った。問いかけに対しては、スラスラと言葉が出てくるとともに、その後文章にするにおいてもスムーズに移行できた印象であった。出来上がったものに関しては、基本的に S さんが書くことを大切に、コーディネイターからは大幅な修正は行わないという形をとった。一方で、発表に備えて、練習を進めながら、息継ぎをするところにスラッシュをひいてもらうとともに、読みながら違和感の持ったところを修正してもらうという、「自分で修正する機会」を意識的に持ってもらった。結果として、S さん自身が「変だ。変えたほうがいいのかも。」と主体的に変更を加えていくことができた。書くで終わるのではなく、振り返りながらブラッシュアップしていくという作業は S さんにとって新たな挑戦であったと思う。また、作文を早く書き上げた S さんは、結果として今年の KUPI についての動画作成も実施をしてくれた。S さんの KUPI に対する想いははっきりとみえた瞬間でもあった。

U さんに関しては、自身の特技である「ダンス」での発表のイメージがすぐに浮かんだようであった。U さんはこれまでの KUPI の活動においても様々な場面でダンスパフォーマンス作品を作ってきた過去があった。今年度の授業においても火曜日プログラムにてダンスパフォーマンス制作に取り組んでいた状況があったため、「ダンスをしたい」という意志は尊重しつつもこれまでと差別化できるような、そして誰に対して発表するのかという部分を意識したパフォーマンスとなるよう話し合いを重ねた。これまでのダンスパフォーマンスにおいては、メンター学生や一般学生を誘ってみんなで一緒にダンスをするというものが多かった。一方で、今回の発表の目的は修了式にて観てくれている人たちに感謝を伝えるというところであったことから、ソロダンスの部分も増やした形での発表をコーディネイターからは提案をした。コーディネイターからの提案に納得/賛同しつつも、やっぱり誰かと踊りたいという気持ちはあったようだったので、一部分はメンター学生に協力してもらって一緒に踊るという形式となった。U さんからは、次々と新しいアイデアが浮かんできた。都度、コーディネイターとともにそのアイデアが実現可能かどうかを検討し、作品を作り上げていった。実現可能かどうかを検討しながら進めていった今回の準備は、ただやりたいことをやるという形にとどまらず、目的や実現可能性に沿いながら進めたという意味においてこれまで以上に U さんにとって意義のあるものになっただろう。

4) 卒業研究を通した成長

これまで 2 年分、先輩たちの卒業研究を見ていた分、今年の卒業生 3 名の中には、「卒業研究をする」という意識とイメージが明確にあったように思う。一方で、「なにをテーマにするか」に関しては、イメージしきれていない部分が 3 名共通にあった。目的、方法、自身の表現、これらすべてを整理し満たしていくことは簡単ではない。けれど、ひとつひとつ丁寧に見ていくことで少しずつやりたいことが明確になっていく様子は、コーディネイターとしても非常にほほえましかった。だた、やりたいことをやりたいままにやる、のではなく、決められた発表時間/環境の中で、できることを考えていく、自分を表現していくという機会は、彼らにとって非常に大きな経験になったように思う。発表会においては、緊張の表情を見せる卒業生もいたが、発表を終えた後は、3 名そろって自信にあふれた満ち足りた表情であった。今回感じた達成感を大切に、今後も様々なことにチャレンジしていったほしいと思う。

5) 卒業研究

卒業研究発表にて実施した内容に関しての概要を以下に記載する。

◎Lさん

<テーマ>

ぼくの KUPI での 4 年間

<内容>

1～4 年目において印象に残っている授業の概要、印象に残っている理由について、写真も示しながらパワーポイントにて発表を行った。まとめの部分において、Lさんがひとりで執筆を行った部分を抜粋する。『後輩のみなさん、悔しいこともあります、楽しいこともあります。悲しい事もあります、最後まで、やり遂げてください。』

◎Sさん

<テーマ>

WILL について

<内容>

WILL での活動内容、WILL の仲間について、WILL の良いところ、Sさんが今後したいことについて作文の執筆を行った。以下は、作文の最後を一部抜粋したものである。『どんなことを今後したいかという、人をたすけれる人になりたいです。その理由は、今もボランティアをしていますもっと色々な所に行って「ありがとう」って言うてもらえるようにがんばりたいと思っています。』

◎Uさん

<テーマ>

感謝の気持ちを込めたダンス動画&当日ダンスパフォーマンス

<内容>

森山直太朗のさくら（独唱）を用いて、ダンス動画を作成するとともに、ラスサビの部分においては、発表当日実際にダンスパフォーマンスを行った。ダンス動画においては、基本的にはソロでダンスを実施、一部分においては、メンター学生と一緒に踊った。撮影に関しては、コーディネイターと相談を行いながら決めた、学内の思い出の場所で行った。また、ダンスパフォーマンス部分においては、協力者を仰ぎ、生演奏を実現した。演奏の最後においては、Uさんからのメッセージが述べられた。

6. プログラムから何を学んだか

1) 授業担当教員

授業担当者の感想

津田英二

火曜日の授業を担当している。この授業は、神戸大学国際人間科学部3年生向けの「社会教育課題研究（障害共生教育論）」との合同授業である。

初年度（2019年度）は「ライフストーリーを語りあう」というテーマを掲げ、2020年度はコロナ禍の最中ということもあり、イギリスのピープルファーストとのオンライン交流をテーマに掲げた。2021年度から現在の形式に移行し、今年度で4年目となった。2021年度は「自己表現」、2022年度は「作詞作曲して歌ってMVを制作する」、2023年度は「SDGs」をテーマとし、その流れで今年度は「いのちをつなぐ」というテーマを掲げた。

このテーマを掲げたのは、前年度のSDGsにおいて、戦争や環境破壊、貧困といったテーマを通して「いのち」をめぐる関心が高まっていたと、私が感じたからである。また、これはうまくいかなかったが、特任助教として神戸大学にやってきた橋田慈子さんが、この授業に関わってくださるという目算もあった。橋田さんは、出生前診断をはじめとした障害者の「いのち」をテーマにした研究に取り組んでいる研究者である。橋田さんは、KUPIが始まる直前に、あえなく千葉大学に職を得て赴任していった。

それでも、橋田さんとの対話を通して、今回の授業のテーマ「いのちをつなぐ」の中味のイメージは少しずつ固まっていた。KUPIでこのテーマを扱うとすれば、優生思想、新優生思想に触れないわけにはいかない。どのように触れるべきか、ということが、授業の構想のポイントだった。国際人間科学部の卒業生で、現在神戸大学附属特別支援学校の教諭をしている遺伝カウンセラーの宇都笑莉さんの存在も頭をよぎった。2023年度の別の授業で宇都さんをゲストスピーカーとして招聘し、遺伝の話をしてもらった。そのおかげで、重たい話を科学的に話すというイメージを持つことができていた。

授業では、生き物には多様性があるが、ずいぶん似ているところも多いのはなぜか、また、私たちがかわいいと感じる哺乳類の赤ちゃんが多いのはなぜか、という問いから始めた。私たちの身体は遺伝子の乗り物で、世代を超えて遺伝子が受け継がれていることに話を発展させ、私たちもまたこの遺伝子を祖先から受け継ぎ、子孫に残していくことで歴史をつくる主人公なのだという話をした。その上で、これまで障害者は、この歴史をつくる主人公として認められないこともあり、中にはそれゆえに殺された人たちもいたという話へと展開した。これらの内容を、週をおいて、思い出したように話していった。

KUPI学生たちの心に何が残ったのか、実はよくわからない。真剣な顔をして聞いている人たちが何人もいて、「そんなのひどい」という声も聞かれた。神戸大学の学生たちの中には、こうした話を知的障害者と一緒に聞くことで、「自分事」として「いのち」を捉えることができた感想に書いてくれた人もいた。

「いのちをつなぐ」というテーマでKUPI学生と一般学生、メンター学生、ボランティアが協働して制作した作品は、どれも味わい深いものだった。制作の意図や背景、過程を知っていればこそ、なおさらだった。私が授業で話した「いのち」の話が、直接的に作品に反映しているとは感じられなかった。しかし、それはそれでいいと思う。ネガティブな話は頭の片隅において、「歴史の主人公として自分にできること」をポジティブに一生懸命考え、表現したことが、深く感じられたからである。

今年度の授業では、表現の質をあまり追求しなかった。制作過程における試行錯誤や対話にこそ、この授業の醍醐味があったと思う。しかし、発表会を終えて感じるのは、来年度はもう少し作品の質に焦点を置いて取り組みたいという欲望である。そのためにも、次は、他者と共感を生み出すようなテーマを持てきたい。果たして、具体的にはどのようなテーマがよいか。半年間、しっかり悩もうと思う。

KUPI での気づき ― 音楽文化史の可能性

大田美佐子

担当授業：

音楽文化史の世界 ― 歌が表現しているもの、歌で表現できるものを想像する

テーマ：歌の中の世界を想像して体験してみる。

授業の内容と受講生へのメッセージ（シラバス）：「音楽文化史」は、音楽と音楽以外が共に歩んできた歴史を研究します。たとえば「歌」。歌は一人一人の「個人的な体験」と結びつくことも、みんなが共に体験した「時代」と強く結びつくこともあります。歌は、音と言葉が結びついて、わたしたちの「想像力」に働きかけ、それぞれの人生や社会にも大きな影響を与えてくれます。「音」を通して「想像力」を働かせることは、皆さん自身の人生を豊かにすることにつながりますね。皆さんは、どんな歌が好きですか？ なぜ、その歌が好きなのですか？ 今回は、皆さんの想像力を働かせて、歌のなかの世界と一緒に旅してみましょう。できれば、皆さんと一緒に歌も歌って、楽しみたいと思います。

10月17日の歌 ― 「イマジン」

10月25日の歌 ― 「翼をください」

授業の実際と授業を通して得た気づき：

KUPI「学ぶ楽しみ」を志向する授業は、複数で運営されている。KUPI生、KUPI生のメンターとしての学生、KUPIのプログラムを運営する人々、そして教員。KUPI生一人一人が抱えている状況や障害の程度は一人一人異なるが、KUPIに関わる複数の人々の相互の理解が深まると、KUPI生の個性が創造的に発揮され得ることに気づいた。その際、教員の立ち位置は「教える人」ではなく、「共に感じ考える人」として、この輪の中に存在することであるように思う。

その気づきから、実際の授業では、知識を伝えることではなく、情報を「共有」して「共に」感じ「共に」考えることを目標とした。具体的には、「歌」を構成する言葉、響きなどを一人一人自由に感じ、表現してもらい、他の人の感じ方を共有し、一人一人が異なる感じ方をして歌っても、「共に歌う」ことが可能であること、楽しいことを体験してもらった。

担当回(2回)の初回では、まず、好きな歌をそれぞれに紙に書いて発表してもらい、それぞれの拘りと歌への愛着を語ってもらう。その後、ジョン・レノンの『イマジン』の歌詞を手書きで書いたものを配布し、それぞれに感想を語ってもらった。歌の言葉から「どんな世界を想像するのか」。一人一人が描く世界は多様性に富んでいた。平和もさまざま、幸せもさまざまなのである。そして、何回か日本語、英語、それぞれの好きな方で歌った。ここで、歌の伴奏は大地を覆う空のように参加者を包み込む環境を作り出し、一人一人の耳と心に働きかける役割を果たす。

2回目の授業では、教員が言葉のない音楽(歌のない器楽)を何度もピアノで演奏して、音から世界や物語を想像して、それぞれに絵として表現してもらった。それを言葉にしてみんなで披露しあった。それぞれが具体的な物語をすぐさま想像して表現するKUPI生の意欲が素晴らしく、言葉のない音が想像力に働きかける力の豊かさを認識した。そして、後半は教員が伴奏を演奏して「翼をください」を共に歌った。

今回のKUPIでの授業を通して、音楽を言葉で思考する以外の「音楽文化史」の可能性を見出した。音楽が人にどう関わるのか、人の営みのなかに「音楽文化史」の可能性を解き放つ作業でもあった。特に今回は「表現する」ことが好きな受講生が多いことに気づき、共に歌い、音楽で時間を共有しつつ伝えるという原点に立ち返った。ジョン・レノン『イマジン』では、忌野清志郎の超訳を最初にゆっくりと受講生に朗読してもらい、自由に感想を言い合う。実際に歌うのは英語でも日本語でも気に入った方で構わない。イマジンを

ひさびさに教室のピアノで弾いてみると、そのシンプルなコードとシンプルに見えて深い願いを綴った歌詞によって、その場の人々の関係がフラットになっていったことを感じた。教える人、受ける人の分け隔てもなく、一人一人が歌の世界を自由に想像する人となっていた。

身近な音の再発見

余田 有希子

2024年11月14日と18日の2回にわたり、「身近な音の再発見」というテーマで授業を実施しました。自身の作曲家としての経験を活かし、創作実践を通じて音の面白さを体験していただくことを目指しましたが、初めてKUPIの授業を担当するにあたり、授業内容の具体化には多くの試行錯誤がありました。コーディネイターの黒崎さん、土居さんとの複数回のミーティングを経て、実現可能な方法や環境を慎重に検討しました。最終的には、身の回りの音へ耳を開くことを目的とし、第1回では「音探しワークショップ」を、第2回では、身近な音への「気付き」を映像の音作りに活かす「フォーリーサウンド作り」を行いました。

第1回の「音探しワークショップ」では、まず私自身が日常生活の中で収録した音をいくつか提示し、クイズ形式でそれらが何の音か、またどのような状況で発生したのかを考えてもらいました。例えば、同じ「足音」でも靴の素材や歩く道、歩く人の感情によって音は異なります。音を通して、人や身の回りの物との関係を考えたり、捉え直したりする中で、KUPI生みなさんも積極的に意見を交わし、良い音の鳴る靴を自発的に紹介してくださる方もいました。

その後、4つのグループに分かれ、「ペットボトル」「ドア」「筆記用具」「紙」を題材に、多様な音を探し、それらを動画で撮影してもらいました。身近な物でありながらも、それらを用いて意識的に音を探すという初めての体験に、最初は戸惑う姿も見られましたが、メンターの学生さんたちのサポートにより、次第にさまざまな音を見つけて録音することに集中していただいていたように思います。

授業の最後には、各グループの動画をまずは音だけで聴き、何を使ってどのように音を出したのかを予想する時間を設けた後、映像と共に正解を確認しました。授業時間内では紹介しきれないほど、多くの音を収集していただき、お互いに音源を予想し合いながら、身近な物から発せられる音の多様性を再発見する過程を、私自身もKUPI生みなさんと共に楽しませていただきました。

第2回では、アニメーションを用いて「フォーリーサウンド作り」を行いました。フォーリーとは、映像を再生しながら、様々な道具を使って効果音を録音する手法であり、映像における「音の演技」とも言えるものです。授業では、実際の映画でフォーリーアーティストがどのように音作りを行っているかを紹介し、その後、イギリスのアニメーション『ウォレスとグルミット』の一場面を題材に音作りに挑戦しました。

制作では、映像の前半と後半を担当する2グループに分かれ、音の案を考えてもらいました。音を出す道具は、第1回で使用した「ペットボトル」「筆記用具」「紙」を中心に、身近な物を自由に組み合わせて使っていただきました。考えた音のアイデアは、絵コンテにメモし、映像に合わせて音を鳴らす練習をした後、録音を行いました。キャラクターの動きに合わせて音を出すのは難しい部分もありますが、タイミングがうまく合った時には、歓声や拍手が上がり、和やかな雰囲気楽しく取り組んでいただいていたように思います。最終的には異なるアイデアに挑戦したいというKUPI生みなさんの積極的な参加により、5種類のヴァージョンを完成させることができました。

「身近な物から発せられる音」という素朴なテーマではありましたが、予想以上に、全員が協力し合い、積極的に取り組んでくださいました。一方で、私自身、進行に集中するあまり、うまく参加できていない方や戸惑っている方への配慮が不十分であった点が反省

点です。今回の授業は、事前準備や当日の運営において、コーディネイターの黒崎さん、土居さん、そしてメンターの学生さんたちのご協力がなければ、実現不可能な内容でした。うまく参加できていない方へのサポートや戸惑う方への積極的な声掛けがあったおかげで、スムーズに授業を進行できました。コーディネイターのお二人とサポートの学生のみなさん、そして積極的に参加して下さった KUPI 生の皆様に御礼申し上げます。

最後に、今回の授業の発想の元となったカナダの作曲家 R. マリー・シェーファーの言葉を引用いたします。

「新しいオーケストラ、鳴り響く森羅万象に耳を開け！音を出すすべての人、すべてのものが音楽家なのだ！」

楽しい「脱線」

加戸 友佳子

今回は2回の哲学対話を担当することになり、私の今年度 KUPI の活動は「ネタさがし」から始まりました。哲学対話をずっとやってきている KUPI 生のお眼鏡にかなう「ネタ」はなかなか思い浮かびづらいものです。複数年度参加している KUPI 生が多いので、前の年との「かぶり」はさけたいし、あまり抽象的すぎると KUPI 生の興味の「フック」には引っかかりづらい（KUPI 生の「フック」は多いですが！）、でも、あまり身近すぎても KUPI 生をナメているみたいだしなあ…と考えをめぐらせ、コーディネイターのお二人に相談しました。自分自身がこれをやって「面白そう」と思うかどうかにも重視しました。そして選んだものは、この二つです。

①プラトン『国家』に出てくる指輪の話（透明人間になれたらどうする？バレなければ悪いことをしてもいい？）

②『アナと雪の女王』のエルサの話（社会的な傷「スティグマ」と、一人になることについて）

もちろん考えの「想定ルート」はなんとなく設定していますが、これは「破る」ためにあります。「脱線」を楽しみながら、対話をすすめていきました。

総じて今回も、KUPI 生たちとの対話は面白いものでした。思いもよらぬ発言に驚き、深い洞察にうなずき、笑い、私が楽しませてもらっていました。①の指輪の話では、悪いことをたくらむ主人公をどう改心させるかが話題になったり、②のエルサの話では、「エルサはどう生活するのが良いと思うか」が話題になったり…興味深い展開をみせていました。とくに②の回ではなんと全員が『アナと雪の女王』を「履修済み」だったので、とても盛り上がりました。

対話においては、「場のコントロールをどこまですべきか」が、毎回最も難しい問題として出てくる気がします。これはファシリテーターをする私の技量の部分が大きく、自分自身の課題を強く感じました。私が楽しんでいた反面、参加者のみなさんが、担当教員としての加戸のほうを向いていた印象もあり、「これでよかったのだろうか…」と考えは尽きません。これからも実践の中で考え続けていきたいことです。

メンター、コーディネイターのみなさまには、いつも助けられています。今回はとくに、発言を引き出すためのサポートをして下さっていたのが印象的でした。本当にありがとうございました！

制作を通じて自己の表現を楽しむ

附属特別支援学校

教諭 黒川陽司 下木なつみ

私たちの学校は知的に障害を持つ児童生徒を対象に教育活動を展開しています。昨年度は陶芸用粘土を使った丸皿づくりに取り組みましたが、今年度は針金、新聞紙、千代紙などを使っての立体表現に取り組むことにしました。題材は「世界で一つだけのりんごづくり」。主に美術表現を授業の中で追求しました。今回は2週連続（2月3日、10日）で合計2回の授業を担当できることになりましたので、制作時間に余裕を持たせ、2回の取り組みで最低一個のりんごを完成させることを目標にしました。

＜なんでりんご作るんですか？→実は、＞

身近なものをモチーフにすることで、つくる対象物のイメージが具体化しやすいことと、大きさや色合い、模様も自由度を持たせて、“失敗”“成功”の二分評価にならないよう留意しました。あるKUPI学生からは「なんでりんごを作るんですか？」と突っ込んだ質問も出て、丁寧に答えましたが、気持ちがあまり向かないようでした。その生徒は作る自信が持てなかったようで、下木教諭やメンター学生ともやりとりする中で少しずつ自分にとってのりんごの形や色合いのイメージを膨らませていました。その結果、“りんご飴”の色合いを表現したい、と持っているスマホで画像を検索して理想のりんごを見つけることができました。この一連の関わりの中でもこちらが予想していた以上のアイデアが生徒から出てきたこと、それを2回の取り組みで完成させることができたことを嬉しく思いました。



＜それぞれのりんごにストーリーが＞

制作工程はまずりんごの大きさを大まかに決め、それに合わせてアルミ針金の長さを調節しました。その針金に新聞紙を巻き付け→ペットボトルなどに巻いて渦状に成形→中に新聞紙を入れておにぎりを作る感覚でりんごの形に仕上げていきました。色は絵の具ではなく、全て和紙を使用しました。見本のりんごのような赤、黄緑を再現したい人、色とりどり、模様もさまざまな千代紙を選ぶ人、それらを散りばめる人など、自分で選んだ和紙を貼り付けていきました。取り組みの中で「この大きなりんごの中に自分のKUPIでの思い出が詰まっています。」と発言する生徒がいるなどそれぞれのりんごにストーリーがあり、仕上がった後の全体の振り返りでも自分の言葉で制作を振り返り、りんごへの想いを語っていたことがとても印象的でした。



＜指導教員間、メンター生の連携の意義＞

今回2週連続の授業となったことで、KUPI学生それぞれが制作に気持ちを向け自己の表現力が存分に発揮できるよう、1回目の取り組みを踏まえて指導教員間で振り返りとそれぞれのグループの中で配慮が必要な生徒の情報共有をした上で、2回目の取り組みの冒頭でメンター学生にどのような声かけや姿勢で授業に入ってほしいのか、1回目の実態を元に適宜伝えました。また授業中も逐一補助にあたって疑問や不明なことがあればメンター学生から指導教員に情報共有するよう努めました。不十分な面もあったかもしれませんが、KUPI学生全員が取り組み、周囲の人の援助を受けながら完成させることができたのは、やはり補助に入る人の有り様はとても大事だと振り返っています。本人たちの思いに寄り添

いながらも、完成に向けた道筋が立てられるように、本人たちと言葉で丁寧にやりとりしながら共に制作での表現を楽しむ姿勢が大事であると改めて感じました。また、メンター学生にとってもその意味を実感したと願ってやみません。

＜取り組みを振り返って＞

今回題材を設定するにあたり、多くの方に協力をいただき、実現に至りました。感謝申し上げます。また、制作の中でも主指導の意図を汲みながらメンター学生が KUPI 学生と一緒に制作を楽しむ姿が見られ、どの人にとっても意味ある取り組みになったのではないかと思います。もちろん、主役の KUPI 学生にとっても表現する楽しさや面白さを 2 回の授業の中で感じ取り、学びを深められたのではないかと思います。仕上がった作品を自宅などで飾り、人生を豊かにする思い出の 1 ページになれば幸いです。

2) 一般学生（「社会教育課題研究（障害共生教育論）」受講生）

①

私が KUPI で感じたことは学ぶことの価値と、コミュニケーションの楽しさかもしれません。ただ、楽しいだけではなく、参加している最中は KUPI が自分にとってどのような意味を持つかわからないモヤモヤを抱えていました。授業から一歩引いてみると「ボランティアやメンターではなく学生として何を学んでいるのか」「支援ではないあり方とはなんだ」とモヤモヤしており、前半に優生保護法や出生前診断の話が取り上げられた際には大きな衝撃を受けて頭の片隅に引っ掛かり続けました。正直、これらの問いに答えは今でも出ていませんが、それでも KUPI 学生との交流が大切なきっかけになっていくのではないかと思います。

KUPI への参加を通してそもそも学びとは何かと問い、私は自分たちの世界を広げていくことだと考えるようになりました。こうした考えであれば KUPI 学生との授業は学びであるはずですが、当初 KUPI が私にとっても学びであるとは捉えがたく感じていました。これまでの学校生活では試験やレポートが課されるように学びと評価はセットだったので、私は学びを狭く捉えて第三者から評価される内容を KUPI に探していたのだと思います。実際の授業は KUPI 学生に任されている部分が大きく、評価とは縁遠く感じます。彼らの表現しようという気持ちや真剣に取り組む姿を見ていると、彼らにとっての学びとは何か考えさせられ、周りの評価などは関係なしにまず自分にとって意味ある学びという原点を示してもらった気がしました。「大切に育ててもらった経験」がテーマの前半の発表で S くんと一緒に準備しているとき、S くんは学部生の研究室にわざわざ来て原稿を書き足していきました。純粋に真面目さを尊敬し、その頑張りや想いが発表で伝えきれていないことを残念に思いつつ、S くんの取り組みが彼自身の学びとして糧になっていくことに誰にも否定しがたい価値を感じました。自分自身と学びの間にある素朴な尊さを感じ、私自身勇気をもらいました。

授業の後半では「いのちをつなぐ」をテーマに発表を考えましたが、テーマの抽象性が高いこともあり話し合いには難しさを感じることも多々ありました。発表方法から内容まで自由だったので Na くんや Ni くんを個性を大事にしたいと考えていましたが、彼らの個性を引き出して形にするのは難しく、私が単なるお手伝いではなく、しかし彼らの発表であり続けるためにはどうしたらよいのか悩みました。最終的に私は発表準備を Ho さんを行うことになりましたが、Ho さんの言っていることがうまく聞き取れなかったり、聞き取れたとしても意味が取りにくかったりと、話し合い以前にコミュニケーションがうまくいかないことがあり、Ho さんにもう一度説明をお願いすることが何度もありました。Ho さんは紙に書いたり、手元のスマートフォンで調べたり写真を見せてくれたりと、伝わらないことに辟易せず説明してくれたので、私も段々と理解できることが増えていきました。共有している世界が広がることで私も「こういうことかな」と見当をつけて確認することがで

き、発表が近づいた週はコミュニケーションがスムーズに行え、意思疎通する楽しさを改めて発見したような気持ちでした。Ho さんが根気強く説明してくれたおかげで発表が完成し、また一通りの説明がはじめからあるわけではなく段々と分かっていくことには徐々に明かされる面白さもありました。

最後に、答えは出ていないながらも「支援ではないあり方とはなんだ」という問いに対する考えを書き留めておきます。今回の発表を通して、私は共同制作していたと思っています。Ho さんの物語を読み取り、発表を通して皆に伝えるのが私の役割でした。今回の活動を支援と形容することもできますが、作品への踏み込み度合いはお手伝いを超えていたと思います。ちょうど原作がある映画制作のように、原作を尊重しながら自分なりの解釈が通っていなければ作品として成立しません。役割が分担されているのは普通のこと、支援という言葉はそぐわない気がします。ただ、自分と KUPI 学生とのバランスは難しく、特に前半では決定権を KUPI 学生に委ねたいと思っていたので、あのままでは私には関係のない彼らの作品になっていたかもしれません。関係ができて、私の解釈に違うとか、そうだとか反応が返ってくることを通じて、私も共同制作の自覚が生まれたのだと思います。発表が終わった後、もう少し工夫できたのではないかと悩みましたが、Ho さんの楽しそうな顔を見てあれで良かったと思えました。

KUPI は大学になかなかない出会いを経験できる場であり、何かを学びにくる場というよりも、学びの種を植えるような場だと思います。

②

私は、前半で取り組んだ大切に育ててもらった経験についての発表でも、後半で取り組んだ「いのちをつなぐ」をテーマにした創作活動でも、感じたこと、考えたこと、思っていることを歌詞にして表現したい KUPI 生と活動することが多かった。私自身、特別に歌詞づくりの経験や才能があるわけではないのだが、偶然か必然か火曜日に教室に行けば、共に歌詞を考えることばかりしていた。この歌詞づくりの経験から学んだことについて考えたい。

歌詞づくりは、既存の歌曲の替え歌をつくる要領で進めた。まず、大切に育ててもらったエピソードや、未来につなげていきたいことにまつわるエピソードを KUPI 生が語り、それに対して私が、気になることをときおり質問したり、少し話をまとめたり、メモをとったりしながら聞くというスタイルで、発表したいことや表現したいことをたくさん挙げた。そして、既存の歌曲の歌詞の文字数を丸の数で描き表し、その穴を埋める形で、エピソードのメモをもとに歌詞をつくっていった。私にとってもなかなか不慣れな作業であったためかなり時間はかかったが、他の一般学生やメンター学生、ボランティア学生の協力もあり、なんとかつくりあげることができた。

この一連の活動の中では、私が提案する歌詞が採用される場面が多くあったが、果たしてそれは良いのだろうかという疑問を常に抱えていた。前半の大切に育ててもらった経験についての発表に向けての歌詞づくりでは、KUPI 生は、大切に育ててもらったエピソードが次から次へと言葉としてたくさん出てくる一方、文字数に合わせて自分の考えや思いをまとめることは少し難しい様子であった。私は KUPI 生の語りをもとにした歌詞を提案してはいるものの、私の書いたメモに残っている言葉を、文字数を調整するために表現を変えて私が歌詞として提案しているため、できあがった歌詞は本当に KUPI 生本人が感じたり、考えたり、思っていることであるのかということで、葛藤していた。後半の創作活動では、KUPI 生は自分の考えていることを言葉として、たくさん表出させることは難しい様子であった。断片的な語りに対して、私を含めた学生らが質問をしながら語りがつくられていった。投げかける質問によって、語りが規定されている部分があるように感じることも多く、KUPI 生自身の考えや思いが十分に反映された歌詞にするためにはどうすれば良いか終始迷っていた。いずれも KUPI 生と一般学生である私が、共同で制作していると捉えればそれまでもかもしれないが、KUPI 生自身のエピソードに私が不用意に触れているような気がして、

もしそのような側面があるならば、かなり注意しなければならないと感じた。KUPI 生自身の思考の方向性をも規定してしまっているような感覚もあった。

経験やエピソード、学びを言葉に落とし込むことは、望ましいことなのだろうか、望ましくないことなのだろうか。彼らが感じ、考え、思っていることを表現に落とし込もうとしたときに、その考え、思いを無理に言葉にからめとろうとすることによって、本来は豊かに形成されているものが、細く表面的なものになり替わっていないか気をつける必要があるように思う。特に今回は、替え歌による歌詞づくりという方法の性質上、文字数の関係などで表現を無理やり当てはめたり、改変したりした部分があるため、なおさら注意のいることだった可能性がある。もちろん、第三者が言葉で表現しようとすることによって、得られる学びもあるに違いない。しかし、無神経に内的に豊かに経験されていることを他者が言葉にからめとっていこうとするのは避けられるべきではないかという考えに私は至っている。思考をするためには、言語を必要とするし、それを他者に伝えるためにも言語を必要とすることが多い。知的障害者の学びにおいては、言語という観点からのサポートが必要とされたり、或いは言語ばかりに依存しない学びの方法の工夫が必要とされたりするというところを経験的に学ぶことができた。私自身も歌詞をつくるということは、貴重な経験であった。その歌詞づくりの中で、思考の適切なガイドになれているか、ミスリードしたり不適切な押しつけになったりしていないか、常に自分自身をモニタリングしながら、様々なことを感じ、考える時間になったと思う。

ここからは、私自身が本授業のテーマ「いのちをつなぐ」に関連して学んだことについて述べたい。

授業内の様々な活動の中で、私自身、たくさんの人に本当にお世話になって、大切に育ててもらって、今の自分がいるということを実感した。大切に育ててもらった人を語るときに、実家の近所に住んでいる人が自分の語りに登場するとは全く思ってもいなかったことであるし、身近な応援したり、育てなくなったりするものとして、部活動の話をした自分にも驚いた。様々な人の関わりがあって、自分という人間の肉体や思考が形成されていることを感じ、これを未来につなげないわけにはいかない気分になった。これからも、周囲の人に育ててもらふことはたくさんあると思うが、徐々に育てる側としての役割を増やしていかなければならないと考えている。

そして、もう 1 つ、何かのテーマについて考えるときには、そのテーマには多様な捉えかたがあるということも学んだ。「いのちをつなぐ」というテーマを初めて聞いたとき、なんかとっつきにくそうで、考えづらいテーマであると感じていた。しかし、KUPI 生の様々な活動や最終回の発表と一緒に取り組んだり、発表を見させてもらったりする中で、「いのちをつなぐ」の多様な側面を見ることができた。私は「いのちをつなぐ」と聞いて、勝手にとても巨視的な人類や様々な生きとし生けるものの生命の神秘のようなものを想像してしまっていたのだろうと思う。もちろん「いのちをつなぐ」にそのような側面もあるが、もっと身近なところに「いのちをつなぐ」に関わることはたくさん存在しているし、考えたい課題や問題、 이슈、トピックは生活圏内に案外あまたに落ちているということに気づかされた。この授業での経験が、視野の広さ、視点の角度を改めて見直すきっかけになった。

私は、障害のある人と関わる機会が普段から定期的にあるため、授業を受け始める前までは、どのようなことが学べるだろうかと少し不安なところもあった。しかし、授業が終わって全てを振り返ってみると、本当に様々なことを感じたり、考えたりしながら、確実に自分自身の学びとなったように感じている。今後もあらゆる背景や立場の人たちが積極的に関わり、多様な学びが生まれる場として KUPI が続いていくと良いと思う。

③

私は大学に入ってからたびたび障害を持つ方について学ぶ機会や、実際に障害を持つ方のお話を聞いた経験はありましたが、実際に知的障害のある方と長時間向き合い、一緒に

活動する機会はこのプログラムが初めてでした。振り返ると、時間を共にする中で、短い期間でも感じる事、考えることがたくさんあったように思います。

まず初回の授業で感じたのは、純粋に”人とコミュニケーションを取るのは難しい”ということでした。振り返れば、私自身初対面の人との会話が得意なタイプではなかったということ、そもそも知的障害を持つ人のコミュニケーションの特性をわかっていなかったということもうまくいかなかった原因ではあると思うのですが、「テーマに沿って話し続ける」こと、「相手の話を引き出す」ことがあまりにできず、早くも心が折れかけたのをよく覚えています。どこまで話し相手のプライベートに踏み込んでいいのかを手探りでやっていると具体的なワードやシチュエーションが出て来ず、かといって Yes、No で答えられるような質問や固有名詞をこちらから提示してしまうと相手のことを蔑ろにしているような気もして問いかけられず、ずっと同じ話のままループしてしまったり、相手が話したいことを話してもらおうとテーマから逸れてしまったりと、相手との対話を通して、自分のコミュニケーション能力のなさに直面する時間でもあったと思います。

その一方で、このように悩むということ自体が、人との会話や作品として作り上げるものの中に「意味」や「結果」を求めている自分自身がいるということだと気づき、考える時間にもなりました。実際、中間発表のパワーポイントや最終発表会の様子を見てみると、ある程度テーマに沿っている発表もあれば、全く違うことを自由に話している発表もあり、それを発表会に参加している人たちが否定しないところを見て、何にもとらわれず個性をまるごと受け入れるあたたかさのある空間であり、自分とは異なる誰かと共に生きるとはどのようなことなのか改めて考えさせられました。また、この環境を鏡として、問いに対して求められている回答を正しく導き、学びの過程だけでなく結果を伴うということが一般的に社会に求められていることであり、障害がない人というのはある意味でそれしか許されていないということなのではないか、とも思いました。「できる」と判断されている側にいる人は、苦手でも、本当はやりたくないという思いを抱えていても、やらざるを得ない環境に置かれていて、できなければ役に立たないとされたり、そのことで自分に自信を失ったりしてしまうこともあるかもしれないけれど、逃げ道もない。そんな生きづらさを感じている人にとって、普段接しているコミュニティの中では抑圧されるばかりかもしれません。そうした人たちにとっても、KUPI の中に流れる個を尊重する雰囲気は、自分自身を認め、力を取り戻すきっかけになるのではないかと感じました。

KUPI は、彼らに接することで障害のこと、ひいては共生について、自分の立場について、今の社会のことについて考えるきっかけを、その場にいるだけでも持つことのできる稀有な学びの場であったと思います。ここで感じたことを忘れず、今後も考えていきたいです。

④

この授業では前半と後半でそれぞれグループやペアに分かれ、発表に向けて取り組んだ。私は主に3人のKUPI学生と関わりながら取り組んだ。それぞれとの関わりごとに学びを記そうと思う。

前半は「大切に育ててもらった私」というテーマで取り組んだ。この発表では感謝を伝えたい人を決め、エピソードを含む形で紹介するというものであった。KUPI学生とペアになり、互いに話を共有し、その話を基にKUPI学生の発表を作り上げていった。KUPI学生と対話し発表資料を作成する中で感じた難しさを学んだ。感謝を伝えたい人を選ぶということが難しかったのだと考えているのだが、話がまとまらず進まなかった。会話を重ねる中で多くのエピソードは出てきたが、誰かに絞ることができなかった。話をする中で“誰に”ということ意識できるように、強調して話したりメモに聞き出して書いたりしたが、意識するのは難しいようであった。エピソードを共有することと、伝える相手を決めることを分けて行うことで対象を決めることができたので、ポイントを絞るということ学んだ。様々な話ができただことは良かったが、発表資料作りの時間は少なく、他のエピソードは取り入れることができなくなってしまったことは残念に思う。また、共に学ぶ学習者と

しての感覚を得ることができ、学びになった。この講義は私たち一般学生と KUPI 学生は同じ受講者であり、支援者という立場ではなく共に学ぶものであった。このことを私はこの講義を受ける中で意識するようにはしていた。過去のエピソードを話し合うときは、私が聞き出すだけではなく、相手からも聞いてくれ私も自分のことを話すことで、二人の話を共有することができた。ペアトークを始めた頃は、どう聞くことで話を進めていこうかと気構えていたが、私に対して「こっちゃん（いつからか自然にあだ名で呼ばれていた）はどうなん？」と話を引き出してくれたので、自然に会話を楽しみ進めることができた。自身が意識しすぎていたことに気づかされ、学習者である 2 人で進めていくということを学んだ。発表資料を作る過程では、内容の選定をする中で進める役割を私が担う部分もあったが、話の共有では共に取り組めたと考えている。この時ペアを組んだ KUPI 学生とは、授業内容以外でも話すようになり、他の授業でもしているように二人で授業が始まる前に様々な話をした。私の髪やネイルの事、相手の推しの事、後半には授業で取り組んでいる内容を話した。共に授業を受けに来ている者として、気構えることなく会話を楽しめていた。内容についての学びもあった。発表を一般学生は行わないが、対話を通して自分の経験を振り返り、自身が大切にされていた、感謝を伝えたいという思いに気づき、学ぶことができた。私もペアの学生と同様に家族を対象と考えたのだが、卒業を控え、新生活を迎える上で改めて自身の成長と周囲の支えを実感できたことはよかっただろう。

私がペアを組んでいた KUPI 学生が欠席で、反対に一般学生が欠席でペア不在の KUPI 学生がいたことから、一人の KUPI 学生と 2 回ほどペアで活動した。メンター学生が聞き出してくれたところ緊張しているということだったが、始めは話ができない状態であった。彼女が前回作った資料を見ながら、時間を共にしつつ、徐々に答えを求める形ではなく話しかけることから始め、少しずつ関係を作り、進めることができた。発表資料を完成させ、練習するところから一緒に取り組んだため、互いに話し合うという形ではなかったが、表現や写真を共に選び、創り上げることができた。私としてはどこまで彼女と関係を作ることができたのか不安であったが、それ以降の授業で会った時に「よっ」と声をかけてくれるようになったので、嬉しく思った。徐々に関係を作ることを学ぶことができた。

後半は「いのちをつなぐ」というテーマで、KUPI 学生が表現方法を選び、表現し伝えるというものであった。個別の活動に入る前には、グループ全体で伝えたいことを話し合い、共有した。その後 KUPI 学生ごとに分かれて取り組んだ。私は KUPI 学生を含む 4 人のグループで、優しさを伝えるというテーマを設定し、歌（作詞）とダンスに取り組んだ。作詞では、これまでに語った思いから歌詞を作成した。他の一般学生をメインとして作成したのだが、KUPI 学生本人の言葉を拾うということに難しさを感じた。どんな内容にするのか話し合う中で、優しさを伝えるというテーマになった。彼は普段から優しくすることを意識し過ぎているという。優しさを常に持ち行動するということは、私に感銘を与えるもので、その点でも大いに学びになった。私はダンスをメインで行ったが、どこまで自分が進めるのか、KUPI 学生の思いをどう入れるのかに難しさを感じた。今回共に行った学生は、言葉で思いを伝えにくいようであった。そのためどんなものを入れたいのか尋ねても、答えを得ることが難しく、私としては戸惑いもあった。私は教育実習でも私にとって理解できる言葉で伝えにくい生徒に対して、活動が望んでのものになっているのかと悩みを抱えながら取り組んでいた。今回も同じ難しさと悩みに直面することとなった。今回の場合は、KUPI 学生の発表であっても、私たちも一緒に学ぶ者として授業に参加しているので、私の考えも入れたらということで、どんな感じが良いのかは聞きながらも、私がダンスを考えた。同じ学習者として参加しているが、発表の主体は KUPI 学生ということで、発表との関わりの距離感を難しく感じていたが、ダンスに取り組む中で、自分の意見をしっかりと伝え入れながら、一緒に発表を作るということなのかなと学んだ。今考えると遠慮があったこともあり、もっと自分の思いを伝えダンスを考えることができたらよかったと思うが、手探りで取り組む中で学ぶことができたと考えている。発表会では歌とダンスを披露し、チーム皆の発表になったのではと考えている。

この授業ではどのような学びが実現されるのか楽しみに思いながら取り組んでいた。ペアやグループで取り組むことで、深く関わることができ気づきや学びが多くあった。障害については他の授業で学んでいた、特別支援学校での教育実習で学んだりしていたが、自身も同じ立場で学ぶということで、難しさを感じながらも、純粋に楽しむ気持ちを持つことができた。

⑤

今回の授業を通して、知的障害のある方と関わることができよかったと思う。知的障害のある方とたくさん話すことができたし、どのような生活を送っているのかということやどのような考えを持っているのかということを知ることができた。そのなかで、人々が障害に向き合おうとすると、知識の有無が大いに影響を与えうることにも実感した。KUPI 生方々と一般学生数人でグループワークをしたとき、ある KUPI 生の方が、別の方に向かって、私は昔あなたと話していたけれど、もう別の人たちのほうが大切になってしまったという趣旨のことを話していた。グループワークであるから、そのグループ全員にそのことが伝わっていたし、話の対象になっている方が膝を抱えるように上体を倒して顔を伏せてしまっても、その話を何度も繰り返していたことを覚えている。また別の方が私は大好きで仲良くしたい、といっているのを聞いて救われる気持ちであった。そう思ってしまうのは相性などの問題もあり、仕方のないことだが、本人の前で、落ち込んでいる素振りを見てまで続けるべきことだとは思えず、驚き、憤りまで感じてしまった。しかし、もしかしたら悪気はないのかもしれないということや自分の話したいという気持ちが先行してしまっているだけかもしれないと思い、その憤りは静まった。その時障害者という色眼鏡でその人を見たことは否定しないが、それがあったからこそ、理不尽にその人を責めずにすんだ。可能であれば、傷ついているのではないかと、とかあとで聞くからね、といった言葉をかけることのようにもっと双方がよい気持ちになれるような方法をとることができたかもしれないという後悔はまだある。障害を理由として差別することは断固として許されないが、その人がどのような障害で、どのような困りごと、苦手なことがあるのかということは、社会や少なくとも周囲の人間に共有することにもよい面があるのではないかと考えた。周りの人との軋轢はそうした知識の共有によって解消され得るものではないだろうか。また、この授業全体を通して、どのような意見も受容する雰囲気があると感じた。特に発表準備の段階では、全員が KUPI 生の気持ちを形にしようと奔走している様子が見られた。は発表会の際にもあたたかい雰囲気があり、こうした雰囲気は、発表者に勇気と意欲を与えるものであると感じた。この授業を受けるなかで、障害共生とは何かということを考え続けており、今でもその結論を出すことはできない。しかし、実際に知的障害のある方と関わりを持つことで、障害共生社会のイメージが少しくつようになった。社会に生きる人間を、障害者とひとくくりにするのではなく、その人自身と向き合い尊重することが重要なのではないかと考えた。

⑥

夏季 GSP プログラムで、SDGs と発展途上国の開発問題というベトナム孤児院の支援を目的とした活動に参加し、現地での活動を想定したアクティビティを伊丹のドリームプラスという施設の方々の協力のもと行った。施設にいる子供は小学校一年生から高校三年生までの幅広い年齢で、それぞれ生きるうえでハンデを負っている子供たちであった。伊丹での実地研修を通して感じたことは、コミュニケーションがうまく取れない分、本気になって彼ら彼女らと接することで生まれた大きな達成感だった。「支援」を行うというのはやはり段階が必要であり、相手を一から「知る」ことなのだと学ぶことができた。

この活動を通して得られた学びがあったため、障害共生教育論の内容にとっても興味を持つことができ、KUPI の入学式の見学を終えた後も、実際に KUPI 生と共に活動を行ってみたいと感じた。

授業開始後、比較的序盤にコミュニケーションをとった KUPI 生は、とてもよく話してくれる学生だった。しかしその分こちらからストップをかけることができず、アクティビティのゴールに持っていくことが大変だった。私としてはその KUPI 生の話の話を遮って発表の内容を進めるよりも、今はただ聞き入れて発表の内容は次の担当の人に任せればいいのではないかと考えてしまった。しかし、お互い楽な方を選ぶよりもお互いが苦勞しても成長できる活動の方法を選ぶ方がこの授業においては正解だったのではないかと振り返る。

私と KUPI 生の間にコミュニケーションの能力や社会的スキルに差があるのは確かなことだと思う。しかし彼ら、彼女らは私たちよりも年上であることが多く、社会に出たら当たり前に敬語を使って目上の存在になるはずだ。そう考えると、授業の中で分かりやすい言葉を使い、まるで年下のように接することが少し変な感じがした。もちろんそれが相手を下に見ていることにはならない、そしてあくまで円滑な会話を目指すうえでの工夫であることは確かだが、私たちと KUPI 生との違いとはいったい何なのかと考えさせられた。

今回の授業を通してペアワークを行った KUPI 生のコミュニケーションのあり方はとても多種多様であった。歯止めが利かなくなってしまう KUPI 生や時間がかかるものの問題なく会話できる KUPI 生、口数が少なく意思疎通が難しい KUPI 生など、様々な会話の方法を学ぶことができたと感じている。自分が担当した KUPI 生の発表を聞いた際にはこちら嬉しい気持ちになれた上、達成感があつた。そして、ペアワークを行った KUPI 生だけでなく、KUPI 生は全員純粋で明るく、自分らしさを持っているところが長所であり自分に無い要素だと感じ、新鮮な気持ちで元気をもらえた。そして、発表を進める中で、映像やライトを使いこなす KUPI 生も多い分それぞれハプニング要素があつたように思う。しかし慌てずに場をつなぐ KUPI 生が多いことにとても驚いた。KUPI 生同士の仲がいいことが緊張しないことに影響していたのかもしれない。みんな堂々としていて聞き取りやすい発声だった。教室の参加者を巻き込んで盛り上げる力がある KUPI 生が多いと感じ、こちらが得るものも大変多かった。

⑦

授業の序盤、KUPI 生とコミュニケーションをとるにあたっての最初の課題は、家庭環境などプライベートの、ともすればセンシティブになりうる話題にどこまで踏み込むかであった。「いのちをつなぐ」が授業全体のテーマで、かつ前半は「お世話になった人」をテーマにスライドを作りプレゼンテーションを行うというものだったので、特に家族の話はどこまで聞いていいのか、無条件に家族＝よいもの、大切な人という前提で話を進めていいものか戸惑った。基本的には KUPI 生に色々な質問を投げかけて話を広げ、発表に使える部分を詳しく聞いて発表の材料を集め、肉付けしていった。私の担当した P さんの場合は、オープンクエスチョンや抽象的な質問だと上手く答えられず困っていらつたので、はい/いいえで答えられる質問や、選択肢をどちらか選ぶような質問を聞くことも多く、話を広げる補助をしているつもりが私の進めたい方向に誘導していないか不安だった。また抽象的で難しい質問でも言葉が出てくるまで待ったり、ゆっくり時間をかければ P さんの意見が出てくることもあるのだが、授業時間の制約や、私が沈黙の間に耐えられないために P さんの発話を待たずに別の話題に移ってしまうことがあり、反省すべき点である。特に時間の制約という課題は自分のグループだけでなく授業全体で感じたことで、最終発表会も予定から 1 時間半ほど遅れて終了したこと、時間や場所のリソースに余裕がないと KUPI のような各自が自由に進める授業プログラムは難しいのかもしれない。

後半は「いのちをつなぐ」発表会に向けて、P さんと一緒に動画制作をした。グループでの話し合いの中で過去―現在―未来の 3 つの観点で考えることになり、P さんの過去と現在は KUPI で 3 年間学んできたことの総集編のようにまとめ、未来は P さんが KUPI で学んだことを活かして羽ばたいていく様子を女優になってアカデミー賞を受賞するという形で表現した。個人的には P さんの KUPI 1 年目の発表であるラップの音楽作品を他の授業で見たことが KUPI を知ったきっかけだったので、P さんの作品づくりに携われて非常に嬉しいか

った。

授業の講義で最も強烈に印象に残っているのは出生前診断がテーマの回である。正直なところ、テーマを聞いたときぎょっとしてしまい、どんな顔をしていればいいのか分からずどぎまぎした。出生前診断の説明の時に即座に KUPI 生たちが「そんなのひどい！」と口を揃えていたのを見て、私が自分事として全く考えていないこと、考えなくてもよい立場にいたことがその時初めて実感として感じられて、衝撃を受けた。まだ自分の中で出生前診断についての明確な意見が持てているわけではないが、授業を通じて認識の仕方に変化が生じたと思う。

メンター学生の方や津田先生のサポートを受けて、ファシリテーションや授業の場づくりの大切さについて学んだ授業でもあった。初期の方は私の緊張や戸惑いが周りに伝わって、ぎこちない場になっていたのを何度もメンター学生の方に助けてもらった。一緒に活動した P さんは KUPI 3 年目のベテランなので、場の雰囲気の面で助けてもらうことが多かった。中盤からは他のメンバーとの関係性を築くことができたので、リラックスして取り組めたし、互いに意見を出し合うことができたように思う。特に実際の作品を制作する段階に入ると、作品がコミュニケーションの間に入るので、コミュニケーションがとりやすかった。

この授業は、大学の他の授業とはかなり雰囲気が異なっていた。授業の最初にテーマソングを合唱することも場の雰囲気づくりに寄与していたと感じる。温かくて、リラックスできて、自由な意見が飛び交う場があればその場での学びはより大きく豊かなものになると思った。KUPI 生の方々が授業でいきいきと発表したり、授業中大きなリアクションを取っているのを見て、自分で学びたいから入った大学/受けた授業のはずなのに普段から欠席や遅刻をしたり、授業に行っても何も反応せずに、ちゃんと学び取ろうとする姿勢をしていない自分が恥ずかしくなったりもした。

⑧

この授業では、前半に大切に育ててもらった私、後半ではいのちを繋ぐというテーマに基づいて、各グループ制作および発表を行ってきた。はじめに、前半の大切に育ててもらった私というテーマで行った活動について述べる。このテーマでは主に KUPI 生の家族との経験を語ってもらうことが多かった。私と同じグループで発表をしていた KUPI 生の方とは、発表内容の前にコミュニケーションの壁にぶち当たった。質問に答えてくれる割合やその整合性が取れている確率が低く、正直制作を行う上でかなり苦労した。しかし、時間をかけて緊張を解いたり関係のない雑談をしたりを繰り返していけばおのずと関係性は前に進んだ。最終的には彼女自身で使いたい写真を選び、独自の文章で家族や愛犬についての良いパワーポイントを作り上げていた。私は良くも悪くもいつも効率を重視してしまい、普段の授業でのグループワークでも一番早く最小限のエネルギーでクオリティの高いものを作るために努力を省く努力をしてしまう。そのようなある種の小賢しいやり方が通じなかったことで、グループワークを通じたコミュニケーションの在り方について改めて考えさせられた。

後半のいのちを繋ぐのテーマでは、紙芝居を制作したのに加え、演劇調での発表を行った。こちらは KUPI 生が博識でやりたいことの多い方だったので、いろいろな要素を盛り込むことができ私自身も楽しかった。該当 KUPI 生の興味がたくさんの方に向いていたことが素直にとっても素敵だと感じたし、それらを臆せず主張してくれる態度が非常にやりやすかった。鉛筆を使いたいと言われた時に自分の専門分野だったので 200 本ほど持っていた。周りに驚かれてしまったが、この際だから鉛筆に興味があるのであればぜひ広げてほしいと思っていた。鉄道や自動販売機について、私の知らないことをたくさん教えてもらい、また絵を描くことに対しても前向きであり楽しそうにしてくれたのでよかった。

何より学びになったのは周りのメンター学生の KUPI 生に対する接し方である。特別なこ

とをしているわけではないが、いつも丁寧に KUPI 生自身のやりたいことを引き出す力があり、一般的なものとは違うコミュニケーション能力の高さを感じた。

⑨

授業を通じて、KUPI 学生たちがそれぞれの「好き」を大切にしている姿がとても印象的でした。ダンスが好きな学生や、特定のアイドルが好きな学生、さらにはお気に入りのサッカーチームを応援している学生など、さまざまな趣味を持った学生が多くいました。各々の「好き」を持っていることは、その人自身のアイデンティティに深く関わっており、自己表現をするうえでとても大事なのだと思います。KUPI の学生たちは、自分の好きなものの話をする時の表情がとても生き生きとしていました。好きなことをしている時間、好きなものに対して情熱を注いでいる時間が彼らにとって大切な時間であり、その気持ちが仲間と共有することでさらに強くなっている様子が見て取れました。これらの「好き」を大切にしている姿を見て、私は改めて自分が日々何を楽しんでいるのか、どんなことに情熱を注いでいるのかを考えさせられました。彼らが自分の「好き」を積極的に表現することで、その情熱が周りの人々にも伝わり、授業や発表の内容がより豊かで魅力的になっていった様子を見て、私自身も、KUPI 学生たちのように自分の「好き」を大切にし、それを他の人と共有できるように努力したいと強く感じました。どんなに小さなことであっても、「好き」を大事にし、その気持ちを表現することは自分の個性を生かすために不可欠なことです。この授業を通じて、互いに「好きなこと」「大切にしていること」を尊重し、共感し合うことができる場にいられたのではないかと思います。それぞれの「好き」が集まることで、クラス全体が一層豊かになり、学びの幅が広がったように感じました。

この授業を通じて、「支援する」という行為が一方的なものではなく、互いに学び合う関係であることを実感しました。KUPI 学生の発表を手伝うことで、私自身が多くのことを学び、考えさせられる場面が多かったように思います。障害の有無に関わらず、それぞれの特性を尊重し、理解し合うことが共生社会の第一歩だと感じるようになりました。今後、どのような場面でも、多様な価値観や表現の仕方を受け入れる姿勢を大切にしたいと思います。

⑩

私は、この授業を受けながら、インクルーシブ教育を実際に導入することの是非について考えました。結論としては、一般学生もインクルーシブ教育によって得られる効果は大きく、教育体制を整えながらインクルーシブ教育を行うべきだと考えます。理由は、普段の生活では得られないような価値観に触れることができ、視野が広がる体験ができたからです。今回の授業では、「いのちをつなぐ」というテーマで、人が生きることの大切さを改めて感じ取ることができました。中学生のころから、クラスに障害のある人がおらず、高校生からは自分に近い属性の人とのみ関わってきた私にとって、この授業は、多様性を体感することができるものでした。この学びは、テストの点数では図れないものの、多様な社会を受け止めることのできる人になるには必要な学びだと思います。また、KUPI 学生の方も、授業を楽しみながら自己表現を楽しんでいたように感じたため、障害のある人が自分らしく生きることができる社会にしていくためにも、このような教育は必要になるのではないかと思います。しかし、一定のフォロー体制が必須であり、従来の学校に取り入れるためには、課題となるかもしれません。今回の授業では、先生をはじめとして、メンターの方も、知的障害に理解のある方ばかりでした。さらに授業の後にも、一般学生に向けて悩みを聞いてくれる時間も設けてくれていました。活動の中で、悩みを抱える人もいたため、このようなフォロー体制がなければ、インクルーシブ教育は一部の学生にとって苦痛な時間になってしまう可能性があると感じました。これらのことを踏まえ、フォロー体制を組むことができる学校や、インクルーシブ教育に興味のある人に向けた選択式の授業として、このような取り組みを広めていくことが大切なのではないかと考えました。

3) メンター学生、ボランティア

KUPI に関わることの意義

火曜日メンター学生 飯田理愛

私は、神戸大学主催のKUPIの火曜日メンターとして、KUPIに携わらせていただき、KUPIの授業を通して、多くのことを学ぶことができた。私自身これまでKUPIのような活動に参加した経験がなかったため、メンター学生として、KUPI 学生とどのように接すればよいのか分からず、緊張と戸惑いの連続であった。

火曜日の授業では、前半に「大切に育ててもらった経験」について考え、後半では前半での授業を通して、「いのち」を次世代にどのように伝えるのかについて議論し、共感的理解と傾聴の精神で協働し、最終回の発表会を成功させることができた。前半での「大切に育ててもらった経験」については、KUPI 学生と対話を重ねて交流を深めることで、KUPI 学生の授業に対する熱い思いや自分自身の成育環境について知ることができた。私自身、KUPI 学生と対話を重ねる度に、KUPI 生と同じ世界観を間主観的に共有でき、授業に臨むことができた。私自身授業を受ける中でKUPI 生自身の表現力の強さや創造力に驚かされた。具体的には、「大切に育ててもらった経験」についてKUPI 生がたくさんの写真を持参し、自身の個々の発達段階に即した話題やその時のエピソードを鮮明に思い出し、メンター生である私に語ってくれた。KUPI 生から語られたエピソードは、彼らのライフヒストリーそのものであり、印象的な内容が大半であった。KUPI 生の中でも、成育歴、家庭環境、障害の特性など人によって環境は異なり、個々の出来事に対する受け止め方も違う。しかし、KUPI 生は、自身の成育歴や環境をライフヒストリーとして熱く語り、自己の感情や思い出を内省化し、今後の成長の糧としていた。私も彼らの熱心に学ぶ姿や内省化の過程を通して、KUPI 生が障害の有無に関係なく、それぞれ弱みや苦手意識を持ちつつも、自身のストレングスを活かしながら熱心に授業に取り組む姿を目の当たりにし、何事にも一生懸命に取り組む努力や姿勢を感じ取った。

また、授業の後半では「いのち」を次世代にどのように伝えるのかについて議論を行い、発表会に向けて制作活動を実施した。制作活動の過程は困難なものであったが、KUPI 生と心を通わせ、個々のニーズや特性に応じた支援を行い、彼らのストレングスを最大限生かすようメンター学生として努めることができたと自負している。最終発表会までの創作活動の時間内で、ライフヒストリーや個々のストレングスを踏まえて、どの様に作品を表現するのかKUPI 生なりに一生懸命考え、試行錯誤を繰り返していた。私は最終発表会に向けて、紙芝居を使った演劇を行う KUPI 学生の支援を行った。KUPI 生と共に紙芝居作りに参加、ストーリーラインを考えるなど連携、協働して作品を完成させる過程で、楽しさややりがいを感じることができた。最終発表会では前半での活動も踏まえながら、個々の KUPI 生が考える「いのち」についてダンスや演劇、ドラマ、紙芝居を通して、自由に表現することができた。最終発表会では、紙芝居を活用した演劇を無事成功させることができ、KUPI 生との円滑なコミュニケーションや顔の見える関係性を構築することができたと考えている。

私はメンター学生として、KUPI を通して、学ぶことへの意義、他者のストレングスを生かすことの大切さ、間主観的に現場を体現することの重要性など様々な事柄について学ぶことができ、大変貴重な経験をさせていただいた。メンター学生として過ごした半年間はあっという間であり、彼らとの「絆」を構築でき、人とのつながりの大切さ、共生社会や福祉社会の実現について内省する機会をいただけた。今後、KUPI で学んだことを糧として、様々なことに挑戦し、大学での学びや課外活動を更に充実させていきたい。

私は、火曜日と木曜日のプログラムにボランティアとして参加させていただいた。毎回の授業や KUPI 学生一人一人について、いくらでもエピソードが書けそうなぐらい、豊かな半年間であった。ここでは私自身の気づき、学びを中心に、特に印象的だった 2 つのことについて振り返ってみる。

1 つ目は、津田先生の「KUPI 学生の世界観を楽しんでください」という言葉である。これは、ある日の火曜日のプログラムで、R さんに、子どもが生まれる仕組みをあれこれと工夫して伝えようとしたが、なかなか理解してもらえず苦労したという話が振り返りの時間に出た際に、津田先生が話したことである。津田先生は、正しい知識を教えるということよりも、KUPI 学生がなぜそのように考えているのか、その世界観を深掘りしてみてください、その世界観を楽しんでくださいとアドバイスされていた。私も、KUPI 学生と発表準備を進めるなかで、KUPI 学生が考えていることが正しくないのではないかと、あるいは、いい発表のためにもっとこうすべきではないかといった悩みを感じることもあった。しかし、津田先生の言葉を聞いて、私の基準で KUPI 学生のことを考えてしまっていたことに気づかされた。重要なのは、KUPI 学生を私の枠にはめるのではなく、ありのままの KUPI 学生の世界観を楽しむということであり、このことがその後の KUPI での関わりの道標になった。

実際に、KUPI 学生の世界観を共有できた瞬間は、とても嬉しいものだった。10 月 24 日の木曜日のプログラムは、オムニバスの音楽の授業であった。歌詞のない音楽を聴いて、どんなことを感じたか、そこにどんな物語があるか、自由に書いてみるというもので、私は「出会いと別れ」ということを書いた。一方、0 さんは熱心に人の顔を描いていた。誰の顔か尋ねると、自分の似顔絵だと言う。私は、似顔絵を描いていることに戸惑いつつも、本人の描きたいという意志を尊重して、その様子を眺めていた。どうして似顔絵なのだろうか、音楽から物語を想像するということが難しかったのかもしれないなどと考えていると、0 さんは似顔絵を描き終えたあとに「やさしさ」という文字を付け加えた。その瞬間、その週の火曜日のプログラムで、0 さんは自分のことを優しい性格で、一度も怒ったことがないと話していたことを思い出した。なるほど、音楽を聴いて、そこから優しさを感じて、優しい自分を絵にしたのか、と納得した。同様のことが、1 月 16 日の木曜日のプログラムでもあった。その日は「愛ってなに？」をテーマに、それぞれが考える愛について書いてみるという日だった。私は「愛とは、肯定すること」と書いた。0 さんは電車の絵を描いていた。うまく描けたのだろう、離れた席に座っていた私をわざわざ呼んで見せてくれたほどであった。木曜日のプログラムでは、たびたび「愛」をテーマに活動を行った。そして、「愛」にも様々な愛がある。自分が好きなもの、愛してやまないものを絵で描いたり、「KUPI」の「K」と掛けて「kind of love」ということについて対話したこともある。きっと、0 さんなりに、愛について対話や考えることを重ねていった結果、自分の好きなもの、すなわち電車を絵で描くことで、愛を表現してくれたのだと思われる。KUPI 学生の世界観を深掘りすることで、一見関係ないことをしているように見えても、実は、その人なりに理解したことをその人の仕方では表現しているのだということに気がついた。

2 つ目は、KUPI 学生の言葉を待つことの重要性である。多くのメンター学生、一般学生が、どこまで KUPI 学生を誘導してしまっているのか、これは本当に KUPI 学生本人が思っていることなのだろうかという悩みを経験したと思う。木曜日のプログラムの哲学対話では、「誰かが発言しているときは聞く」という当たり前とも思えることが徹底されている。KUPI に参加すると、このことの重要性を身に染みて感じるようになる。KUPI に参加して間もないころは、KUPI 学生とのコミュニケーションについて、特に、待つということに難しさを感じることもあった。言葉が出てくるまで時間がかかる KUPI 学生もいて、なかなか言葉が出てこない様子を見て、意味が伝わらなかったのかと思い、つい続けざまに質問の仕方を変えて質問したり、選択肢を示したりと自分なりに“工夫”をしたつもりだった。しかし、そのことが結果的に KUPI 学生の考える余地を奪っていて、私の提案に「じゃあ、そ

れで」と答えさせるだけになってしまっていたかもしれないと感じるようになった。それ以来、つい私から話してしまいそうになるのをグッと堪えて、KUPI 学生の言葉を待つことを意識した。また、待つことで、KUPI 学生同士のやり取りが生まれたこともあった。階段アートを作成する際、中央に大きく「K」という文字を描くことになった。M さんが率先して「K」を描き始めたが、「K」が中央よりもやや左上に描かれていて、私を含め、多くのメンター学生がもう少し中央に大きく描いた方がいいのではないかと感じていた。メンター学生の振り返りの時間では、その時のことが「気まずさ」という言葉で表現されていた。しかし、「K」がやや左上に描かれたことで、別の KUPI 学生から「下に UPI と描いたらどうだろうか」との提案が出た。また、あるメンター学生は、「P」の文字の空白の部分を「ハート型にしたらいいいのではないか」ということを思ったが、あえて口に出さなかったという。すると、KUPI 学生同士が話し合うなかで、「ハート型にしよう」という意見が出て、「KUPI」のデザインが決まっていた。些細なことではあるが、KUPI 学生の意見、言葉を尊重するメンター学生の姿勢が表れていた。そして、この待つという姿勢は、KUPI 学生にも意識されていた。木曜日のプログラムで「愛ってなに？」をテーマに授業が行われた際、K さんは KUPI のことを「愛」と表現していた。KUPI の中では、みんなが自分の発言を待ってくれる、聞いてくれる、それが愛だと思う、ということ話をしていた。KUPI 学生の発言を待つということが KUPI の中で共有されており、これが KUPI の安心感を作り出していると思う。

このように振り返ってみると、KUPI への参加は戸惑いや葛藤の連続であった。しかし、そのような葛藤があったからこそ、学ぶ楽しみをより感じられたし、自らが前提としていた基準や思い込みに気づくこともできた。その点、メンター学生同士の振り返りや検討会の時間は、各々が感じた葛藤について共有し考えることができる有意義な時間であった。最後に、KUPI 学生と関わるうえで、1つのヒントになったと感じる詩の一節を紹介する。これは、パット・パーカーという黒人の詩人の詩の一節で、偶然にも後期の大学院の授業で目にしたものである。「私と友だちになる方法を知りたい白人へ」という作品で、「まずは、私が黒人であることを忘れること。その次に、私が黒人であることを決して忘れないこと」という一節である。同じ一人の人間として KUPI 学生と関わること、それと同時に、障害をめぐる問題について考え続けること、そのどちらも重要である。以来、私はこの詩を胸に KUPI に参加していた。次年度の KUPI に参加される方々にとっても、この詩が1つのヒントになれば幸いである。

KUPI で過ごしたキラキラした時間

火曜日ボランティア 土井 雅貴

(1)「障害者フォビア」の頃の私

私は、県立工業高校の教員である。今年度は1年間休職して、神戸大学大学院人間発達環境学研究科の1年履修コースに進学した。研究テーマは、工業高校等の「ものづくり」の場において困難を抱えている発達障害者やグレーゾーンの者たちに持前の能力を発揮してもらうにはどうすればよいかを考えることだった。

実は、私は小学校卒業から約30年間、障害児・者と関わることがなかった。同級生にも受け持った生徒にも、障害児・者はいなかった。「発達障害」という言葉と出会ったのも、7,8年前のことである。それまでの私は「障害者」に対して勝手なイメージをもち、潜在的に忌み嫌う感情を抱いていた。「潜在的に」と表現したのは、そのような感情は決してオモテには出さず、表面上は「(障害に対して寛容的な)良い人」を演じていたからである。今思うと恥ずかしい話であるが、当時はそれを「当たり前」と思って生きていた。

契機となった7,8年前、仕事で発達障害の子どもたちを対象とした1泊2日のキャンプ運営を担当することになった。それまで学校現場でさえ障害児・者を扱ったことがなかった私は、キャンプに関わるスタッフや大学生と一緒に研修を受け、同僚の力も借りなが

ら準備を進めていった。キャンプ当日は常に緊張状態で過ごしていた。彼らが日常では体験できないことや大学生らとのふれあいの中で「安全に」「楽しく」過ごしてもらうように努めた。このキャンプを通して、彼らの「命」を預かり、彼らの「真実の姿」を目の当たりにし、彼らの保護者の気持ちになって「自分事」として障害児・者のことを捉える経験ができた。その後、県の事業で身体障害者（視覚障害・聴覚障害等・筋ジストロフィー患者）の文化的活動を支援する仕事を担当したことも合わせ、社会教育の枠組みの中での「障害者の学びの場」について私自身の認識が少しずつ変化していった。

学校現場に戻ると、現任校では発達障害やグレーゾーンの生徒が多く在籍していた。「どうすれば、彼らが分かるように教えることができるのか？」試行錯誤を続ける中で、私の潜在意識から「あの感情」はどんどんと薄れていった。

(2) KUPI 学生との出会い

神戸大学大学院進学後、神戸大学が運営する「よる・あーち」に参加した。初参加の日、自己紹介をする間もなく、成人女性への学習支援を手伝うことになった。学習支援を終えて談話スペースへ戻ると、そこは多様な人々の「居場所」であった。幼児や小学生から青年・大人もいる。障害のある者もない者も関係なく、遊んで笑っている。正直、戸惑った。

その後、毎週金曜日の夕方に「よる・あーち」へ通った。顔見知りとなり、多くの利用者・スタッフと話をするようになった。秋の「あーち合宿」では、キャンプファイヤー運営を手伝った。仲良くなった彼らとは、障害のあるーなしや支援ー被支援といった関係性ではなく、同等の「仲間」となった。

10 月になり、KUPI がスタートした。私は、KUPI 学生・一般学生・メンター学生をサポートするボランティアとして、火曜日の授業をお手伝いした。KUPI 学生の中には「よる・あーち」で仲良くなった者もいる。毎年 KUPI に参加している者も初めて KUPI に参加する者もいる。一般学生・メンター学生も緊張する中、火曜日最初の授業が始まった。

授業テーマは「いのちをつなぐ」、テーマソング「いのちの歌」、みんなは命が繋がって存在していること、これまで大切に育ててもらったことについて語り合う、一連の授業の流れがとても美しく、とても尊い時間であった。「こんな授業ができる大人になりたいな」同じ教育者として羨ましく、清々しく感じた。

そうしてスタートした、火曜日 KUPI。前半は、色んな KUPI 学生と一般学生とが語り合うための橋渡し役が多かった。「知的障害のある青年」といっても、障害の程度は違うし、その人それぞれに個性も違う。一般学生・メンター学生にも個性や得意・苦手なことがある。それらを観察しながら、少しでも語り合いを通して「学び」を得てほしいと思って「橋渡し」していた。例えば、KUPI 学生の Aさんは自身の思い出を語ることもできるし、一般学生の問いかけを理解することもできる。ただ、色んな話をしているようで「ある一つの話題」にすべて集約される。意図的なのか、その話題しか思い出せないのか、他に思い出がないのか…、一般学生もその真意を掴めていない様子であった。そこで、その話題について深掘りすることを勧めてみた。KUPI 学生も一生懸命に思い出しながら、語り続けた。

KUPI 学生の Bさんは、最初はなかなか私に対して心を開いてくれなかった。ある時、私は一般学生とともに、妊娠から出産、親となることについて説明したが、Bさんは納得しなかった。その日のスタッフふりかえりで津田先生から「Bさんはそのことについて、どう考えているんだろうね?」「KUPI 学生たちの世界観を楽しんでね」と助言があった。翌週は Bさんの妊娠観・出産観・親子観を語ってもらった。一般学生や私が考える「それ」とは異なる、Bさんの世界観が語られ、私たちはそれを受け入れた。「それって、こういうこと?」という私からの問いかけに対して、Bさんは「うん、そう!」と嬉しそうに微笑んだ。それからは一般学生に任せて他の KUPI 学生を担当することになった私に対して、Bさんは出会う度に笑顔で手を振ってくれるようになった。Bさんの世界観を受け入れたことで、私は Bさんに受け入れてもらえた。

KUPI 学生のCさんは、頭の中でたくさんのことが思い浮かび、それを直ぐに話してしまう。以前に話していたこととは全く異なる方向性のことでも、今思いついたことが「最善」となってしまう。当然、先週に話していたことは「無かった」こととなり、今週また新しい話がスタートしてしまうため、作品づくりは難航した。最終発表会直前となり、先週までに撮り終えていた映像作品を二人で確認した。Cさん本人も喜んでくれたが、そこでまた「やっぱり、こうしたい」という撮り直しのアイデアを話し出した。そこで私は、撮影には協力者が必要なこと、他のみんなも発表会直前で焦っていることを伝えた上で、Cさんに対して「他のみんなの作品は完成できなくても良いから、Cさんの作品づくりに協力してほしいってこと？」と、少し意地悪な問いかけをした。するとCさんは「それは嫌」と言った（続け様に「みんなは完成できるから大丈夫」と根拠のない思い込み発言）。「それなら、協力してもらえぬ人に頼んでみようか？ダメな場合は諦めようね、時間も決めようね」と話すとCさんは納得した。撮り直しシーンを聞くと「別にこだわって撮り直すほどではないのでは？」と思い、Cさんに聞いてみた「何で、このシーンを撮り直したいの？」すると、Cさん自身が幼いときに、病院ではお母さんの膝の上に乗せてもらって診察や検査を受けていたことが語られた（なんで先週はその話をしなかったの！）。「いのちをつなぐ」ことに対するCさんの世界観では、幼い頃の母親との思い出を自分が母親（役）として重ねたいのだ、と私は思った。Cさんの作品は、みんなの協力を得て無事に完成した。

他にもDさんのこと、Eさんのこと…と、私にとってKUPI 学生とのエピソードは、まだまだある。私はKUPI 学生との関わりを通して、人間的に成長できたと思っている。異なった表現をするならば、KUPI に関わる前と後とでは、私の「人生観」が変わった。障害児・者に対する支援者－被支援者という関係性ではなく、個性ある「一人の人間」とどのようにして繋がる（関係性を築く）のか、私自身がこれまで「当たり前」と考えていた世界観が、私の中で再構築されていった。いつしか「あの感情」は、跡形なく消えた。

(3) 一般学生・メンター学生の「学び」

長文となるが、あと少しだけ書きたい。KUPI 学生とともに学び合った神戸大学生・院生である、一般学生・メンター学生についてである。

KUPI の学びのシステムにおいて素晴らしいと感じるのが、現役学生・院生たちと協働して学び合う場であることである。一般学生は、KUPI の趣旨や講義内容に興味・関心をもって受講した者もいれば、ただ単位を取得するために履修登録した者もいる。そんな彼らがKUPI 学生との協働を通して、自らの学びへと没頭する姿にはとても感動した。メンター学生は、これまでに一般学生としてKUPI 学生と共に学び合った経験からメンター学生としてサポートする側に身を置いた者、自身の研究や興味・関心からメンター学生を志望した者等の動機は様々だが、KUPI 学生の学びをサポートし、親身になって取り組み、時にはKUPI 学生の学びの機会を奪っていないだろうかと葛藤する彼らのことを私は尊敬している。

新型コロナ禍を経て、人と人とが直接関わらなくても関係性を築き、物事を前に進めることが容易にできる社会となっている。これまでの私のように、自分自身の価値観・世界観と異なる者と交わらなくても良い人生を送ることはできる。だが、KUPI という場合は、KUPI 学生だけでなく、一般学生・メンター学生という今後の日本・世界を背負って立つ若き人材とが、お互いに異質な価値観・世界観と出逢い、語り合い、関わり合い、学び合い、葛藤して成長していく。あえて混ざることによる化学反応は、KUPI 学生の人生に彩りを与えるとともに、一般学生・メンター学生の人生にも障害観・共生観やインクルージョン認識の変容を促し、インクルーシブな社会形成における自身の役割について考えることに昇華する。特にメンター学生は、KUPI 学生と関わる時間が長い分、成長分子が多い。

私がKUPI ボランティアとして関わる際に、心に決めたことがある。「絶対に学生たちの学びの機会を奪わない」ことである。長い教員経験があったので、KUPI の授業内で学生たちよりも先に「気づく」ことは多々あった。その度に、学生たちが気づくのを待つように

した。時には、私からの声かけや彼らの背中をそっと押すことで、学生たちの学びを促すように気遣った。当然最初から、私以上に KUPI 学生のことを理解して、関わっているメンター学生もいた。後半にかけては、彼ら自身の個性を生かして KUPI 学生と向き合い、私にはない観点で発言し、私だけでは得られなかった気づきを与えてくれることが増えた。

結局は、そのような学生たちの姿から、私は多くのことを学ぶことができたのである。

KUPI で過ごした半年間は、私にとってキラキラした時間だった。多くの「仲間」もできた。あえて、「障害を越えた」とは書かない。障害があろうがなかろうが、一人ひとりの「人間」同士として異質な価値観・世界観・人生観が混じり合うことで、昨日とは異なるそれらを再構築していく。これからも多くの人が関わって KUPI での実践を続けていくことが、明日のインクルーシブな社会の実現に向けて積み重ねていく「礎の一部」となることを願っている。

4) KUPI を見学して

学ぶ楽しみ発見プログラム (KUPI) 」を見学させていただいて

筑波大学障害科学学位プログラム博士前期課程 嵯峨摩子

見学させていただいた 2 日間で、「学ぶ楽しみ発見プログラム (KUPI) 」のたくさんの魅力を知ることができました。特に魅力を感じたのは、教員から学生へ一方的に与えられる学びではなく、問いに対して考え、自身の言葉で表現し、ともに学ぶ仲間の声に耳を傾けるといった、考え、表現する学びを実践されていたところです。KUPI 生の方々の意欲的に取り組む姿や、発表後の達成感に包まれた表情がとても印象的でした。授業だけではなく、HC センターで食事をする時間や休み時間といった、メンターの方や先生、仲間とコミュニケーションをとる時間があることも魅力の一つと感じました。KUPI が生活の中に組み込まれ、大切な居場所となっているのではないかなと思いました。

また、メンターの学生の方や先生方が発する言葉や表情が温かく、安心して学ぶことができる、安心して考えを表現できる環境があると感じました。立場に関わらず、お互いを尊重する関係があるからこそ、心地よい学びの場がつくられるのだらうと思いました。

豊かな人生につながる学びとインクルーシブな環境といった、大学だからこそ実現できる学びの場の魅力を実感いたしました。

2 日間大変お世話になりました。本当にありがとうございました。

7. コーディネーターの感想

「安心できる場所」

黒崎 幸子

KUPI のことを「安心できる場所」と表現する人が多い。半数以上の KUPI 学生は再受講をしているが、改めて毎年通うのはなぜか？について考えた。一番の理由は大学で学びたいからで、「知らないことをみんなと学ぶのは楽しい」ということは KUPI 学生を見ていると伝わってくる。アンケートで「KUPI の 4 か月半は長いですか？短いですか？」という問いに対して「短い」に○印をつけている人がほとんどだ。ご家族からは「前期も KUPI を開講してほしいです」と聞くこともある。授業や活動が魅力的だから次も参加をしたい、というのは本当にその通りだと思う（自画自賛！）

オムニバス授業は大学でしか学べない内容ばかりで、難しいがおもしろくて楽しい。発見の連続で 90 分はあっという間に終わる。KUPI 学生から「今年は〇〇先生の授業はあるの？」と質問を受けることがあり、「ない」と答えると本当に残念そう。コーディネーターのとしてなるべく KUPI 学生のリクエストに答えたいと思う。と同時に一年前に受けた 1 回の授業のことが心に強く残っていることに嬉しさを感じる。

津田先生の授業は、毎年提示されるテーマが楽しみで、普段生活をしていても考えないことについて考えるきっかけをくれる。たいていが難しいテーマで、一般学生やメンター学生は、どうすれば KUPI 学生に伝わるのか、100%伝わらなくても KUPI 学生が感じたままでもいいんじゃないか、などあれこれと考える。悩みは尽きないが、その悩みを共有して楽しもうとする姿はとても頼もしい。KUPI 学生にとっては、自分の思ったことを何らかの形で表現するという経験をするわけで、おそらく大学（KUPI）でしか経験できないことだ。グループやペアで活動をしていると、一般学生は KUPI 学生が自由に発言をしたり、距離感が近いことに戸惑いを感じることもある。津田先生やメンター学生は一般学生のことに気を配り、授業後にお悩み相談会なる時間を設けたりしている。そしてメンター学生は、自分たちが発言し過ぎると一般学生の学びを奪うことにならないか？と常に考えている。それぞれの立場で迷いや葛藤を抱えながら KUPI 学生の思いを形にする経験は、学生のみならずにとっても印象に残る出来事だと思うが、その道のりは険しい時もある。

木曜日の活動は教員の参加がないため、他の曜日に比べて少し空気が違う。KUPI 学生は「今日は何をするの～？」と言いながら教室に入ってくる。「いやいや、シラバスを火曜日（二日前）に配って説明をしたよね？」と伝えるが、週末に近いこともあり、まったりと集まり、ゆるやかに始まる。最初に「最近、何があった？」というテーマで対話をするのがあり、それだけで活動の前半が終わりそうな時もあったが、KUPI で接するだけじゃわからない KUPI 学生の日常や仕事の様子を聞くことができた。メンター学生においても同様で、みんな色々なことがありながら、夕方 5 時に大学に集まってくるのね、みんながんばっているね！！と心の中で何度も思った。もう母親の心境だ。

対話のテーマを出し合った時に KUPI 学生が出したテーマで個人的に気になるものがあった。「パートナーは必要かどうか？」「人間の関係性ってなに？家族の関係性はどのようにまくできるのか？」「食べ物や飲み物について、どこからが食べ物でどこからが飲み物？」など。どれも興味深い。KUPI 学生の考えていることをもっと知りたくなる。機会があればみんなと話してみたい。

今年度は「階段アート」を制作した。何を描きたいか？に始まり、テーマを決める時も対話をしながら無理に決めようとせず、流れに任せてテーマを決めていった。「無理に決めようとせず」というのはとても難しいが、自然にそうなるのはファシリテーターの力だ。KUPI で対話をする時に、「それではテーマを決めます。意見をどうぞ」的なことは一切なく、色々話すうちに、「じゃあ、どうしようか？」と決めていく。哲学対話などを研究しているメンター学生の井上さんが中心となって、メンター学生が交代にファシリテーターを務めて、話しやすい雰囲気の中でたくさんの対話を行った。

KUPI 学生は自分のことを話したいだけ話せる（聞いてもらえる）場所として、KUPI では何でも話し、安心できる場所になっているのではないかと思います。しかし何でも話すことに對して、これは考えなのか？わがままなのか？さて、どうやって受けとめようかと私はいつも迷っていた。その線引きを私の物差しで決めてもいいのか？効率性を考えて話していないか？KUPI では全て受けうけとめたらいいじゃないか？いやでもやっぱり、とあれこれ考えると答えが出ないが、その時に一番良いと思う言葉をかけている。メンター学生も迷うことがあったのではと想像する。毎年たくさんのメンター学生に出会うが、みなさんとても温かくて真面目で賢く、KUPI や KUPI 学生のことを深く考えてくれる。無理をし過ぎていないかと心配になるほどだ。その寄り添い方はどこで学びましたか？と思うくらい丁寧で、「人生何週目ですか？」と聞いてしまったこともあるくらいだ。

「共に学ぶ」は對等に何でも言い合えることなのか？KUPI 学生の話聞いてできることはやるよ、ということなのか。それもメンター学生によって考え方は様々でシチュエーションにもよると思うが、とにかく毎年出会うメンター学生に驚く。なんでもできてしまうから、投げ出さずどんなオーダーにも答えようと頑張る。それらはメンター学生の学びや経験になっているが、時にはできないと言ってもいいのでは？とも思う。4 か月半の期間限定だから頑張りがきくのか？もしも KUPI が通年のプログラムなら、もう少し違った関係性になるのか？と考えることがある。頑張ろうとしている時に無理をしないで、というのは違うような気がするので、ありがとうと伝える。このようなメンター学生の頑張りと心配りがあるからこそ、KUPI 学生の学びの充実があることを伝えたい。

KUPI 学生にとって安心して話せる場所がどこかにあり、それが KUPI ならとても嬉しい。KUPI 学生や知的障がいのある方にとって、安心して話せる場所はいろいろあるだろうが、見つからないなら KUPI に来てほしいと思う。KUPI では学べる楽しさが充実しているだけでなく、安心して話せる場所になっているようだ。そしてこのような学びの場が全国の大学で広がってほしいと強く願う。片道 2 時間近くかけて通学しなくても、自宅から近くにある大学で学べたらいいと思う。片道 1 時間や 2 時間かけて通学する KUPI 学生を支えるご家族、帰宅が 21 時になるのを心配そうに待つご家族のことを思うと、KUPI は大勢の方のご理解とご協力があって成り立っていると改めて感じる。

オムニバス授業でご登壇いただいた先生方、貴重な経験をさせていただき誠にありがとうございました。次年度もよろしくお願いいたします。

今年度は例年以上にボランティアの方々が多く、メンター学生と一緒に授業や活動を支えてくださいました。深く感謝を伝えたい。今後ともよろしくお願いいたします。

「ありのままでそこに存在することの楽しさと難しさ」

コーディネイター 土居綾美

コーディネイターとして二年目の参加だった今年度。昨年度とは比べ物にならないくらい速度で KUPI での日々が過ぎ去ってしまったと修了式を終えた今感じている。私は、2019 年の KUPI 一年目開講の頃に一般学生として、その後メンター生も経験し、現在、コーディネイターとして活動をさせていただいている。思い返せば、体感速度は年を経るごとに加速してきた。それがなぜなのか、ここで振り返ってみたいと思う。

一般学生として参加した一年目、そのころ私は大学三年生であった。当時の私は KUPI のほかにも障がいを持つ方と関わる機会があった。なぜそういった機会を持つようになったのか、自身の動機は不思議ともう思い出せない。けれどなぜか主体的に参加をしていた気がする。そんななかで KUPI にも関わることとなった。そんな私の中には、少しずつ大きくなる「疲れ」があった。その「疲れ」から、障がいのある方との関わりに対して足取りが重くなったのも事実である。しかしこのときは、この「疲れ」がなんなのかわからなかった。障がいのある方に対してネガティブな気持ちがあったわけではなかった。それなのになぜ。

そういった「疲れ」はあったものの、KUPI での活動も結局毎年なんだかんだで参加をしてきた。すると、慣れとはまた異なった部分で、「疲れ」が減少してきたのだった。その経験を重ね、少しずつ見えてきたものがある。それは、この「疲れ」は、自分自身がある意味がんばっていたことによって生じていたものということだ。がんばるといっても、何かを努力していた、などという意味とは少し違う。「いいことしないと」「いい人であらな」となどという無意識に「良い」に囚われた事による自分を取り繕うためのがんばりであった。「良い」への囚われが減少したのには明確なきっかけがある。それは、「しょうもないな」と思ったことだった。

KUPI 学生たちは、本当に自由にありのままの自分で学びを楽しんでいた。時には、ある意味わがままとを感じるような主張もあるが、そういったことを言葉にだせるほどに、彼らは自分の気持ちを大切に、素直に学びを楽しんでいるのだ。その素直さが学びをより一層豊かなものにしていると、参加しているとひしひしとを感じる。そういった姿を明確に意識したとき、自分が「良い」人であろうとしていた部分があることが、とってもしょうもなく感じた。そんなことを意識することに果たして意味があるのだろうか。そうやって、「良い」自分を捨ててからは、KUPI での活動に対して変な「疲れ」はほとんどなくなった。KUPI 学生たちと関わっていると、新たな気づきや学びがどんどんと生まれてくる。今年度明確に意識することのできた学びは、この「ありのままの楽しさ」である。

一方で、このことに気づいたとき、ありのままでいることの難しさにも同時に気づかされた。KUPI に参加するメンター学生、一般学生の方たちと関わっていると、「そんなに KUPI 学生の要望に答え続けなくてもいいよ」「嫌なことは嫌って言ってね」と声をかけなくなる場面がたくさんある。こう言いたくなっていたのは、ありのままで KUPI の空間に存在することができていないのではないかな？無理していないかな？と心配になる気持ちだったのだと思う（私の思い過ごしかもしれないが）。ありのままでいることが難しかった/できなかった自分と、ありのままでいられている自分。どちらが良いということではないのかもしれないが、どちらも経験した一人として、メンター学生、一般学生の方たちにも、自分にとって楽なあり方を見つけ出してほしいと思っていたのだと思う。どんな人にとっても、楽にあれる空間、そんな場をつくっていくにはどんな工夫や意識があればいいのか、そんなことを引き続き考え続けたいと思った。

上記にとどまらず、今年度もたくさんのことを学ばせてもらい、そして純粋に KUPI という場を楽しませていただいたと感じている。改めて、オムニバス授業を引き受けて下さった先生方には、豊かな時間/空間を提供いただき感謝の言葉しかない。また、個人的には年度初めの 2024 年 4 月に出産を終えたばかりということもあり、育児と仕事を両立できるのか、迷いながらの活動でもあったのだが、このような状況の私を快く受け入れて下さった運営の方々、そして子どもにやさしく関わってくれた KUPI 学生には感謝してもしきれない。そういった皆さまのやさしさのおかげで、今年度も楽しく KUPI に参加することができたと思う。来年度は家庭の事情によりいったんコーディネイターとしての活動をお休みさせていただくが、来年度以降も、遊びに来たい、自分の居場所であると純粋に感じさせていただいていることに本当に感謝をしている。

8. KUPIに関する論文、発表、原稿掲載

次ページより KUPI に関する論文抄録、発表の要約、特集記事などを掲載いたします。
(WEB 版では、上 5 つの掲載を省略します)

- ・2024 年 3 月 17 日 発達保障研究集会自由研究発表要旨 (川地亜弥子・赤木和重)
- ・2024 年 7 月 25 日 月刊きょうされん TOMO No. 533 p. 8-10 (川地亜弥子)
- ・2024 年 8 月 4 日 世界哲学会議発表抄録 英語版/日本語訳 (加戸友佳子)
- ・2024 年 9 月 1 日 基礎教育保障学会発表要旨 (勅使河原君江・川地亜弥子)
- ・2024 年 12 月 8 日 教育目標・評価学会自由研究発表要旨 (川地亜弥子)
- ・2024 年 10 月 13 日 知的・発達障害青年の自立と学びを考える全国フェスティバル
(井上太一・澤井正弘)

大学で学ぶことの意味についての対話

井上太一

澤井正弘

(神戸大学大学院博士後期課程)

(神戸大学臨時用務員・KUPI 学生)

【趣旨】

いま、障害者の生涯学習推進の流れのなかで、大学の資源を活用した障害青年たちの学びの機会がいっそう模索されてきている。神戸大学においても、文部科学省からの委託事業として、2019 年度より知的障害のある青年たちに向けた「学ぶ楽しみ発見プログラム」を実施してきた。(このプログラムは英名の Kobe University Program for Inclusion から頭文字をとって KUPI という愛称で呼ばれている。以下、KUPI と表記する。) 神戸大学の臨時用務員として働きながら KUPI で学生として学んだ澤井と、神戸大学の大学院で学びながら KUPI に支援役割を担うメンター学生として参加した井上は、互いに大学で学ぶことの意味について対話を交わした。本発表では、この対話を振り返りつつ、さらに対話を続けながら、知的障害をめぐる大学の展望について検討を行う。

【概要】

1. KUPI とはどのようなプログラムか

KUPI は、大学後期に当たる 10 月から 2 月までの期間に実施され、1 年目は聴講生制度により、2 年目からは特別な教育課程の履修証明制度に基づいた、組織的な教育プログラムである。毎年 8 月から学生募集が始まり、9 月の入学選考において、面接と作文を中心に本人の学ぶ意欲が確認され、10 名程度の学生が入学する。なお、KUPI に参加する知的障害のある青年は「KUPI 生」、また KUPI 生の学びのサポートのために雇用される神戸大学の学生は「メンター学生」、その他の神戸大学の学生は「一般学生」と呼称される。

プログラムは週に 3 日間、17 時から 20 時まで行われる。一日は「社会教育課題研究(障害共生教育論)」という一般学生の履修科目を共に学び、また一日は「よりよく生きるための科学と文化」というテーマで人間発達環境学研究科を中心とした複数の教員がそれぞれの専門性を活かして行うオムニバス形式の授業を受け、もう一日は「話し合う! やってみる!」をテーマとして KUPI 生が主体となり、互いのやりたいことや学びたいことについて、対話を介して共に考えながら、実際に取り組んでゆく。

2. 大学で学ぶことについて

KUPI 生の多くは、昼間に働き、あるいは日中活動に参加してからプログラムに参加している。2009 年から大学の臨時用務員として勤務している澤井にとって、まずもって大学は働く場所であった。構内の草刈や清掃に従事するなかで、大学生との出会いはあるものの交流は少なく、KUPI によって大学における学習者として主体化されてやっと、大学生との親密な交流が増えてきた。いま、澤井にとって大学は、働く場所であり、学ぶ場である。

澤井は、他者との交流、とくに大学生との交流を大学で「学ぶこと」として意味づける。また、交流とは「しゃべること」とであるという。この「しゃべること」とは、とくになにか決まった目的をもって話すということではなく、即興的にその時々において話したいことを話す、あるいは、なにか話さなくても、話しうるような関係として場に共に居ること。それが澤井にとっての「しゃべること」であり、交流であり、すなわち「学ぶこと」なのである。そのとき、各授業における学習の内容は、

個人が理解に向けて取り組むべき課題ではなく、互いに交流するきっかけとなる話題として引き受けられる。井上は、澤井による学習の意味づけを、すこしうらやましく感じつつ、共感をもって聴いた。

3. 特別な学びの場をめぐる葛藤について

井上は、澤井による学びの意味づけに共感しつつも、葛藤を抱いた。それは、そのような学びの交わされうる場が、大学全体において、限定的かつ特別な空間として保障されることをめぐる葛藤である。KUPI 生とメンター学生、一般学生との間で互いに「しゃべること」が、そのまま学びとして経験されるという実感は確かにあった。構造的に出会いにくかった他者、あるいは出会っても交流を持ちにくかった他者との間で、即興的に交流し、対話的な関係が生まれてゆく過程そのものが、KUPI における「学ぶこと」になっていたと言える。しかし、KUPI の教室の外において、また KUPI が終わった後、あるいは大学を卒業した後においては、再び構造的なライフコースの分離に引き戻されてしまいうる。

4. 知的障害青年という主体性について

澤井はこの葛藤について「あんまり気にしない」と応える。そのほうが「楽にいけるから」である。とはいえ、気にならないというわけでもない。たとえば、大学で出会う人々の教授や学生に対する態度と、自分達に対する態度の違いを感じる場面がある。そうした場面では、憤りを感じる。しかし、そのように自分自身が体験した問題や感情が、過剰に障害をめぐる大きな問題や抗議として引き受けられてしまうこともまた、嫌なのである。すなわち、澤井にとって独自のものであるはずの葛藤が、知的障害をめぐる一定の普遍性を持つ葛藤として引き受けさせられるとき、その主体性は澤井ではなく、知的障害青年としての主体性であり、その主体性を引き受けることは澤井にとって「楽ではない」ことなのである。

【結論】

KUPI を事例として、澤井と井上は大学で学ぶことの意味について対話を行った。前提として、それは知的障害青年としての主体性ではない、澤井正弘、あるいは井上太一における、独自の主体性において語られうることが確認された。その上で、我々にとって大学で学ぶということは、大学教育が提示する主題を、個人が理解に向けて取り組むべき課題ではなく、互いに交流するきっかけとなる話題として引き受け、「しゃべること」によって他者と交流することであった。なお、この「しゃべること」とは、とくになにか決まった目的をもって話すということではなく、即興的にその時々において話したいことを話す、あるいは、なにか話さなくても、話しうるような関係のうちで場に共に居ることとして語られた。

9. おわりに

川地 亜弥子

KUPI とは不思議な場所です。

見学に来られた人に、「ほとんどの KUPI 生さんが、仕事が終わってから駆けつけて、大変なはずですが、ほとんどの人が休まずに来るんです」というと驚いていました。修了式の時には KUPI 生さん全員にスピーチしてもらうのですが、その時に「来年もぜひ来たい！」という人もたくさんいます。疲れていても、お給料がでるわけではなくても来たい、そんな場所なのです。

KUPI は自分のやりたいことが広がる場所です。

今年度、3 人の KUPI 生さんが、受講 4 回目（4 回目の修了式）ということで、記念のスピーチ・パフォーマンスをしてくれました。KUPI の講義で学んだこと、「はなしあう、やってみる！」の中で訪問した場所、やってみたこと、広がった世界。修了後もそれぞれのやりかた・場所で、やりたいことをしっかりやっていきたい、という思いが伝わってきました。後輩へのメッセージもありがとう！

KUPI の修了後も、いろいろつながってやっています。

私は KUPI で作文の授業を毎年担当しているのですが、そこで「書くのがおもしろい！」と思った人たちが、作文サークルをつくりたい！と盛り上がり、KUPI 生さんが私に「顧問になって下さい」と LINE をくれました。サークル名は、「神戸大学つづり方サークル（略称「書きサー」）。2021 年度のことです（たしか・・・）。

最近は休眠状態だったのですが、先日その KUPI 生さんが私の作文の授業に来てくれ、「作文の題を出してほしいです！」とのリクエストをもらい、「確かに！私もしばらく何も出してなかったなー」と思い、久々に題を出してみると、何と、サークル立ち上げメンバーだった元メンター生さん・現メンター生だけでなく、「こんなことやってるよー」ときいた人まで作文を投稿してくれ、また盛り上がっています！

KUPI は、みんなのやってみたい・おもしろい！という思いで続いています。

まさに「学ぶ楽しみ発見プログラム」なのです。

今年は、撤去されてしまった階段アート（安全のためなので仕方ないのですが）のリニューアルもできて、また一つ（もっとかな？）、みんなの心のアルバムに写真が増えました。

KUPI 生さん、メンターさん、ボランティアさん、講義を担当して下さった先生方、そしてコーディネイターさん、保護者のみなさんのおかげで、今年も無事に KUPI の活動を終え、こうして報告書を発行できることをうれしく思います。

来年度も、間違いなく、新しい「学ぶ楽しみ発見」があるプログラムになることでしょう。ぜひそうなりといいなと願っています。

本冊子の編集者・執筆者

津田 英二 神戸大学人間発達環境学研究科
川地 亜弥子 神戸大学人間発達環境学研究科
黒崎 幸子 神戸大学「学ぶ楽しみ発見プログラム」コーディネイター
土居 綾美 神戸大学「学ぶ楽しみ発見プログラム」コーディネイター
井上 太一 神戸大学人間発達環境学研究科博士後期課程（メンター学生）
荒木 香帆・飯田 理愛・于 晶・竿 美羽・埜田 つみ綺・畢 雅然・輪玉 芳野
以上、神戸大学人間発達環境学研究科博士前期課程（メンター学生）
荒木 絃汰・木佐貫 ヒカル・高橋 杏奈・田渕 珠理・西井 明・藤田 八重・藤原 ゆうな・
松本 えりあ・山本 結子・吉川 裕香
以上、神戸大学国際人間科学部（メンター学生）
橋澤 慧 神戸大学人間発達環境学研究科博士後期課程（ボランティア）
土井 雅貴 神戸大学人間発達環境学研究科博士前期課程（ボランティア）
今井 進吾・倉石 悠平・張 瑩
以上、神戸大学人間発達環境学研究科研究生・科目等履修生（ボランティア）
張 絵迪 元 KUPI 学生（メンター補助）

本実践研究にあたって、神戸大学大学院人間発達環境学研究科における人を直接の対象とする研究審査による承認（No.454）を受けています。

2024 年度 文部科学省委託事業

「障害者の多様な学習活動を総合的に支援するための実践研究」

「神戸大学・学ぶ楽しみ発見プログラム」

～知的障害青年のための大学教育の創造～

2025 年 3 月発行

神戸大学大学院人間発達環境学研究科

〒657-8501 神戸市灘区鶴甲 3-11

Tel 078-803-7970 fax 078-803-7971

